
反逆の名を冠するIS

田中太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反逆の名を冠するIS

【NZコード】

N4068X

【作者名】

田中太郎

【あらすじ】

IS∞Infinite Stratos∞（仮）からタイトル変更しました

二人目?の男性IS操縦者は、イタリアの代表候補生!?
そんな彼が、ISの物語をどう引っかき回すのかは、作者にもわからぬ…

現在第4章 タイトル更にちょびつと変えました。
あんまり変わつてないので、大丈夫だと思いますが…

プロローグ（前書き）

「」で来るところは、寛大な心の持ち主なんですね？

ホントに駄文ですよ^__^

しつけですがいいですね？

プロローグ

三月中旬 今日は高校入試の日で藍越学園の試験会場で受験生2人が迷っていた

「なんでこんなに分かりにくい造りしてるんだ？」の建物

「ていうかいつになつたら着くんだシアンン？」

「安心しゅ一夏 僕の長年の勘と最近の勘がもうすぐ何かやな」と
が起こると叫びて、「

「全然安心できない！？ てか100パーセント勘じゃねーか！！」

「今日もいじつゝみをありがとう一夏君でことでそこ」の扉を開けてみよ「この辺りがあやしこと思われる」

「えーお前の勘当てにならないしな…」

「いいからあがる一夏」

「はいはい」 ガチャ

ドアを開けるとそこには中世の鎧を思わせる機械があった

「ん？あれってどうだよな？」

「ほつよくわかつたな一夏のくせにあれは純日本産第一世代型HS
打鉄だな」

「へーよくしぃてるなーって一夏のくせに立たなんだよー。」「これ触つていいのか?」

「オイ」「ハムシスンナ」

「さわってみよ!」ペタ キイイン

高い金属音の後シアンはHSを纏っていた

「……………」

「……………あれ?」

バタバタガチャ HSの起動音を聞いて職員たちが駆けつけてきた
「あー君たち!」は関係者以外立ち入りき…ん…………?」

「あれ?君男だよね?」

「そうですよ」

「なんでHS乗ってるの?」

「さあ?わかりません?」

「うん とりあえずおつとそいつの體も触つてみて」

「……えつー?ああはいはい」ペタ キイイン

「なんでだらり…なんで乗れるの君たちは?」

「「わあ?わかりません」」

「じゃあ上に連絡取つてくるから!」「しまつてね」タツタツタ

Г Г ..

あれからすぐ偉い人たちが来ていろいろ話を聞いたかいつまんで言
うと

イタリア国籍を持つシアンはイタリアの代表候補生でISに乗れる男一夏はただのISに乗れる男の称号を手に入れたということそして彼らはIS学園に行くことになった

プロローグ（後書き）

ホントに駄文ですいません^__^

感想とかもらうと感激で泣いちゃいます

次は設定を載せたいと思います

こんな駄文でよろしければ次回も宜しくお願ひします

10月12日 改行しました

設定1（前書き）

ひとつあえず^は設定1まだ増えるかもです

主人公はそこそこ強い？

設定1

藍川シアン　日本人とイタリア人のハーフイタリア　国籍
藍色の髪でミディアムぐらいの長さ

身長：180cmぐらい

体重…65キロぐらい

容姿…上の上でほとんど日本人違いは眼の色が青いくらいこれがコンプレックスなのでいつもはカラコンをしている　また男女問わず十人が十人振り向く　モデルはロスカラのライの髪を藍色にした感じ分からない人はいつか天魔の黒ウサギの鉄大兎の髪の色を藍色にした感じ

性格…年上には敬意をはらい敬語を使う天然で鈍感

特技…束に習つて少しだけハッキングが出来るだが束と比べてなので一般的に見たらかなりできる趣味でハックすることもある

あと一夏や篠や鈴とは幼馴染あと弾

年上に好かれる

一夏の家とはお隣さん

両親はすでに他界しており唯一の肉親である兄は今現在行方不明

イメージC/Vは神谷浩史

あと言い忘れていましたが

更新はホントに不定期になると思います
でも行方不明になることはありません

やるやくはやめかかし（・・・・）キ

次は明日更新ですかと思こます

設定1（後書き）

専用機が思いつかない

高機動型の機体にしようとは思っているのですが
武装が…名前もイタリア語にしなくちゃいけないし

なにか良い案があったらこの駄目作者に教えてください^_^ (—)

m ^

10月11日後付け設定増やしました

第1話（前書き）

じぱりくは一日一話で行けたりうです

そして短いです

第1話

シアンと一夏は午後8時になつてようやく解放された午前8時¹ころから約12時間の質問攻めを受けた二人はクタクタだったりあえず家に帰つた……帰つたのだが……

「あれ？ なあシアン俺とお前の家の前にいるあの人たちすげえあやしいぞ！？」

シアン達の家²の前には百人ぐらい居るんじゃね？ つてぐらいの人がいた

「ん？ ああああは……あは……だれ？」

「いやしらねの一のかよ」

こんなやり取りをしていたら誰かが一人の存在に気がついた

「ん？ ……あれだ！ おいついたぞあつちだ！ …」

ダダダダダダダダダダ

二の方に雪崩のよう³に人が流れ込む

「 「うおわああああああああああああああ」」

ヒュン ドガン 当然何かが現れて人を吹き飛ばした

「 「 「 「 「ふぎゃ」」」」」

「 ……ふうやれやれ外が騒がしいから見に来ればお前達か」

誰かと思つたら

男より男らしい漢の中の漢メンホアメンズ織斑千冬さんだ。た

二冬山人（如）

「あれ帰つてたんですか？」

「私の家だ帰つてきてもいいだろ？」

「くれて」と微笑する

かでんくんだ!

「そ、うなんですかでもまあ助けてもらつた事には変わりはありませ
んしなにかお礼を… そ、うだ今度一緒に買い物でも? なにかおげりま
すよ」

「そつそつだなでは今度の休みにでも…」

「そんときほー夏も行くよな?」

「…どうした？ 固まつて…」

「はあ」

「？」

こうして夜は過ぎて行つた

第1話（後書き）

ヒロトーンはキタニに決定しました（^○^）＼

シアンが鈍感つことにしました 後付けで済みません（^-^）
どうでもいいですが

タイトルは未定なのでよかつたら考えてください（^-^）ミヽ

専用機の名前と武装と武装の名前も募集しております

10月12日 改行

第2話（前書き）

主人公の専用機のアイディアまだ募集しています

あとなにかネタ等ありましたら教えてください♪ m(ーー) m <

実は火曜日からテストなのにバイトと小説しかやってないorz

第2話

シアンたちがエスを動かした翌朝

またしても玄関に人だかりができていた

「（二）れじやあ郵便受けに行けないな…しかたない」

寝癖を直し着替えて外に出て行つた

ガチャ ドアを開けた瞬間カメラが一斉にシアンへ向いた

「あーみなさんこれ以上うちのまわりをうわついたら警察呼びますよ~」

「……………（だまれ糞がき）」「……………

「わかりました一社だけインタヴューを受けましょ」

「……………ほんとですかー?」

「あーでもさつき黙れ糞がきとか思つた方のインタヴューは受けませんついでに警察呼びます」

「……………」「……………」「……………」

「おやあ？みなさん糞がきとか思つたんですねかあ～」

「これ以上ないくらいの黒い笑みを浮かべながらケータイを取り出し

110と押しかけた時

「 「 「 「 「すいませんでしたつ！――！」」」

約百人のジャンピング土下座＆すいませんでしたの大合唱

これに満足したかのように気を付けてくださいねえーと言ひ残しアンは部屋に帰つて行つた

この場にいた約百人の気持ちは見事に一致した

藍川シアン…おそろしい子つ！

一方一夏は約百人の話を適当にあしらいながらも聞いていたようやく終わりが見えてきたところに
シアンのところをあきらめた百人が来て一夏は死にそうな顔をして
いた

ちなみにシアンはそれを上から見ていた

そして

「一夏ザマア ウウ」

と思つたのは秘密だ

第2話（後書き）

毎度毎度短いです

春休み編はこのぐらいの長さにしようと想っています

ちなみに筆と鈴は友人ですあとついで弾む

感想待つてます

設定2 機体設定（前書き）

アル様 eru様の意見を参考にしましたありがとうございます

設定2 機体設定

主人公機

イタリア製第三世代型IS「テンペストディリベリオン」
大型ウイングスラクター4機が付いており高機動戦闘を得意とする
スピードは現存するISの中でトップクラス
待機状態はリング

名前の由来

テンペストディリベリオン（以下リベリオン）はイタリアの主力機
テンペスト？型の派生形で

テンペスト？型は本来砲撃重視のパワータイプだったがリベリオン
はスピードに特化した機体で

従来のテンペスト？型とは全く逆のコンセプトで開発された事から
反逆の名を冠する

テンペストになつた（テンペスト？型がパワータイプなのはオリ設定です）

武装

ジャッジメント
断罪者…グリップから銃身の手前まではリボルバー、銃身はオート
マチックという変わった銃の形状をした武装。Dグレのクロス＝
マリアンの武器、威力が非常に高く連射が可能
その弾丸は軌道を外されてもロックしたターゲットを追い続ける。
この時イメージインターフェイスを利用する第三世代兵器。Dグ
レを読み直していくいいなあと思ったので…あ！どういう構造な
のか？

や物理現象とかはもう無視してください。六発撃つたらロード

が必要　一発¹とて S・E を 20 くらいい消費する　半分くらい W-i
k-i 参照

アンタレス…アサルトライフル、リベリオンの銃器の威力は、高いが連射性に欠けるという

弱点を補うための武装。弾数が多いしかも、威力はなかなかに高い。使いやすい武装。

アイザイアン・ボーン・ガン…サーマルガン…電磁誘導ではなく入力された電流のジュール熱にて弾体後方の導体をプラズマへ相変化させ、これに伴う急激な体積の増加を利用するもの。瞬間的なプラズマ化に伴う爆発を利用するため、比較的低いエネルギー量でも一定速度未満であれば高い初速が得易い代わりに、プラズマ膨張速度を超えた初速を得ることはできない [Wikipedia 参照](#)

ピコタヌキ
同田貫…近接ブレード 子連れ狼の主人公の愛刀と同じ名前 漢字
なのはブレードの開発者が「漢字つてかっこよくね?」という鶴の一聲で決まった

バイルバンカー…漢のロマンとつき電磁誘導型、隠し武器

グングール…簡単に言つと槍、どつちかといふと西洋の。ラシスとは違う。

後ろの方に付いたブースターを推進力にして、ジャッジメント 断罪者の

能力をそのまま使つた武器。ただし、ブースターは1回使う¹ことに

整備が必要になる

つまり戦闘中は1回しか追尾機能を使えないと言ひ事。

唯一仕様の^{ワンオファビリティ}_{特殊才能}：コントロールロ・コンスマモ

自身のこれを発動すると、5分間だけSEの消費を1／2に抑える
ことが出来る。

最後に機体力ラーは紫で関節部分は赤です

設定2 機体設定（後書き）

今日中にもう一回更新できるかもしません

タイトルは仮なので良いのがあつたら教えてください
ネタ等も待っています

感想まつてます

10月11日改稿

ほほバクリ

10月12日さらに改稿

エタニティーボールは使いづらいので削除しました

多分まだ変わります

第3話（前書き）

今日は3話と4話の一部構成です

ほんと ~~うつ~~ ~~うつ~~なので読まなくてもいいです
いやむしろ読まない方がいいかも…

第3話

ある日シアンに「イタリアから電話がかかってきた
なんとも専用機を作りたいからイタリアに来てほしい」
しかも旅費は向こう持ちだから無償
ただでイタリアに行けるとシアンははしゃいでいた

「やあ一夏ー！」

「おひシアンベーハた今日はテンションが高いな」

「お？わかるか？今日イタリアから電話があつてな専用機を作った
いからイタリアに来てほしいんだとかしかも旅費は向こう持ちこん
なにいいことはない」

「へえいいなーお土産頼むぜ」

「おりわかつた」

「絶対だからな」

「わかつてるつて」

そして当田

シアンは家の前で迎えを来るのを待っていた
3分後金持ちが乗るようなリムジンが来た

「…………まじか」

「マジです時間がありません早く乗ってください」

30分車で移動したのち飛行機で数時間かけて…

「やつてきましたイタリアイエーハイ

「…………」

「…………（スルー～）」

「行きませぬおこできますよ」

「すいません（誰のせいだよ）」

そしてリムジンで一小一時間やつてきたのは…

「エーハーハー

「イタリア首相のお屋敷です」

「…まじでか」

「粗相のなによつこ」

「では案内します」ひびひになつます

無駄に長い廊下を進み

「（）で首相がお待ちになつておりますのでお入りくださいもつ
度申し上げますが粗相のなによつこ」

「はー…」

ギィードアを開けると

クル 椅子を回転させて初老の男が確認できた

「やあ君がシアン君だね？よくきたね疲れただけ…お茶をお出ししてくれ」「はいただいま」

ああシアン君そこにかけてくれたまえ」

「は、はあ失礼します」

「そんにかしらないでくれたまえ」

「えー…いやしかし…」

「堅苦しこのはじがてなのでな」

「はーわかりましたですがすぐ」

「つむまあすぐなれるだろ」

「さてと本題に入ろうか今回来てもらった理由は専用機を作るためだったね？」

「でも君の専用機もつほとんど完成してるんだよ」

「…? (ほけたか)のおひさん?」

「おどりのこたかね?」

「ええまあ」

「ハハハまあ仕方ないだろう

今回君に来てもらつたホントの理由は君にイタリアをよく知つてもらうためなのだよ

よく知らない国のI-Sに乗るのもいまいちだろう?

だからこのイタリアをよく知つてほしい

まあこんな理由じゃあ経費を下せないからね建前を用意したのだよまあ一応一度研究所の方にも顔を出しておいてくれながらながとすまんな

今日はもう休んでくれそと車と私の部下とsのものをまたせているその者たちと一緒にホテルへ行つてくれああ明日もその者たちと一緒にイタリアをまわってくれ

「わかりましたいろいろとよくしていただきありがとうございます」

「つむではな」

「はい失礼します」

ガイドアを開けまた長い廊下を進んで部下の人たちとsの人と一緒にホテルへ行つた

いろいろ疲れていたシアンはすぐにねた

イタリア旅行一日目 fine

第3話（後書き）

もうなにがしたいのかわからない「うえ もうですねはい

イタリア旅行編は飛ばしてもいい気がします
一応感想待つてます

タイトル募集中です

第4話（前書き）

2部構成とか言いながら3部構成になりそうですが

ちなみに専用機のお披露目は少しだけします

第4話

次の日シアンたちがリムジンで研究所へ行くと某プリン伯爵のような人が出迎えた

「いらっしゃ～い国立HIS研究機関藍川シアン専用機開発部門へよ

う」

「わわじやあとりあえずデータ取るからシユミレーターにでも乗つて～」

「は、はあ（よくわからない人だな）」

「ああそつだシユミレーターには君の専用機がロードされてるからね～」

「えー？」

「じゃあ始めるよとりあえず初級編つと

ポチ 地獄のシユミレーターが始まつた…

ペペペ

「武装の確認はできる～？」

「あーはい

」

「うんじやあ敵を出すから適当に倒してみて～ヒュン ラファールを纏つた敵が出てきた

「じゃあまずは断罪者ジャッジメントを使ってみて」

「えーと…」レカ
武器一覧から断罪者ジャッジメントを選ぶとグリップから銃身の手前まではリボルバー、銃身はオートマチックという変わった銃が出てきた。

「？？（す）い形状だな。」

「とりあえず打つてみて~」
言われた通りに打つてみる

ズガン バス 敵に命中するとかなりS.E.が削られたようだった。

「うん音速で飛んでるからね威力はすくよ~」

こんな感じにショミレーターを行つていった。時間も忘れて…
終わつたのは夜の9時だった。

「うん良いデータとれた」

「また来るときは行つてね~?ショミレーター準備しとかい。」

「じゃあ、次は最後にブリュンヒルデが出てくれるよ!」設定にしないでくださいね。」

「はーはーじゃあまたね~」

「（ほんとにわかつたのか？）ではまた。」

疲れていたのかホテルについたらすぐに寝てしまつたジアンでした

イタリア旅行2日目 fine

第4話（後書き）

専用機少しだけお披露目
本格的なお披露目は原作突入後になると想います

今日はもう一回更新します

第5話（前書き）

これでイタリア旅行編は終わりです

もつすぐ原作突入します

第5話

地獄のシユミレーターを行つた次の日
シアンは部下の人たちに勧められたバーでピザを頼んだ
チーズの香ばしい香りと共にピザが運ばれてきた

「（今緑色の髪をした魔女を思い出した気がする…）」
そんな事を考えながら8分割して一切れとり口に運んだときパン
どうやら下端のマフィアが銃を誤射した

「じゅ銃声！？」

銃声のおかげでシアンはピザを落としてしまったピザを食い損ねた
シアンは
「オイピザオチチマッタジャネーカアアアアア！」

下つ端のマフィアをフルボッコにしていた
そしたら騒ぎを聞きつけたマフィアの上の方の人たちが出てきた

「てめえ家の者になにしどんじゃあ（イタリア語でしゃべってます）

」

「氏ねやゴラア（イタリア語で「よ」）」
数十人が一斉にシアンへ襲いかかつたしかじドゴーン
立っていたのはシアンだけだった
そのときのシアンの一言

「食べ物の恨み思い知つたか三下ビモ」
今回のこの一件でシアンは一気にイタリアの裏社会で有名になつた
次にトレヴィーの泉に向かつたシアン一向

背を向けてコインを投げておいた

ちなみに2回投げると恋がかなうや3回投げると恋が終わるおまじない?があるそうです

その後コロッセオで写真を撮つたりサン・ピエトロ大聖堂でブロンズの天蓋を見たりして

イタリア旅行3日目は終わった4日目5日目(最終日)とイタリアを巡つて旅をして最終日の夜

(展開が急に早くなつたのは気のせいです)

ホテルにて

「(明日には日本に帰るのか…楽しかったなイタリアもうちょっと居たかったな

あ!でも次は夏に来てくれって言われるか…一人だけならだれか連れてきてもいいって言ってたな…一夏でも連れてくか)」

こんなことを考えていたらシアンはいつのまにか寝ていた

次の日の朝早くの便で日本へ帰つた成空港に着くと行きと同じよう

にリムジンで帰つた

家に着いてシアンは思い出した

「…あ!お土産買つわされた…」 イタリア旅行編 fine

第5話（後書き）

ようやく終わりました
次で春休み編は終わらせて原作突入したいと思います
感想待つてます

第6話（前書き）

3連休が終わってしまつ
しかも明日からテストでひしましょ

とつあえず更新しましょ

第6話

シアンがイタリアから帰ってきた次の日
IIS学園入学が翌日と迫ってきていた

「明日からIIS学園かあ……はあ……鬱だ」

「何言つてんだよシアンすぐなれるつて」

「一夏そのセリフ覚えとけよ」

「ああいいぜ」

「いつたなよしじゃあなれなかつたらなんかお」」れよ」

「おひじやあ慣れたらなにかお」」りつせ」

「お」」

「あーそつえは今日千冬姉帰つて来るつてよ」

「へえじやあ今日で春休み最後だし3人で飯でもいくか?」

「おうそつするか(うーんでも千冬姉にとつて俺邪魔じやないのか
?まあいつか)」

夕方17時頃…

「ただいま一夏いるか?」

「おかえつ千冬姉」

「あーおかえりなさい千冬ちゃん」

「なつなんでシャンがいるんだ? (まさか私を待っていたのか? いやそれはないか)」

「千冬さんを待つてたんですよ

「(は~今) こいつは何で言つた?) まあもう一度言つてくれ

「千冬さんを待つていたんですねあ行きますよ」

「ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビだ?」

「ああ春休み最後だし夕食に行こう! 一夏となつたんですよ
なあ?」 「ああ」

「へ、そつか

「じゃあ行きますか」

そして3人はあるいて10分ほどで着くイタリア料理店に来た
前菜が出てきたところで一夏が

「あーそういえばシャンイタリアのお土産はどうした?」

「…………(・_・)」

「あやかとは思つが忘れてたとかそういうのじゃなによな?」

「 も、 もうひとあるぞ (汗) 」

「 じゃあ早く出せ 」

「 もうわかつたじやあ今からイタリア旅行の土産 (これ重要な話)
でもするかな (・・・・) キリ 」

「 そんな事だらうと思つたわー 」

「 んんつ盛り上がつてるとこひ悪いがイタリア旅行とはビリーハウス
とだシアン? 私は聞いた覚えがないが… 」

千冬さんの後ろには運慶もびっくり阿修羅像があつた

「 あ、あれ? い、い、いつていませんでしたっけ? (滝汗) 」

「 ああ聞いていいなそんなこと微塵も、後ろの阿修羅がさらば増
える 」

「 す、すこませんでしたっ! 」

「 お、お詫びに次イタリア行く時一緒に行きますか? (これでどう
だ?) 」

「 あ、ああそりよう次はいつ行くんだ? 」と阿修羅が消えていく
「 (よかつたそんなにイタリア行きたかったんだな…うさ) えー次
は夏休みです 」

「 あーでも予算の都合上一夏は来れないんですけどいいですか? 」

「なつじやあお前と一入きりになるんだな？」

「ええいやですか？」

「い、いやかまわな」（一入きりか…／＼）」

そして3人はイタリアンを食べて家に帰った

「じゃあ一夏明日からHJ学園だな？」

「やつだなじやあまた明日ノシ」

「ねつ明日ノシ」

そして明日驚愕の事実を知る」とになる

春休み編… fine

第6話（後書き）

春休み編はこれで終了です

休みの日は必ず更新します

明日からとてつもなく忙しいので更新遅いかも

お知らせ（前書き）

お知らせです

お知らせ

読みやすくするための意見や機体設定に無理があるなどの意見をいただいたので

これからはそれらに気を付けてやりますのでこれからもこの小説をよろしくお願ひします

具体的には

一話(じ)との文字数を増やす

読みやすくするために行間を空ける

漢字変換

情景描写

登場人物の心情描写などを次の更新から気をつけます

機体設定変えました

アドバイス等待っています

これからは更新が週1になるかもしれません
慣れたらまた毎日更新します

とりあえず次の更新は明日以降です

お知らせ（後書き）

機体設定かえました

第7話（前書き）

テストが終わったので書きました。

指摘された点を意識して書いたつもりですが、まだ読みにくいと思います。

相変わらずの駄文です。

第7話

4月上旬 朝 I.S学園校門前にて2人の男子生徒がいた。

「…（無駄にでかいな。校門。それにしても回りの人が一夏以外全員女子つて…

噂とか一瞬で流れるんだよな多分…こわ）」

「…（シアンのやつ緊張してるのか？…まあ良いや。そういうえば今日つて何曜日だっけ？」

各人思い思いのことと思つていた。

そして門をくぐつて受付をすまし、講堂へ移動し入学式必ず同じこと3回は言つので有名な学園長のありがたーいお話をつたたねしながら

聞き流していたら、いつのまにか入学式は終わっていた。

今度は、教室に移動しSHRの時間…

「みなさんいますねー？いない人は手を上げてください…
いませんね
では、SHRを始めます。」

「（ん？今のギャグか？いや、素でやつてるんだろうな。）」

「あーその前に私の自己紹介します。

私は、このクラスの副担任の山田 真耶です。
1年間宜しくお願ひします。」

そしてにこりとほほ笑むが、クラスの反応はない。教室に微妙な空気が流れる

「（えりすんだよ、）の空氣先生もつ涙田だよ」

シアンは、一夏に助けてあげてと、この視線を送るが、無理だと返された

「…グス…じゃじゃあとりあえず、血口紹介お願ひします。一番から。

「（一番つて俺か…よし）」

「えーと（うつ…視線が）あ、藍川シアンです。
趣味は、ハッキング？と読書です。気軽に話しかけてください。
1年間よろしくお願ひします。」と微笑むするとクラスの人ほぼ全員がほほを赤くした。

「？？（みんな顔が赤いぞどうしたんだ？）」

安心のシアンクオリティーがあつた

「（まあ、いつか。お一次は一夏だな。）」

「織斑君…？織斑君…織斑君、織斑君…、織斑君」

山田先生が、何度も呼びかけているのに一夏の反応はない。
先生またもや涙田になっていた。

「（やるな、一夏）」

感心してこるシアンがいた

「おりグスむらぐん…グスおりむグスらぐん」

もはや涙田ではなく先生は半泣きだ

「…ん? は、はー。」

一夏はよつやく呼ばれていることに気付いた。

「あつ! めんな? 自己紹介なんだけど、次織斑君の番何だよね
自己紹介してくれるかな? 駄目かな?」

ホントにこの人は年上なのだろうか? とクラス全員がそう思った。

「先生、そんなに謝らなくともちやんと自己紹介ぐらいしますから」

「ホントですか? 絶対ですよ。約束ですよ。」

そして、一夏は立つて後ろに振り向く

「(うわ、) の視線はきついな…」

「えー…えっと…織斑一夏です。よろしくお願ひします。」と一礼

「(…なんだ!) の『え? もうおわり?』的な空氣。それとシャン、
そんな憐れむよつな目で見るなー。」

「…………」「…………」「…………」

一夏のせいで、教室の空氣は最低だ

「(まぢい!) のままでは暗い奴のレッテルを貼られてしまつ……」
そして、深呼吸をして『お、来るか』的な空氣になつてから

「以上です(・・・・・) キリ」

ガタタタ、思わずクラスの一部があつつけた。シアンは笑いをこら
えるのに必死だ。

「…(うふふ)(やべ、腹筋崩壊しそう!)」

一夏は

「え！？あれ？駄目でした？あとシアン笑うな。」

パアン

「いつーー！？」

おそるおそる振り向くとそこには、

黒のスーツにタイトスカートすらりとした長身、よく鍛えているがけして過肉厚ではないボディーライン、組んだ腕、鋭い釣り目そして手にはsyussekibōという名の兵器があった。

「（まちがいない）げえ、平和島静雄！？」

パアン

「誰が池袋最強だ。馬鹿者が。」

ずっと笑いを堪えていたシアンも気付いた。

「あー千冬さんなんでこんなところに？」

ボスとかわいい音がする

「ここでは、織斑先生と呼ベシア…藍川。私はここ教師だからな。」

」

「そりだつたんですか。」

「ちょっととまで、千冬姉俺の時とsyussekibōの威力がちがー」ズバアーン！今日一番の良い音が鳴った。あまりの音の大きさにクラスの人半分くらいは引いていた。

「ここでは、織斑先生と呼べ絶対だ！ああそれと威力については、

「気のせいだ。」

「えー? いやでも明らかに…」ズバーン

「気のせいだ!」

「…はこ（ちくしょ）ひ、じつじて善良な市民は暴力に屈していくんだ。」

「あ、あの織斑先生会議はも終わられたんですか?」

空気になっていた山田先生が口を開いた

「ああ、山田君クラスへのあいつを押しつけてしまってすまなかつた。」

「い、いえ副担任でこのれぐらいしないと…」

山田先生は若干熱っぽい目で千冬さんを見る

そして千冬さんがあいつする

「諸君、私が織斑千冬だ。」

君たち新人を一年で使い物になるようにするのが私の仕事だ。

私の言ふことはよく聞きよく理解しろ、出来ないものには出来るようになるまで指導してやる。

私に逆らつてもいいが、言つことは聞け! いいな?」

「「な、なんて暴力的発言。教師とは思えない…」」

一人の思考は見事にシンクロした。

この後黄色い歓声が上がりつむさかつた。SHRは終わった。

「「あー…………」」

一時間目が終わり（展開が急なのは『氣のせ』）休憩時間シアンと一緒に夏は、話していた。

「なあ、一夏？これ覚えてるか？」

ビニからかボイスレコーダーを取り出して再生ボタンを押した。

~~~~~

「明日からエリス学園かあ……はあ……鬱だ」

「何言つてんだよシアンすぐなれぬって

「一夏そのセリフ覚えとけよ」

「ああいこぜ」

「こつたなよしじゃあなれなかつたらなんかお」「れよ

「おひじやあ慣れたらなにかおひつてもおひつかわよ」

「おむ

（第3話参照）

—

「…………」一夏の眼からはハイライトが消えていた。

「…一夏?」「シアンは笑みを浮かべ、一夏に詰め寄る。これは結構怖い

「わ、わかったよ、何かおじればいんだらうへ。」  
半分自棄になつて言つた。

「それでいいんだぞ一夏。じゃあ、ハーゲンダッツと。」状態の一夏の肩をぽんぽんと叩く。

「相変わらずだな」と不意に一人の後ろで声がした。

「え！？」まさか話しかけられるとは思わなかつた一人は、驚いて声が裏返つてしまつた。

そして、声の方を見るとそこには、小学生の時に引っ越した篠ノ之  
筈がいた。

「算さ

「ああ、久しぶりだな。シャン、一夏。」  
「まだ話しあう、屋上へ行かないか？」

そうだなど言って一夏はシャンを連れてこいつとする。

「いや俺はいいわ。やる」とあるし…一人きりでどうぞ。」

「ん？ そうかわかった。じゃあ、行くか？ 築。」

と教室を出て行つた。

教室で一人になつたシアンは一人で視線攻撃を受けていた。

「（早く、慣れたい…）」と切実に思つていた。

休憩時間終了1分前次の授業は千冬さんが見ている授業なのに、二人はまだ帰つてこない。

キーンコーンカーンコーン チャイムは無慈悲だ。

「（あちゃや、間に合わなかつたな。Ｚ。）」

結局授業開始5分後に現れた二人は、千冬さんの出席簿アタックの餌食になつていた。  
エクスカリバー

第7話... fine

## 第7話（後書き）

過去最長記録更新

これからは、このくらいの長さにします。途中で挫折するかも知れませんが…

とても、進みが遅いのはなかなか8巻が出ないので進みは駄目かなと思つてので…

これからもよろしくお願いします。

## 番外編 1（前書き）

メモリみたら、なんかこのデータがあったので載せます。

いつ書いたんだっけ…こわつ

「はああ…“じうじう”になつたのだらうか…」

西池袋公園のベンチにて、リストラされたサラリーマンの様な雰囲気を醸し出してくる千冬ちゃんがいた。

少し時をさかのぼつてみる。

今日は土曜日、学園の仕事はない。だからいつものように学園の私の部屋でビールを飲んで過ごしていた。  
だんだんと眠くなってきたので、寝た。

そう寝たのだ。そして起きたら二つの間にか公園のベンチにいた。

何故？酔っぱらったのか？いや、酔っぱらつて池袋まで来るのなおかしい。距離がありすぎる。

じやあ何故？連れ去られた？いや、それなら気付くはずだ。それに、  
IHS学園にいたのだ。セキュリティーは万全。

となると何故だ？じやあ異世界に来てしまつた？一番非現実的だが、  
束なりやうかねない…

ところへとこへとは異世界だと結論つけた千冬ちゃんは、やはり酔い

が回つてゐるのだろう。

とりあえず、散策してみるかと言つて公園を出た。

公園を出るとそこは、カオスだった。

飛び交う標識、ゴミ箱、自動販売機、大量の人の着信音が同時に鳴り、目が赤く自我を失い刃物を振り回す人々、高笑いしながらケータイを踏みつぶす人や自動販売機を人に向かつて投げる人 それはもうおそしかった。

「……どこだここは？地獄かhellなのか？」そう考へてしまつ千冬さんは、おかしくないだろう。

そんなことを考へていたら、黒いバイクが大量の白バイに追われていた。

もつほんとにカオスだった。

千冬さんは言つた。

よしこの地獄を楽しもう。フフフ、ブリュンヒルデをなめるなよ！

!!!!

「二十九歳で結婚したんだが、毎日毎日ハシタノヘ。」

**番外編 1（後書き）**

よくわかりませんね。

次は本編です

## 第8話（前書き）

進まない。話が進まない。

## 第8話

一時間目 1年1組の教室にてある男子は責めめていた。

田の前には分厚い教科書が何冊かある。

一番上の教科書を取つて見るが、専門用語のオンパレードで一夏はグロッキーだった。

一方シアンは、イタリアでプリン伯爵に多少エリの事について聞いていたのではつきりって余裕だった。

「（うう…シアンのやつあんなすました顔してるつてことはわかつてるんだよな？）の専門用語」

「（…それがから何なんだ？一夏は～そわそわして…まさか分からぬとか？

いや、さすがの一夏でもこのくらいはね…）」

一夏はずっとそわそわしていたので、先生も気になり声をかけた。

「織斑君、何かわからないうじょうもあるんですか？」

「あ、ああえーと（どうだつけ？と全部だった）」

「わからないといひがあつたら聞いてくださいね。私は、先生です  
から。」

「（おおこつもは頼りない先生が何故か頼もしいぞ…よし）先生ー」

「はー、織斑君ー」

「ほどんじ全部わかりません（・・・・）キコ」

「（一夏あ…よく言こ切つた。お前男だよ（笑）」  
シアンは笑いをこらえるのに必死だ

「え、全部ですか？」

さすがの先生も困っている

「えーと…織斑君以外に今のところ全部わからない人はいますか？」  
先生は拳手を促すが誰も手を上げない

「…織斑、入学前の参考書は読んだか？」

今度は千冬さんが聞く

「（…参考書…あーあのタウンージか…）…え…? そんなものも、  
もうひてませんよ」

と必死に嘘をつくが

「嘘をつくな、馬鹿者が」スパン  
エクスカリバー  
出席簿の餌食になつた。

「どうせ古に電話帳と間違えて捨てたのだろう? 再発行してやるから、一週間ですべて覚える。」

「あの分厚いのを一週間では無理じゃ…」

「やれと壱つてこる。」ギロツ

「はー…」

そして千冬さんはシアンの方を向いて

「藍川は、理解できているか？」

「はい、概ね

「やうかじやあ識斑に教えてやつてくれないか？」

「いいですよ。」

「すまないな。」

「…（やつぱ千冬姉はシアンには優しいんだよな…不平等だ！）ス

パンエクスカリバー  
何故か出席簿が一夏の頭に振り下ろされた。

「今、不平等だと思つただろ？。」

「申し訳ありません。（なんでわかるんだよ）」

「わかればいい。では、山田先生授業の続きを」

「は、はいでは教科書の…」

2時間目の授業後の放課シアンが一夏に工事について簡単なことを  
教えていたら…

「うと、よひへへへ。」

「……………（無視だ無視、聞こえない聞こえない）」

「

二人は無視を決め込む

「聞いていますの？お返事は？」

「…………」「

「…………」「

「（何なんですか？）の人たちは！？」無視しないでください。

」

「…………」「

シアソンたちは尚も無視を続ける

「無視しないでください。」

だんだん涙目になってきた。ついに無視できなくなつた一夏が返事をしてしまつた。

「わるいな、聞いてなかつた。何か用か？えーとセルティさん？（確かこんな名前だった）」

「セシリ亞ですわ、わたくしは首なしライダーじゃありませんわ。

「すまないな、セットンさん。」

「だから、首なしライダーじゃありませんわ。」

「おおすまんすまん。デュラハンだったな。」

「いい加減にしなさい！...全く日本の男性とは！れほど無禮でバカそ  
うな方なのかな？」

最後の方の言葉を聞いたシャーンが

「おー、日本の男の栄誉のために叫びておくが、バカなのは一夏だけだぞ。」

「ひどいなーお前。」

「いや、事実だろ。」

「はあ？お前も似たようなものだね。」

「お前と一緒にするな。俺は参考書をタウンペーと間違えて捨てたりはしないぞ。」

「うー」

と口論？が始まつたセシリアを空氣にして…「空氣じゃありませんわ

「わたくしを無視しないでくださいませーーー。」

キーンーーんカーンーーん。チャイムが鳴つた

「ぐつ…後でまた来ますわ。」

「「（あーまだいたんだ）」「

3時間目の授業は千冬さんの授業だった。

「では、授業を始める。ひとつその前にクラス対抗戦の代表を決めないとな。クラス代表戦の代表は…まあそのまんまの意味だ」

「（クラス代表？）面倒だ絶対やらないぞ。あら」「れフラグかしら？まあこいつのま、一夏に押し付けて…」

「自薦他薦は問わない。ただし推薦された者には拒否権はないからな。」

「はい 藍川君を推薦します」

「わたしもあ、藍川君に」

「じゃあ私も」

「（）のままではまずこだ（）じゃ、じゃあ俺は織斑一夏君を推薦します。彼は、すこべ強いですよ。そりゃあもつエヒを生身で倒すべからう。」

「なつー俺を巻き込むな。シアン。」

「何を言つてゐるんだね？一夏君？私は単純に君がクラス代表に適任だから推薦しただけだよ。」

「嘘つけー！じゃあなんで生身でーと倒せるなんて嘘つくんだ？」

「…（・|—|—）」

「はあ…もういいや…おれ…」俺がやると叫びかけた時 バーン  
と机をたたく音がした

「納得できませんわ。男がクラス代表なんて良い恥さらしですわ。

(中略) 大体文化としても後進的な国で暮らすこと自体耐えがたい苦痛で…

「イギリス、だつて日本と大して変わらないだろ?」と一夏は切れた  
よく見たら、千冬さんも若干イラついている

「（千冬さんもイラついてるし…終わったなセッション）『愁傷様セ  
ッションさん。』

「セシリアですわーもうあなたたちそんなにわたくしを怒らしたい  
のですか?」

「怒つても指して怖くなさそうだな一夏

「そうだなWW」

「聞こえてますわよ…あなた達ねえ…決闘ですわー!」

「おひいこぜ楽しそうだ。」

「がんばれよ一夏。」

「あなたもですわよー。」

「えー!俺も(なぜ? why?) I don't know what  
you mean. (直訳) 私はあなたが言っている意味がわか  
りません。かいつまんで言つと、は?何言つてるの?意味わからん  
しー

ぶちセシリアの中の何かが切れたが何故か冷静だった

「…もういいですわ… 今日はもう疲れました。とにかくあなたも決闘ですかよ。」

「よし話は決まったな。じゃあ来週の月曜日第三アリーナにて、決闘を行ひ。では授業を始めよつ」

三時間目が始まった

## 第8話（後書き）

切り悪いけどここまで切れます。

もう打つの疲れました。

更新は、土日に1～2回長めのを  
平日の中に2～3回短めのを更新したいと思います。

## 第9話（前書き）

今回も駄文ですが宜しくお願いします。

## 第9話

3時間目が終わり、放課後教室にて一夏とシアンがいた。

「つう、全然わからん…」

一夏は、グロッキーになっていた。

「これくらい、すぐわかるって（わからなかつたら…ビックリよつかな？）」

と心の中で黒い笑みを浮かべる。

こんなやり取りをしていたら、

「ああ、藍川君に織斑君まだ教室にいたんですね。よかつたです。」  
と山田先生がやってきた。

「どうしたんですか？先生」とシアン

「えっとですね、お一人の寮の部屋が決まりました。  
そつまつて部屋番号の書かれた紙と、キーを渡した。

「決まるのは、もつと先だと聞いていましたが？」とシアン

すると山田先生は、政府の特命ですと回りに居る生徒に聞こえないように耳打ちする。

「やつこつ」とですか。分かりました。」

「で、どうが俺ですか？」今度は一夏が

「1025室が、織斑君です。」

「分かりました。」

といつて一夏はシャンからキーを受け取る。

「ところで、俺たちが相部屋じゃなことこのじよは、個室なんですか？」

「うう園つて気前いこですね？」とシャンは、自分の推測を口にする。

「あーいえ、違いますよ。でも安心してください。一カ月で部屋の調整をつけますから。」

「じゃあ、それまで女子と相部屋なんですか？」

「やうこひとこなりますね。」

「（こや、それってこいつのか？）」とシャンは思つたが、口に出さない。なぜなら

本能的に言つたらめんどくさいことになると感じたからだ。

「ああ、でも一度帰らないと荷物が……」一夏が、思い出したようすが違つて声に遮られる。

「それなら問題ない。一人の分私が用意してやつた。まあ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯の充電器があれば十分だろ。」

「「あ、ありがとうございます」

「（大雑把すぎる…まあ千冬姉らしいけど、人の生活には潤いも必要だと思いますよ）」と一夏は思つたが、言つたらどうせ織斑千冬専用打撃武器... syussekibōの餌食になるのは田に見えている。

「（まあ、何時もパソコン持ち歩いてるし、パソコンあれば問題ないかな？あ！でもここのちゃんと回線繋がってるのか…）」

「では、時間を見て部屋に行つてくださいね。各部屋にシャワーがありますが、大浴場も学年」とに時間が違いますがあります。でもお二人はいま使えません。」

「え？ なんですか？」

「バカかお前は、同年代と女子と一緒に風呂に入りたいのか？」と千冬さんが聞く

「あー…（やうだつた。）」

そんなことを言つたら山田先生が暴走してしまつ。

「えー、織斑君女の方と一緒に風呂に入りたいんですか？ダメですよ。」

「い、いや入りたくないです。」

「えー、女の子に興味ないんですか？それもそれで問題のよつな…」案の定暴走した。そして、聞き耳を立てていた女子に聞こえていました。

「織斑君男の子にしか興味ないのかしら？」

「シャン×一夏…じゅる…」

「ハアハア…」

と腐女子が騒ぎ出した。

「（あーあ一夏のせいで…）」

「じゃ、じゃあ私たち会議があるので…寄り道しないで帰るんですけどよ。」

「ああ、その事なんだが藍川は私と一緒に来てくれ。」と千冬さんがシャンの呼び出し。

「「「？」？」」「三人は頭に？？？を浮かべる。

「イタリアから藍川の専用機が届いている。フォーマート フィッシュティング初期化と最適化処理を行つ。」

「あーそうでしたね。忘れてました。じゃあ織斑君だけ帰つてください。」

いや、そんな大事な」と忘れるなよといついついみは置いといて…

場所は変わって第3アリーナ西側ピット…

紫のカラーリングに関節部分は赤の機体に乗ったシャンがいた。

そして、『初期化と最適化処理が終了しました』ヒューラからメッセージ  
一通があった。

「よし、終わつたな。では、これから模擬戦を行つてもいいわ。」

「（は？実機に乗つたの今日でまだ2回目だぞ？いきなり実践？）  
な、なにを言つてるのですか？千冬さん？」

ポン相変わらず優しい音を立てて

「織斑先生だ。」と優しい声で言つ。

「まあ、聞くより慣れだ。行け、シアン。危なくなつたら助けてや  
るから。」

「（それじゃあ、俺の対戦相手が危ないのでは？…まあいいか）は  
い、じゃあ行つてきます。」

「ああ、気をつけろんだぞ。」

そうして、ピットを飛び出した。

そして、その先で待つていたのは、

「やあ、待っていたよ。藍川 シアン君  
つたIISを装備している人だった。

水色の髪をして水を纏

## 第9話（後書き）

はいカツト。

次は戦闘回ですよ初ですようまく書けますかね？  
まあ、がんばります。

最後に、トチ狂つた作者が「コードギアス」の小説を始めました。  
そつちも宜しくお願ひします。

## 機体設定 part 2 (前書き)

W i k i まんま w w

ミステリアス・レイディ（霧纏の淑女） 権無の第3世代型IS。ロシアが設計したIS「モスクワの深い霧」の機体データを元に権無が一人で組み上げたフルスクラッチタイプの機体。

他のISに比べ装甲が少なく、それをカバーするように左右一対で浮いている「アクア・クリスタル」というパーツからナノマシンで構成された水のヴェールが展開されており、ドレスやマントのようつに装着者を包む。

武装は下記以外に高圧水流を発することができる蛇腹剣「ラステイー・ネイル」を搭載している。

ほとんどのパーティにナノマシンで構成した水を使用しているため、水を自在に操ることができるのである。

機体力ラーは水色。

清き熱情 クリア・パッション

ナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物へ散布し、ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させ、その衝撃や熱で相手を破壊する戦闘能力。拡散範囲は限られているが、非常に有用性が高い。

蒼流旋 そうりゅうせん 特殊ナノマシンによって超高周波振動する水を螺旋状に纏つたランス。四門のガトリングガンも装備されている。

ミストルテインの槍 通常時は防御用に装甲表面を覆っているアクア・ナノマシンを一点に集中、攻性成形することで強力な攻撃力とする一撃必殺の大技でもあり、自らも大怪我を負いかねない諸刃の剣。そのエネルギー総量は小型気化爆弾四個分に相当する。

## 機体設定 part 2 (後書き)

一応、次の話に出てくるので載せておきます。

あんま意味ないかも

## 第10話（前書き）

初の戦闘描写。

うまく書けませんでした。

## 第10話

第3アリーナにて、

「一つのEISがあった。」

「……………え、どうしておまえがこうか？」シャンは、素直に疑問を口にする。

「ん？ 私？ おねーさんは、この学園の生徒会長。 更識楯無よ、楯無つて呼んでね」とウインクする。すると、千冬さんが、闇魔大王も涙田のドスを聞かせた声で、

「更識……やつひと模擬戦を始める。（私のシャン）にウインクなどシオッテ……」

アリーナでは、

「ありや、怒らせたかな？」

「なんですかね？（怒る）となんてあるのか。」

「あ、分かつてないんだ。（やつこつ）とな」

「？？」

そうすると、また管制室から威圧感があった。

「織斑先生が、怖いからそろそろ始めましょう？」楯無さんは冷や汗だらだら流しながら、ランスを呼びだす。

「そうですか？まあいいですよ。（近接武器…なら）」立  
ち話も何ですしねと付け足し近接ブレード  
同田貫とうたぬきを呼びだす。

そして、シアンは一気に距離を詰め、連撃を引く。

「つ！（速い…）へえ、随分と速いんだね？」だが、楯無さんは、  
余裕に捌く。

「それが、取り柄ですから。（くそつ簡単に捌かれる…だったら）」  
そして、断罪者ジャッジメントを呼びだし、距離を取り  
ズガガガガンと適当に4連射する。

「？そんな甘い照準じゃ…」簡単に避けられる。しかし、グイン、  
「！？」バスバスバスバス追尾し全弾命中する。

「グウウ」一気にS.Eを400削られる。

「なーー気に400も…」さすがの楯無さんも焦りが見える。

「なかなかの威力ね…」

「どうも、じゃあもう2発如何ですか？」ヒュ発撃つ。

「まだ、答えてないんだけどな」そして、避けるが当然命中する。

「（？何かおかしい）」

そして、当たった楯無さんが水になつた。

「なあー!?（み、水になつたあーー!?)」

そして二つの間にか蛇腹剣を構え後ろにいた。

「（後ろひーっまず…）つー…」大型ウイングスラクターを全開にして何とか回避した。

「くえ…おねーさん避けられるとは、思わなかつたなあ」

「ザエ…ザエ（おこおこ、余裕じやないか…）」「

「（だいぶ疲れているわね。）やうやくれば、ここにいたが熱くな  
い?」

「（?）ああ、そう言わればなんとなぐ…」

「フフッ 清き熱情<sup>クリア・パッション</sup>」

その瞬間ドカーンションの回りが爆発した。

「（…!?)なにがあつたんだ?）ぬあー

「びっくりした?清き熱情はね、ナノマシンで構成された水を霧状にして攻撃対象物散布して、

ナノマシンを発熱させることで水を瞬時に気化させて、その衝撃や熱で相手を破壊する技なんだよ。」

「（…）寧<sup>ニ</sup>にどうも…（SEが残り300を切った。早めに決着をつけなくては…）」

すぐに、アイザイアン・ボーン・ガンを呼びだし、ジユール熱を最大で入力する。

「勝負をつけるかい？（まあ、こっちも追尾弾のおかげで結構危ないんだけど…）」

「ええ、そうしましょう。」

「じゃあ、こっちも本気で行こうかな？（危ないけど、まあ本気じゃないと負けちゃうからね…）」

そして、アクア・ナノマシンを一点に集中し、攻性成形する。

「（必技かな？）シャレになつてませんね？」　「（成功するとこいけど…）そうね。」

「「行くわよ（ます）」」

「ミストルティインの槍…！」

「アイザイアン・ボーン・ガン！－」

両者の渾身の攻撃がぶつかり、ズガーンと大爆発が起きた。

## 第10話（後書き）

初の戦闘描写。

そして、決着は次に持ち越しといふ。…

どうだったでしょうか？

アドバイス等待つております。

## 第1-1話（前書き）

最近、つまべ話がまとめられません。もしや、これがスランプってやつか…

とつあんず、見てつて下せー。

第3アリーナの爆発が晴れたのち、  
ISが強制解除され、気絶しているシアンがいた。

「

「試合終了。藍川シアンのシールドエネルギー・ンパーティーを確  
認 勝者：更識楯無」

「（あ、危なかつた。）」楯無さんのSEも残りあと僅かだつた。

「（なかなか、強い子ね。…まあ、その前に全力で逃げしなきやー。）

「 横無さんは、ISでの戦闘後で疲れているからだに鞭を打ち、全力  
で走りだす。

何故かといつと、後ろから千冬あじゅさんが追いかけてきたからである。

「更識いいい……よくも、シアンを……」

子供の遊びとかじゃない、千冬さんと楯無さんのガチのリアル鬼ご  
っこが始まった。

氣絶している、シアンを放つておいて…

ここからは、作者初の一人称です。

み、皆さんこんばんわ。更識楯無よ。

おねーさんは、今本氣つてかいてまじつて読むリアル鬼ごっこをしてるわ。

もちろん命がけのね。いや、そこまでじゃないだろ?って思つてるでしようけど。

鬼は、あの織斑先生よ。きっと地獄の果てまで追いかけてくるわ。

とりあえず今は、生徒会室に隠れてるけど何時見つかるか全然見当がつかないわ。

「いつの間にか後ろに居たりして…いや、さすがにそれは…『ある』…へ?」それはないかと言つとこりで遮られた。

「お、おおお織斑先生…」ひ、冷や汗がとまらないわ…これが、ブリュンヒルデ…恐ろしいわ…

そしたら、天使のような悪魔の笑みを浮かべた織斑先生が、

「なに、私だつて人間だ。人間の限度をわきまえている。」

さ、さすがね。織斑先生は、心が寛大だわ。でもなぜかしら?冷汗は止まらないんだけど…

「だから、その限界まで痛めつ…指導してやる…精々あの世で後悔するんだな…フフフ、フハハハハ…ゲホゲホ」あ！咽た。

「では、特別指導室まで連行じやなかつた行くぞ。」さつきから、言葉の端節から恨みを感じ取れるんですが…大丈夫なんでしょうか？ああ、神様私は、明日朝日を拝めるのでしょうか？

そして、連れてこられたのは織斑先生の部屋だった。

「入れ。」おそろしく命令口調があいますねー。

そして部屋に入るとそこは、魔窟だつたわ。おびただしいほどビール缶の山。これを片付けるのが今回の指導らしい…

2時間後…魔窟は、普通の部屋に戻つた。しかし、私のHPはもう0よ。

しかし最後に、織斑先生は私にどごめをさした。

「よし、きれいになつたな。じゃあ、指導の続きはまた明日だ。では、今日のところは釈放…じゃなかつた  
帰つていいぞ。」

ええーまだあるんですかあー そして私は、この時氣付いた。この世界に神なんていない。

ちなみに、シアンは…夜第3アリーナで

「ん?（ああ、そうだ、試合してたんだ。気絶してたってことは、負けたのか…）はああ、これじゃあ最高の機体をくれたプリンさんに申し訳が立たないよ…」

そして、初めてのHIS戦闘で疲れたため、部屋に行って寝る」とこした。

とりあえず、1001室に行つた。途中、

「…燃えたよ…燃え尽きたよ…真っ白な灰にな…」と某ボクシングマンガの明言をガチで言つてる樋無さんがいた。

「（…?…や、触らぬ神に祟りなしつて奴だな…）」ヒューーと横を通り過ぎ1001即席室に着いた。

「（確かに相部屋の人つて女子なんだよなー）」 こんこん 一応ノックする。

すると、ガチャリ。

中からは、千冬さんが出てきた。

## 第1-1話（後書き）

とつあえず、ここまでです。

感想、アドバイス、批判等待っております。

## 第1-2話（前書き）

よく、分からぬ物になりましたが、  
読んでくださつている方々、よろしくです。

## 第1-2話

ガチャリ ドアが開くとそこには、千冬さんがいた。

「（…え？何故に千冬さん？）」

千冬さんの登場に驚愕するシアン。

「（むう…シアンの奴め…そんなに私と相部屋がいやなのか…？）」  
千冬さんはすこしふ、ほんのすこしホントーにすこし疾風だ。

「「…………」」

二人の間に微妙な空気が流れる。

「あ、あの…どうして千冬さんが俺の部屋に…（まさか、部屋間違えたとか？）」

「あ、ああお前は、私と相部屋なのだ。他の女子では嫌だろうからな。

（ホントは、シアンに変な虫がつかないようにするためだが…）」

「ああ、やうだつたんですか！確かに氣まずいですね…ありがとうございます。」

と、にこりと笑う。

「————も、まあ（ああ、この笑顔を毎日見れるのか…やっぱいいな）」

「とつあえず、部屋に入れ。」部屋に促す。

「はーい。（待てよ、確か千冬さんは家事が壊滅的に出来ない…まさか部屋の中は、ビール缶の山が3つぐらいにあるのでは…）」何かの覚悟を決め、部屋に入った。

「（あ、あれ？…おかしいだ。ビール缶の山はおろかほととぎなにもないぞ…）」「シアンは、あれ？あれ？ときよみときよみしてこる。

「（…シアンは何をしてこるんだ？…まさか…）シアン、お前今ビール缶の山はおろかほととぎなにもないぞ？とか、思つただろ？」

シアンはギクッといつ擬音がとても合つているような動きをした。

「えー、お、思つてしませんよ。そんなこと、微塵も…（何故、バレタ！？）」

「ほひ、わうか。嘘をつくか？」この私に。」だんだん、阿修羅が千冬さんの後ろに形成されていぐ。

「す、すこませんでした…」チロリ（涙×上田遺一のコンボ）チフー【は5万のダメージを受けた。

「（グボアア）…め、まあいいだひ。」（な、なんて威力だ…これは、私だけで独占しなければ…）「独占欲？の強い千冬さんでした。

「（？許してくれたかな？）」千冬さんの心理状況を全く理解して

いないシアンだった。

「そうだ、シアン。E.Sについて私が直々に教えてやるのつか？イタリアで聞いたからと言つてまだ、分からぬこともあるだろ？（その間は、一人きり…）」

普通だつたら下心に気付くが、気付かないのがシアンクオリティー。

「ホントですか！？千冬さんに教えて貰えるなんて嬉しいです」「本当にうれしそうな顔をする。

「ひへへへへへへへ（ああ、癒される…）じゃあ明日からだな。」

「はい。」

「それでは、荷解きをするか。」

「分かりました。」

そして、荷解きを1~5分ほどで終え、寝た。

## 第1-2話（後書き）

無理やり感半端ないです？

感想等待っています。

## 第1-3話（前書き）

今回は、結構短めです。

## 第1-3話

第3アリーナ… 一夏側ピット

シアンたちは、一夏のバスの到着を待っていた。

「…………（遅くね？）」シアン、一夏、篠は同じこと  
を思つていた。

「なあ、シアン？俺のバスいつ来るんだ？」

「知らん。もうチョイいやね？（笑）」最近気付いた。シアンつ  
て多重人格じやね？

「なんだよ（笑）つて…」

「お前たちは、何をしとるのだ。緊張感がないぞ！」  
最近、空氣だつた篠さんが言つた。

「いや、負ける気がしないし…」二人とも同じことを言つた。

「その氣は、どこからわいてくるのだ？」

こんな会話をしていたら…

「織斑君、織斑君、織斑ぐげホゲホ…」

織斑君と連呼し咽た、山田先生がやつてきた。

「山田先生、どうしたんですか？」一夏が聞く。

「あー…きました。織斑君の専用IS。」

「…やつとか…」「…」

そして、扉が開くとそこには、白がいた。

「これが、俺の…」そして、ISに近づく。

「はい、それが織斑君の専用IS…白式です。」

「白式…」

「織斑、時間がない。初期化と最適化処理は実戦でやれ。フォーマート フィットティング  
やれなければ、負けるだけだ。」

「はい。」

そして、ISを纏いアリーナの方へ向って行った。

一夏の戦闘は省略。この小説の主人公は、あくまでシアンなので…

「次、シア…藍川…オルコットの準備が出来た。行け。」

「はい、千冬さん。じゃあ、行きます。」

「行くぞ、リベリオン。」

シアンは紫を纏った。そして、アリーナへ飛び出した。

## 第1-3話（後書き）

次は、二回目の戦闘描写です。  
うまいくか、不安でしょうかがないです。  
感想などまとめております。

## 第1~4話（前書き）

戦闘描写は苦手です…

読みづらさだと思いますが、おおめに見てください。

## 第14話

アリーナに出ると、セシリ亞がブルーティアーズを纏つて待っていた。

「お待たせしました。」シアンが話しかける。しかし

「…………」「何やうブツブツ言つてこる。

「あの？ オルガットさん？」

「…………」尚もブツブツ言つている。

シアンは、ハイパー・センサーの感度を上げてブツブツ言つているのを聞いた。

「一夏、織斑一夏…………」

「一夏がどうかしたの？」そしたひりやく付いた。

「な、なああ！？」何時からいましたの？」かなり動搖している。

「いや、せつときかい。」

「ま、まあいいですわ。では、試合を始めますわよ。」そして、スター・ライトマークを構え、シアンをロックする。

『敵HISにロックされています』シアンのHISに警告が送られてくる。

「（銃か…じゃあ、いつわは…）」近接ブレード同田實<sup>よしのたじつ</sup>を呼び出す。

「遠距離狙撃型のわたくしに近接武器で挑むとは、笑止ですわ…」シアンをスター・ライトで狙うが、

「ほいほいっ…」シアンは、大型ウイングスラクターを吹かし、結構余裕で躲す。

「なつー…うまく避けますのねーでも、これでー」とB-T兵器を開する。

そして、B-T兵器はシアンを狙つ。しかし、またもや余裕で避ける。

「なあー…くつ…なんでそんなにつまく避けられますの?」セシリアには、ほとんど余裕がない。

「ん?ああ、千冬さんに弾丸の避け方の「コツ」を教えてもらつたんだ。そしたら、すぐこの全然当たらないな…」

「い、インチキですわ!」セシリアは、暴走気味だ。

「まあまあ、代表候補生なんだろ?このくらいで怒るなつて。それとも、イギリスの淑女<sup>レディ</sup>は気が短いのかい?」

あからさまな、挑発だが今のセシリアには絶大な効果を發揮する。

「な、なんですかー…もつ手加減しませんわー!踊りなさい、わたくしセシリヤ=オルコットヒブルーティアーズの奏<sup>ワルツ</sup>で。円舞曲でー!」

そして、スラーライトをシアンに向ける。

「悪いね、ワルツ田舞曲は苦手なんで…」セシリ亞が、スラーライトを打イグニッシュンカーストといたしたら、

シアンは、いつの間にかセシリ亞の真後ろに居た。

「う、後ろに！？（何時の間に…まさか、瞬時加速）」すぐに対応しようとしたが、

「遅い！（くわい）これは結構Gが掛かるな）」

ズバードガん セシリ亞のスター・ライトは、シアンによつて破壊された。

「くわ…」セシリ亞は、距離を取り再びBT兵器を展開する。

「（アーン、じゃあ…）」「ジャッジメント断罪者！」シアンは、ジャッジメント断罪者を呼び出しBT兵器に適当に4発放つ。

「（？そんな、甘い照準じゃ…）」

BT兵器を動かし、簡単に躲す。だが、グイン ドガガガン 「！？」

「な…？追尾機能！？そんな、技術が…」「あるんだな、それが…」

…」

シアンは、ズガガんとさらに2発撃つ。

「つー！」セシリアは避けるが、追尾し被弾する。ドガガン

「ああ…！（エネルギーが、一気に200も…？）ばかげた威力ですわ）」

「（はいはい、次々）」次にシャンは、アイザイアン・ボーン・ガン（サーマルガン）のジューク熱を2／3に入力し、撃つ。

バーン　ドガーン　弾丸が、セシリアに飛んでゆき、ブルーティアーズの装甲が、砕けたところに着弾し、絶対防御が発動する。

「ぐうう…（不味いですわ、後はミサイル型とインターフォンターしかありませんのに、それでも、強いですわね。ホントにHISの起動が2回目とは、思えませんわ。）」

「（そろそろ、終わらせないと…断罪者と瞬時加速を使つたからな…SEが心もとない…）これで決める…」

再び同田貫ひうたぬきを呼び出し瞬時加速で距離を詰める。

「はああああ」同田貫ひうたぬきを振りかぶる。

そして、ズバ　セシリアを斬る。

そこで、セシリ亞のSEが無くなつた。

ピーとブザーが鳴つた。

『試合終了。セシリニア・オルコットのシールドエネルギーエンブレ  
イーを確認。

勝者…藍川シャン』

## 第1-4話（後書き）

読みづらかったですね。

感想などまっています。

あ、そうだ。

これから、作者に余裕がある際には、他の作者様がやっておられる  
ような事を  
このあとがきでやりたいと思いますのでよろしくお願ひします。

最後に… 紅だつたひと様の活動報告で一つ名メーカーといつものがあつたので自分もやってみたくなりました。

藍川シアン 人形カオスゲート

作者の感想

は？意味不明何ですが…

藍川 シアンだと 眼球斬鬼ノイローゼラビリス

作者の感想

英語の意味わかつてるのでですか？

ノイローズの迷宮ですよ。しかも、漢字怖いですよ。

織斑 千冬 ディバイノミラージュ  
幻想封神

作者の感想

呆れました。

織斑千冬 月光の眼 アストラルラビンス

作者の感想

漢字の方はいいと思います。

それについてもラビンスがお好きなんですね。

私は、あなたの脳内がラビンスだと思います。

千冬さん 黒の亡命者 ハイクライクラスター

作者の感想

亡命しちゃダメだと思こめますし、千冬さん由崎士ですよ。

皆とも、ひまでしたらやってみてください。



## 第1-5話（前書き）

とても、短いですが読んでいくください。たらうれしいです。

セシコアとの試合後

「シアンは、ピットに帰ってきた。

「おつかれ、シアン。しかしあ前よく勝てたな。俺とほんとにいい起動時間変わらないだろ?」一夏が聞いた。

「ん?まあ、イタリアで鬼畜ショーネーターをやられたし...何より、千冬さんが教えてくれたからなー。ありがとうございます。」

「あ、ああ... / / / / / (や、やまこ。愛があふれそつだ。)」

「(ナタリ、なんで鼻押えてるんだ?)」

「(シアン!)よくよく考えたらおやじしこな。)」

そして、夜

100-[[[元]]]

「なあ、シアン?」

「なんですか？千冬さん？」

「今日は、勝ててよかったです。そして何だが…これからも私に教えてほしいか？」

「はい…是非。」

「や、そうか。じゃあ明日からもう一つひとつ教えるとあるか。（ よし、これで… ）」

「はい。（ なんか、お礼しないとな～ ）（ うふねば明日は十曜日… ）そつだ…」

「な、なんだ？」

「明日、千冬さん何か予定ありますか？」

「い、いや特にはないが…」

「じゃあ、明日食事でも行きませんか？（ うふ ）（ 教えてもらひつてるんでお礼もしたいし… ）」

「（ ルーラー ）とか…まあ、その時は、一人きりだしな～（ ）ああ、行こ～！」

「よかったです。じゃあ、明日の朝10時に校門前でいいですか？」

「ああ、じゃあ明日だな。（ フフ、楽しみだ ）」

「はい、じゃあおやすみなさい。」

「 もやも。 シト。 ）（ あ、 じまじまは寝れんがな…… ）」

その後、 やがて上機嫌の千鶴さんが叩きされた。

## 第1-5話（後書き）

次は、千冬さんピート回ですよ。

うまく書けるか心配ですが、がんばって書きたいと思います。

作者「今回のゲストは、千冬さんです。」

千冬「ふふん（畠田は、データか……／＼）」

作者「うまく書けるかわからんがな…」

がつ千冬さんのアイアンクローラー  
作者は5万のダメージを受けた。

千冬「うまく書けるかじやなくて、書くんだ――――いいな（ロキロ）」

作者「…………はい」

千冬「ああ、そうだ。感想、批判等は作者の暴走をとめる一一番よ  
薬になる

からな、どんどん送ってくれ。」

作者「これからもこの小説を宜しくお願ひします。」

千冬「ああ、次回もよろしくね。」

## 第1-6話（前書き）

この回は、すつゝく時間かかりました。

読みにくいと思いますが、宜しくお願ひします。

土曜日、朝9時55分～学園校門前

シアンは、千冬さんを待っていた。

「（ちよつと早かったか…一夏も誘えばよかつたかな…？）

5分後、千冬さんは来た。

「すまない、待ったか？」

「いえ、今来たところですよ。」

「（むう、敬語か…）シアン、これからは学園の外だ。敬語じゃなくともいいぞ。後学園の外では、千冬でいいからな。」

「え、でも…（なんだ、急に…？）」

「いいから。」

「わ、分かったよ…ち、千冬…さん（これで、いいのか…）」  
涙目×上目遣い

「ああ、や、それでいい…／＼（こ、これは…いいな…／＼／＼）」

とまあ、朝から」こんなやり取りをしてとりあえず目的地へ向かつた。

モノレールに乗つて、着いたのは大型ショッピングセンター『レゾナンス』

ちなみに、二人の服装はシアンが、黒いカーポパンツにグレーのロングカーディガンというカジュアルな格好。  
千冬さんは、ニットジャケットにスカートレギンスにブーツという千冬さんだつて感じの服装。

「（それにしても、今日のシアンの服は結構かっこいい物だな…）良い服だなシアン。」

「ん、そうか？千冬…さんもいつもと印象が違つて良いよ。  
初デートにありがちな会話をしながら、服を見たりした。

「そりそり、昼時だな…」千冬さんが言つ

「そうだな、あーあの店は？」とイタリアンを指さす。

「（特に行きたいところもないし、いいか。）ああ、そこだ…。」

そして、二人はイタリアンに入つて行つた。

シアンは、モツェルラチーズとベーコンのピザを頼みまた、緑髪の魔女を思い出しそれが千冬さんにばれ、殴られた。

ちなみに、千冬さんはカルボナーラだ。

『カルボナーラとモツツヒルラチーズとベーコンのピザでござります。』

「あ、はい。」と千冬さんがカルボナーラを受け取る。シアンは、ピザを受け取る。

『「注文は以上でよろしかつたでしょうか?』「はい。」『カップルですか?』

「「ブフウ」」店員のクラスター爆弾が投下された。

『あー違いましたか?失礼します。』店員は、キッチンに帰つていく。

「「…………（気まずい……）」」

「（それにしても、私とシアンは一緒に居るとカッフルに見えるのか……／＼／＼／＼）」

「（な、なんだだりう。千冬さんとカッフルって…あんまり嫌いじゃないな…）」

言葉が一切なく、昼食が終わつた。

『有難うございましたーまたお越し下さいませー。』

「ふつ、なかなかおいしかつたな。シアン」

「やつだね。」

「 「…………」「」

先ほどの店員のクラスター爆弾のおかげで、空気が重い…

「とりあえず、カフュでも行くか?」千尋さんが催促する。

「うん。」

そして、カフュで「コーヒーを飲みながら話をしていたりティナーの予約の時間が迫っていた。

「あ、じゃあそろそろ予約の時間だ。行く。」

「やつだな。で?ビンの予約を取ったのだ?」

「フフ、お楽しみー。」シアンは微笑む。

「そ、そ、そ、う、か…／＼（あ、やばい、愛が抑えられん。）」

千尋さんは、結構危ないことにいるだ。

そうして、レゾナンスを出て5分ほど歩いたところにある。

高級料理店に来た。

「なあ、ここって…高級で有名だつた気がするのだが…」

「はい、イタリアからここのペアチケットが届いてたから折角だし

…」

「せうか。」

そして、中に入るとやはり別世界のようだった。

「おーこな……（こたなといふにシアンと一緒にきりで来れるとはな……）」

「ええ、（えー何？）『真と全然違ひ……』」

イタリアのパンフレットとチケットは違うところのものだった。

「（ああ、もうここ速く席に着いづれ。）じゃあ、千冬席の方へ。」

「ああ……」千冬さんはかなり赤面している。

そして、コース料理を食べて帰った。

場所は変わつて1001号室

ワインを飲んでいた、千冬さんは帰つてからすぐに寢てしまった。

「…………すう…………」

「千冬さんつて、寝てるとなんか可愛いな……」と何考えてんだ  
る……俺も寝よ。……すう

この時の独り言を千冬さんは聞いていた。

じつで、千冬さんは寝れないまま夜が更けていった。

## 第1-6話（後書き）

すいません。うまく書けませんでした。

次は、明日の17時までに更新したいと思います。

作者「今回のゲストは、主人公のシアンです。」

シ「なんなんだ？今回とてもうるさいじゃないか！」

ドガ、ボコ、ドス、ズバ、ドガンなどの暴行がシアンから作者に

作者「ちょっと、やめ、わかつてんから。」

シ「じゃあ、とりあえず謝つといった方がいいんじゃないかな？」

作者「はい、えーいらっしゃるのかわかりませんが読者様よくわからない回を作ってしまって、すいませんでした。」

シ「よろしく。では次もよろしくお願いします。」

作者「よろしくです。」

第17話（前書き）

かなりすっ飛ばしました。

シアンと千冬さんがデートした次の日…

IS学園1-1の教室にて…

キーンコーンカーンコーンチャイムが鳴った。

ガラ ドアが開けられると千冬さんと山田先生が入ってきた。

「では、SHRを始める。山田先生頼む。」

「は、はい。」

「では、まずクラス代表は、織斑一夏君に決定しました！」

「「「「イエーイ」「」「」」クラスのほとんどが歓声を上げた。

しかし、どの世界にも空氣の読めないやつがいて…

「はい、先生！納得できません。なんで負けた俺がクラス代表なんですか？」キングオブKY一夏だ。

「あ、それは…」先生の言葉を遮りつつ、セルティージャなくてセシリアだ。

「それは、わたくしが辞退したからですわ。一夏さんは、経験を

積んでほしいです…

そのよろしければ、わたくしがお教えしましょか?」

ダン

「一夏の教官は私で足りている。直々に頼まれたからな。」と簞

「あーら、アランクの篠ノ之さん。アランクのわたくしに何の用ですか?」

とこんな感じのやり取りをして、SHRの時間は終わった。

休み時間、一組に転校生が来るって噂が流れていた。

その後鈴がどこからか湧いてきて、一夏に宣戦布告し千冬さんのs y u s s e k i b o の餌食になつて帰つて行つた。

鈴イベントは、めんどいからカット。シアン出じづらいしね。

そして、いつの間にかクラス対抗戦の1日前・放課後教室で

「あーあ、1回戦から鈴とかよ…」一夏がぼやく。

「まあ、待つ手間が省けたんだからいいじゃん。シアンが結構楽観的な事を語つ。

「そうなんだけどなー

「ま、今日も訓練だな」

「それしかないかー」そして、第2アリーナへ移動する。

「とりあえず、模擬戦するか?」シアンが提案する。

「ああ、いいぜ。負けないからな。」一夏は、その提案に乗る。

「じゃあ、始めるか。（今日は、新バージのテストをしなきゃな。）

「

「「行べゼ（ゼ）」」由と紫がぶつかった。

「（まぢは、距離をとつて）」新武装：アサルトライフル アンタレスをホールし、連射する。ズガガガガ

「うわーー。一夏は、避けるので精いっぱいだ。

「（ヒード、ーー）」アンタレスの弾幕を張りつつ、ジャッジメントを呼び出し、一気に6連射。ズドドドド

「これって、追尾する奴だー。（やべ、UEが…）」そして、全弾命中すし、一夏のUEがそこを付く。

「へんつ、なんも出来なかつた。」と一夏は本当に悔しそうである。

「まあ、一夏もイタリアの鬼畜ショミーレーターと千々ヤウルの指導を受ければ強くなるさ……」と遠い目をする。

「ああ、大変そうだな……」

いつして、一日が過ぎて行つた。

次の日、クラス対抗戦当日、事件が起つる。

## 第17話（後書き）

感想待つてます。

ストックがついにゼロに…

第一一〇話（前書き）

さつまつ、戦闘描画は苦手です。  
どうも。

当口、シアンは観客席から試合を見ようとしたが、千冬さんに何故か管制室に連行されていた。

そして、試合が始まった。

最初から、鈴のターンで衝撃砲を一夏に向けてぶつ放していた。

よつやく、一夏のターンかと思つたら、ズドーン

アリーナのシールドバリアーが破壊された。

その場にいた人たちは、一瞬固まつた。

なぜなら、絶対安心だと思っていたI.S学園に襲撃。これは、世界を敵にすると同義語だ。

遮断ブロックがあり、観客の無事はほとんど確保された。

本来なら、ここで制圧部隊を派遣するのだがシステムクラックに時間がかかり

いまだに突入できずにいた。

「織斑先生、俺ならこれくらいならすぐクラックできます。」

「なんだと? よし、では頼む。」

「はい。」そして、ビビビンシステムにハッキングしていく。

「「…すご」「……」」シアンのハッキング技術を見ていた、二人は驚嘆の声を上げる。

そして、5分後クラックが終わった。

「終わりました。」

「あ、ああじゃあ、悪いが突入部隊のI.Sに不具合が生じた…代わりに突入してくれないか?」

「え…? (初の実戦か…これで死ぬかもしれないんだ…でも行かなないと鈴と一夏が危ない…よし) はい、行きます。」

「ああ、じゃあ行つてくれ。」

「はい、行つてきます。」シアンは、紫の機体を纏いアリーナに飛び出した。

「くつ(UEがぎりぎりだ… )」一夏が一回目の零落白天を使おうとしたとき、ドカーンと隔壁を吹き飛ばした、シアンがいた。

「やあ、襲撃者君。ここからは、俺が相手だ!」

そして、ジャッジメント断罪者を呼び出し、2連射ズガガガ

しかし、ビームに相殺される。

「な! (断罪者が相殺された!?) なら…」アイザイアン・ボーン・

ジャッジメント

ガンを呼び出し、  
ジユール熱を最大に入力し、撃つ。

ドガン、ものす”い勢いで飛んでいく。しかし、またもやビームの前に撃ち落とされる。

「（サーマルガンまで…じゃあ、奥の手を使つか…）」そして、アントラレスを呼び出し、フルオートで、連射し弾幕を張りながら襲撃者に近づく、そして距離がゼロになつたところで、パイルバンカーを開けしズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガンと6発撃つと敵ゴーレムISは、爆発した。

そして、爆発が晴れるとそこには、無人機がいた。

「！？無人機。」一夏は驚く。しかし、シアンは知っていたようだ。

「（やつぱりそうか、さつき生体反応がなかつたしな…）どっちにしろこれで終わつただろう。」

しかし、『敵ISの再起動を確認。』終わつたと思つていたシアンは敵ゴーレムISに完全に背を向けていた。

「なつ！？（再起動？まづい反応が遅れた。）」

そして、敵ゴーレムISは、ビーム兵器の照準をシアンに合わせ撃つ。

「つー」すぐに、断罪者ジャッジメントを呼び出し迎え撃つ、2発を敵ISに向け撃ちゴーレムを鎮める、もう2発でビームを迎え撃つが、相殺しきれずビームを受けてしまつた。

そして、それを見ていた千冬さんが「シアーナン」と叫んでいた。

第1-8話（後書き）

よくわからぬいものをまた書いてしまった…

I S × 夏目友人帳のほうもよろしくお願いします。

## 第1-9話（前書き）

今回は、みじかめです

## 第1-9話

その後、シャンが回収された。ビームの直撃を受けたが、そこまで  
のケガはなかった。

場所は、変わつて保健室、夕方18時頃

保健室と云つてもナレージーさんの診療所とは、一線を画する設備の差  
がある。

その、保健室のベッドでシャンは寝ていた。また、横では、千冬さ  
んが見守つっていた。

「……？」シャンは、眼を覚ました。

「シャンー起きたか。」千冬さんは、シャンに抱きつぐ。

「うわああ、ち、千冬さん！？その……（なんだなんだ！？な  
にが起きてるんだ？）」「シャンは、動搖している。

「あ、す、すまない／＼」とシャンから離れる。

「い、いえ……（なんでだろ？なんか離れられるとかびしこな…  
（

「んん、すまない。取り乱した。ケガだが、E.Sの絶対防護のおか  
げでほとんどない。」

しづらくなったら、部屋に帰つていこうやつだ。」

「やつですか。で、どうなりました？敵IISは？」シアンの顔が鋭くなる。

「（ふむ、ホントは、駄目だが討伐した本人が知らないのもな…）IIS学園の地下ブロックで管理されることになるそうだ。」

「なら、安心ですね。解析結果は、出ましたか？」

「いや、まだだ。」

「やつですね。（それにしても、千冬さんと戻るとなんかドキドキするんだけど…なぜ？）

まさか、俺は千冬さんが好きなのか？」

「（む、そろそろ時間だ。くそつ…）では、私はそろそろ戻らないといけない。部屋に戻つてもいいからな。」

「はい、がんばって…（なんか変な気分だな…）」

そして、一時間ぐらいした後シアンは保健室を出て、屋上に向かうことになった。

屋上

「ふう…」途中にあつた自動販売機で缶コーヒーを買ひ、自分の気持ちを考える。

「（千冬さんか…あのトーークの匂から千冬さんのいじばっか考えてるな…やっぱ好きなんだよなー、よし）  
今度の学年別トーナメントが終わったら、抜擢してみようかな。いや、振られた（ひびた）や」

振られたらどうするの無限ループをしていた。

2・3時間してとつあえず様子見とこつチキンな結論をつけ、部屋に戻った。

部屋に戻ると、千冬さんは、そのまま帰ってきていた。

「遅い…エリに行っていたのだ？」

「屋上でコーヒーを飲みながら、悩み事をしていました。」

「（悩み事？私の事か？それはないか…ハア）そつか。」

そして、今日の戦闘で疲れていたシアンは、その後すぐ寝た。

## 第1-9話（後書き）

感想等待つておひます。

## 第20話（前書き）

自分で書いてて分からなくなつた。

無人機を討伐した次の日SHRの時間教室で…  
ガラドアが開かれるといつものように千尋さんと山田先生が入ってきた。

「では、SHRを始めます。」千尋さんってSHRあんまりしないなって思った。

「皆さん、今日は転校生がきますよ…」

「…………え！？」女子は、いきなりの事に結構驚いている。

「しかも一人です。」

「（なんで、1組に集中させるのかな？）」シアンがそう考えているうちに

転校生の一人が入ってきていた。

「転校生のシャルル＝デュノア君です。」と山田先生禁断のネタばらし

「シャルル＝デュノアです。宜しくお願いします。」

「お、男？」誰かが、唐突につぶやいた。

「はい、僕と同じ境遇の人があるって…」

「 「 「 「 「 わい…」 「 」 」 」

「 も…」

「 「 「 「 「 もやあああああ」 「 」 」 女子たちが、かんせい悲鳴を上げる。

「 男子、 3人目の男子！」

「 男の娘、 男の娘、 ハアハア…」

「 シアン、 一夏、 シャルルの三角関係…ありね…。」

「 み、 みなさん。まだ、 自己紹介が終わってませんよー」 山田先生  
が静かにじょいとさせるが、 全く効果がない。

「 静かにしり!」 そんな千冬さんの一言で静まり返る教室、 千冬さん  
の影響力の高さを物語っている。

「 挨拶をしろ、 ラウラ。」 千冬さんが、 促す。

「 はつ…教官…」 ビシッと敬礼する。

「 もう、 私はお前の教官ではない。 それとこ…では、 織斑先生だ。」

「 了解しました。」

「 ラウラ=ボーテビツヒだ。」

「 あの、 終わりですか?」

「以上だ。」

そして、一夏の方の前に来る。

「つー貴様が！」と言つて、右手を振り下される。パン

「痛、いきなり、何しやがんだ！」さすがの一夏も怒る。

「ふん。私は認めない、貴様があの人の弟だとこいつひとを…」そして、次はシアンの方に来る。

「貴様には、これだ！」と拳骨を振り落とそうとするが、千冬さんから

それを下ろしたら貴様の心臓もぎ取つて、犬の餌にするぞオーラが出てきたので、

振り下ろす直前で止まつた。

「ふ、ふん。」ようやく、自分の席に戻つていぐ。

「よし、次の授業は工房を使つての実習訓練だ、各自準備をしておけ。

では、SHRを終わる。」

そして、休み時間。  
シアンと一夏とシャルルは、話していた。

「えーと、君たちが藍川君と織斑君？僕は…」丁寧に挨拶をしようとしたが、シアンの声に遮られる。

「あー、自己紹介は後だ。女子がここで着替え始めるからな。」

「ああ、そうだ。急ぐぞー」と一夏はシャルルの手を引いて廊下へ出る。

「あ…／＼何故か顔を赤くさせるシャルル。

タツタツタ

渡り廊下を駆ける3人

『むーいたぞー。』「ちだー」と誰かを呼ぶ声がする。

『ホントだー捕まえろーー』

『きやー見て！織斑君とユノア君、手つないでる』

『…一夏×シャルル…ありねー』

だんだん、腐女子が騒ぎ出す。

「ちつー見つかったーー」と一夏が悪々しそうにする。

「まづい！包囲されている。」 シアンが逃走ルートを確認するが、ふさがれている。

こんな中一人だけ状況が分かつてない人間が一人だけいた。

「えー！何？何なの？」 シャルルだ。

「？そりゃあ学園に居る数少ない男子だからだろ？」と一夏が説明するがシャルルはいまいち理解できていない。

「…………？」理解できていないシャルルにシアンが補足をする。

「男子は、俺たち三人だけだから……」そして、シャルルはようやく気付く。

「あ、ああ。そうだね！」

「（…ホントに男子なのか？今日千冬さんに聞いてみるか…）」

とシアンが疑いを掛ける。

こうこうやり取りをしていたら、どんどん包囲網を縮められる。

「しかたないな…」「めんな…一夏。（ホントに）めんな、2分は忘れないからな…」

そして、一夏の[写真（胸肌蹴けver）]と寝顔verと着替え中verをばら撒く。

「「うおわっ！？なんてもん出すんだ？シャン！…」

『……………？？？？？？？』

突然の事で女子軍団の包囲が緩む。

「（今だ！）やらば！」とシャンは、シャルルの手をつかみ、緩んだ包囲網を一気に駆け抜ける。

しかし、一夏は自身の写真を「うおおおおと野太い声を上げ争奪している女子達を見て、（・。・。）と放心状態になつている

「…はっ！謀つたなシャアアアアアアアアアアアアアアアン！…！…！」と魂の叫びを上げていた。

一方その頃、シャンとシャルルは余裕で更衣室に到着していた。

更衣室で…

「（ふう、一夏を犠牲にして正解だつたな。あれ？一夏つて誰だっけ？）「もう、一夏の存在を忘れていた。

「そうだ！自己紹介がまだだつたな、俺は藍川シャン。シャンって呼んでくれ。」

「うん、僕は、シャルル＝デュノア。シャルルでいいよ。よろしくね、シャン。」と二人とも簡単に挨拶する。

「（よし、自己紹介も済んだ。あんまり時間がない…早く着替えた  
わや）よつと」

と上着を脱ぐ。そしたら…

「うわああああ／＼／＼」とシャルルが声を上げた。

「…？どうしたの？」シアンが聞くが何でもないよと答える。

「ホントに何でもないからね、えーと、だからじつちをみないでほ  
しいんだけど…」

「？まあ、人の着替えをじろじろ見る趣味はないけど…（あんまり、  
他人と着替えたことがないのか？

いや、だとしてもあの過剰な反応はおかしい…やつぱり女子なのか  
もな…」

とまあ、あんな、こんなで一人が着替えを終え、アリーナに行くか  
？つて時に一夏はようやく  
更衣室に到着した。

「お？遅かったな、一夏。何かあったのか？」白々とシアンは言つ。

「ブチ、滅多に怒らない一夏が切れた。

「おめーのせいだろ？があー・シआআাঙ়。」と殴りかかるが、ヒ  
ヨイフと避けられる。

「ははーあと、3分で授業始まるからな。ファイトーWW」

「が、がんばってね。一夏？」

「後で、覚えとけよー！ー！」

結局、一夏は授業開始5分後に到着し千冬さんの出席簿エクスカリバーの制裁を受けていた。

その後、一夏のラッキースケベスキルが発動し、セシリアや鈴の逆鱗に触れたり、

山田先生改がセシリアと鈴をフルボッコにしたり、いろいろあった。

そして、昼放課…

シアーンは、一夏に昼一緒に屋上で食べないか？と聞かれたが、どこからか殺氣のようなものを感じたので、断った。

シャルルも誘われたが、シャルル一人を一人にすると女子たちの餌食になるので

一夏と一緒に行動することになった。

「じゃあ、また後でな。シアーン。」

「ああ、（さてと、シャルルの事千冬さんに聞いてくるかな……）」

そして、千冬さんに連絡を取つた。

## ブーンブーンブーン

職員室で千冬さんの携帯が鳴る。

「（誰だ？）」そして、ディスプレイを見るとシャンの文字があつた。

「…？？（シャンだと…？）」浮かれ半分で電話に出ると聞きたいことがあるからしい。

時間帯から、昼食でも食べながら聞くことなつた。

場所は変わつて、人通りがほとんどないところにあるベンチ…

「で？話とはなんだ？」千冬さんが尋ねる。

「ああ、そのことですね。単刀直入に聞きます、シャルル・デュノアはホントに男なんですか？」

その質問をした瞬間千冬さんの顔が曇つた。

「…いや、正確なことは私にもわからない。ただ、デュノア家に息子がいた覚えがないのだが…」

「そうですか…（じゃあ、本当の事知るにはデュノア社にハッキン

グを掛けて調べるか、

直接聞くしかないのか…仮にシャルルが女だとしたら、目的は何だ

? … ) 「ヒシャンは思考の海に漫つてゐる。

今のヒシャンに話かけても無駄だと氣付いた千冬さんは、あまり危険なことはするなよ…と警戒すると立ち去つて行つた。

それからの授業や休み時間ヒシャンは、ずっと無言で何かを考えているようだった。一夏の後口談。

夜 :

ヒシャンは、山田先生を齋は…ゲフシングフン、お願ひしてエリ学園のスーパー・コンピューターなどのある部屋を貸してもらつた。

「ふう、やっぱす」にスペックだな…」とスーパー・コンピューターを見ながら、しみじみ言つ。

「じや、腕試しでもしとか。」そんなことを言つて、たくさんの企業にハッキングをしていく。

そして、いつの間にか夜の11時になつていた。

「おつと、そらそらデュノアにハックしなきや」とデュノア社のメインコンピューターへのハッキングを開始する。

10分ほどでハッキングを終え、ため息をつきながら…

「ハア…シャルルはシャルロットだったのか…それにしても、デュノアも悪い」としてんだな…」

インサイダーは当たり前で他にもいろいろな違法行為していた事が分かった。

「よし、じゃあ後は痕跡を消して…これで、よし。」

そして、電源を切つて自室に戻った。

自室…

シアンが自室に帰ると千冬さんも、まだ帰ってきていなかった。

「（遅いんだな、千冬さん。シャルロットのことを話すと困ったんだけどな…まあ、先に寝とくか…久しぶりのハッキングだから、疲れたら…）」

ホントに疲れていたシアンは、すぐに寝た。

シアンが寝て1時間後、

千冬さんが帰ってきて、シアンの寝顔を隠し撮りしたのは秘密だ。

## 第20話（後書き）

「うまく書けません。」

感想、誤字脱字などよろしくお願いします。

シアンが、デュノア社にハッキングを仕掛けた日の夜、一夏が一夏とシャルルの部屋で、またもやラッシュキースケベスキルを発動させシャルルが女だと気付いた。

そして、シャルルを説得してさうにフラグまで立てていた。

翌日、

朝、食堂にて…

一夏とシャルルが一緒に朝食を取っていた。  
そこへ、シアンがやつてきた。

「あー、シアンだ、おーい。」一夏がシアンを呼ぶ。

「ん？ ああ、一夏とシャルルか。」シアンは一夏とシャルルに気付く。

「一緒に食わないか？」

「ああ、」

「よつ、」

「ああ、」

「ねまよつ、シャン那」

「（今日、話してみるか。）ねえ、シャルル。今日うちひとつ話をしたいんだけど……」

「（？…まあか、気付かれた？）うん、いよいよ。じゃあ、今日の放課後僕達の部屋で良い？」

「ああ、それでいい。（一夏には、部屋を出でこなしてもうつかないけど）」

そして、一夏とシャルルは食べ終わり先に出て行った。

「じゃあ、先行つてゐるなー。」

「お先にー」

「ああ、後でな。」

「じやあ、わざわざ食こますか。」

10分で食事を済ませ、シャンは教室へ向かった。

シャンは、自身の食べ物をもひつと一人が座つてゐる席に行く。

教室…

## S H R の 時 間

「今日は、学年別トーナメントの準備をする、故に午後の授業は力  
ツトだ、S H Rを終わる。」

千冬さんは、そういうと教室を出ていく。

午後…

午後がヒマになつたので、

シャンは、シャルルに話をしに行つた。

一夏とシャルルの部屋…

「やあ、シャルルと一夏。」シャンは、手にお菓子を持って部屋へ  
行く。

「おひ、よく来たな。」

「じゃあ、入つて。」

「おじやまします。」

と、シャンは部屋に入る。

「じゃ、話つて何?」シャルルはシャンに聞く。

「ああ、ちよっと一夏は席をはずしてられないか?」

「?.なんでだよ?」

「話つてこんだ…」

「…わかった。」

シャンのこつもと違つ雰囲氣に附付き一夏は席をはずす。

「よし、じゃあ、シャルルに…こや、シャルロッテに聞かたい。」

「…（やつぱり、ばれたんだ…）ばれたんだね?」

「ああ、」

「一夏の」ことは一夏も知つてゐるから、一夏も一緒にでいい?」

「…じゃあ、いこよ。（一夏、どうやって知つたんだ?）」

そして、シャルルは一夏を呼ぶ。一夏も部屋に来たところだ、

「じゃあ、まずなんで男装してたから話すね。」シャルルは、重い話の題に明るい顔で話す。

「いや、いい。理由は知ってるから。俺が話に来たのは解決策を提示しに来たんだ。」

「「ー?」」突然の事に驚く二人。

「ど、どんなのがあるの?」シャルルは、とても興味深そうに聞く。

「ああ、昨日学園のスーパー・コンピューターを借りてデュノア社にハッキングしたんだ。

そしたら、シャルロットの事が分かつた。

それと、デュノア社の違法行為とかいろいろでてきた。」

「よ、よくハッキングできたね、それにそんなに深いところまで…

シャルルは、シアンの意外な特技に驚く。

「まあな、(東さんに教えてもらつたからな…)

それでだな、これをカードにデュノアと交渉してシャルロットの身柄の解放してもらおうと思うんだけど…

これでいいか?」

シアンは、解決策を提示する。

「…………」「二人が、どんなに頑張っても出なかつた答えを

シアンがあつさりと

見つけてしまつたので微妙な表情の二人。

「あ、あれ? 駄目だつた? (何だよその微妙な表情。)」

「い、いやそれでいいんじゃない?」

「お、おつかれでないこと思ひます。」

「えじや、夏休みにでもフランスに行つてみるか。」

「そうだね。」

夏休みの予定がまた一つ埋まつたシアンたちだつた。

その日の夜、シアンが惰眠を貪つていたらイタリアのプリン伯爵から電話があつた。

「はいはーい、久しぶりだね～シアン君。」

相変わらずよくわからないテンションのプリン伯爵。

「（ホントよくわからんよな…）お久しぶりです。ロイドさん。なんか用事でも？」

「ああ、うそ。今度、学年別トーナメントがあるんだよね？  
それに合わせて新武装を開発するから何か希望はある〜？」

こんな軽いノリで新武装を作つてしまつプロン伯爵は、やはつすいのだらう。

「（新武装か…）うーん、特にはないですけど…強いて言つなり

も「少し強こ近接武器が欲しいですかね?」

「うそりそ、わかったよーそれなりすぐ出来れりだよ。じゃあ、5日後までおくるね~」

「(せやー)わかりました。では。」

「うそ、じやーね~。」

「ジジと電話を切る。

「(新武装...) 楽しみだな...」

千尋さんは、準備に時間がかかり帰ってきたのはシアンが寝た後だった。

また、千尋さんがシアンの寝顔を見て悶えていたのは秘密だ..。

## 第21話（後書き）

最近 ~~が~~ ~~が~~ な文章しか書けない…

感想等待っています。

## 第22話（前書き）

今回は、短め。

次の日の放課後：

「「あ、」」セシリアと鈴がアリーナへ向かう途中の廊下では待ち合わせた。

そして、二人で模擬戦をすることになった。

そのころ、シアンとシャルル、一夏は一夏達の部屋でスマブで一夏をフルボッコにするという遊びをしていた。

「くそ、お前ら卑怯だぞ！一人して俺ばっか狙つて！」

「フフフ、だつて一夏つてちょろちょろ鬱陶しいんだもん。」シャルルの放つた一言で一夏は、〇＼＼状態になっている。

「まあ、そう落ち込むなって。次は、手加減してピカチュードで戦つてやるから（笑）」

「それ、お前の得意なキャラだろうが。」

そんな、コントをしていたらバーンにきなりドアが開けられ、入ってきたのは篠だった。

「た、大変だ！鈴とセシリ亞が模擬戦をしている…」ラウラと、が抜けると意味が違つてしまふ。

「「「？別にいいんじゃないか？」」なので、3人はこんな回答をする。

「お、お前達、そんな奴だったのか…鈴とセシリ亞がラウラ＝ボーデビッヒに一方的にやられていても何も思わないのか…見損なつたぞ！お前達イ！！！」と勝手に勘違いし走り去る。おひびきゲフングフンちよつと嫌ですね。

「「「ちよつとまつ（まつて）ー」」と二人で籌を取り押せん。

「あの、」ヒシャルル  
「ラウラ＝ボーデビッヒと」と一夏  
「模擬戦してるとー！」最後にシアン

「それを早く言えよ。」シアンはあきれむ。

「す、すまん。焦つていたもので…」自分の罪を認め謝る筹。

「ま、まあまあ、それよりゼノモ擬戦してんだ？筹？」一夏が聞く。

「あ、ああ第3アリーナだ。」

「わかつた、ありがとな、知らせててくれて。じゃあ行こうシアン、シャルル。」

「「ああ（うん）」」

第3アリーナでは、鈴とセシリアがラウラに圧倒されていた。

ラウラが鈴を殴りつとした時、

「その手を離せエエエ……！」一夏がアリーナのシールドを零落白夜で切り裂き、ラウラへ斬りかかる。

が、**ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンの慣性停止結界**  
[アクティブ・イナーシャル・キャンセル]  
A I C

につかまり、動けなくなる。

「つ（なんだ？体が動かない！？）」

ラウラは、口元をにやりと上げ

「やはり、敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、有象無象の一つでしかない。

消えろ。」と言じ、レールカノンを放とうとするが、『**断罪者**

[ジジメント]ズガン、ドガン。シアンが撃つた**断罪者**によって妨げられる。

「くつ 貴様あ！」とラウラは、シアンをにらむ。

「まあ、一夏も俺の友達だ。さすがに友達がやられてるといひ見て黙つて見てられないんでね、邪魔させてもらつた。」

と若干、怒氣を込めてシャンは言ひ。

「邪魔するのなら、この場で一緒に葬つてやる……」そして、プラズマソードを展開し、シャンに斬りかかる。しかし、ガキン

「やれやれ、これだからガキの世話は疲れる。」H用の装備を生身で扱う千冬さんが受け止める。

「なつ！？教官！？」ラウラは驚いた顔になる。

「シャンも、あまり危険なことはするなよ、それよりこれの決着は学年別トーナメントでつけてもらひ。」

千冬さんは、この場を丸めこもつとする。

「教官がそつおつしゃるのなら。」そして、Hを解除する。

「シャンもそれでいいか？」

「いいですよ。」

「よし、それでは」れ以降学年別トーナメントまでの間の私闘をいつせい禁ずる。解散。」

パン、千冬さんの手をたたく音が響いた。

## 第22話（後書き）

次回は、明日更新します。

作者の中では、この作品のエンディング構想が出来上がりしました。

あと、25話くらいで完結できるかと思います。

感想等まっています。

## 第23話（前書き）

やつぱり、戦闘描画は苦手です。

鈴とセシリアが、ラウラにフルボッコにされた後一人は、保健室に運ばれていった。

目立った外傷はなく、入院する必要はないようだ。

シアンたちは、鈴とセシリアのお見舞いに行くことにした。

保健室にて…

「なんで、助けたのよ！」「そうですね、あのまま戦つていれば勝つていましたわ！」

見栄を張る一人。

「何言つてゐるんだよ、ボロボロだつたじゃないか。」一夏は、あきれる。

「好きな人の前でかつこ悪い姿を見せたのが、恥ずかしかつたんだよ。」

シャルルが、紅茶と烏龍茶を持ちながら言つ。

「な、何の事かしら？これだから西洋人は…。」

「そうですね、気分を害しますわ。」

ふと思つた：

鈴 + セシリア = 金髪ツンテール じゅん。

「まあまあ、お茶飲んで落ち着いて…ね？」シャルルは、一人にお茶を渡しなだめる。

一人は、お茶を一気に飲み干す。

「それにしても、ケガも見た目よりましみたいだし…よかつたな。シアーンは、思つていた事をそのまま口にする。

「！」の程度けがの内はいらない イテテ。」

「！こんなに叫んでいたと身体、意味不明ですか つう」

「こんなやり取りをしてると、ズルズルズル外から地鳴り？が聞こえてくる。

すると、ドーン、スライド式のドアが吹っ飛んだ。

そして、

「藍川君。」

「織斑君。」

「トコノア君。」

「！」の程度けがの内はいらない イテテ。」

と紙を差し出す。

「えーと…今月開催される学年別トーナメントはより実践的な模擬戦を行うため、2人組みでの参加を必須とする。…」

「はい、ストップ。そこまででいいよ。」

「…………」「やうこつ」とだから……私と組んで?」「…………

保健室にいっぱいの女子生徒が一斉に申し込む。

「（むう、俺はメンディから一夏と組むか…あ、でもシャルルは性別ばれたら大変か…）」

シアンが、思考を働かせると一夏が「あ！俺シャルルと組むから」と言ったため、

女子生徒は、一斉にシアンの方へ向く。

「…………じゃあ、シアン君は私たちと組むしかないわね……」「…………

女子生徒（100人くらい）が一斉に詰めかけてくる。  
しかし、

「はあ、やはりこうなったか…おい、少しじけ。」千冬さんの登場で女子生徒は真ん中でぱっとばらける。

「藍川だが……一年にばかり男子がいてずる……」学年別トーナメントではこっちに来い

という要望があつてな……特例だが藍川を2年生の学年別トーナメントに出場することになった。」

千冬さんから、衝撃の事実が告げられる。

「え？聞いてないですよ、千冬さん。」ポス、シアンの時だけ優しいsyussekiboi

「織斑先生だ、それについては、すまない。だが、2年からお前の

リクエストが一番多かつたのだ…」

「（理不尽？）わ、わかりました。ではペアはぜひしたら？（2年に知り合いなんて…いるか。）」

「それなら、心配ない。更識が藍川シアン争奪サバイバルゲームで優勝し、お前のペアになることが決定している。」

「（もういいや、サバイバルとかもうしらない…）わかりました。では、」

何故か、若干頭痛のするシアンはすぐ部屋へ戻った。

100-1時にシアンが一切寄り道せず帰ると

何故かドアが開いていた。

「？（ドロボー？）」シアンは一応警戒して部屋に入る。すると

「あ、おかえり。シアン君。」樋無さんがいた。

「なんでおるんですか？」シアンは、半分呆れながら聞く。

「ん？そりゃあ、友達のおつかい遊びにきたんだよ？」と疑問形で返す。

「なんでこるんですか？」シアンは、半分呆れながら聞く。  
友達はいません

(…つかれるな、なんか)「

「（あひや、今日はなんかお疲れのようだね…出直しますか。）うーん今日は、ちょっとあいわつしどこかと思つただけだから…」めんね、じゅあまた明日生徒会室に来てね。じゃあね。」

そして、樋無さんは立ち去つて行く。

「（ふひ、これで大分落ち着ける…すこし寝よつかね…）」

すると、朝まで寝てしまった。

3日後の放課後…シアンは、樋無さんに新武装のテストをするために模擬戦を申し込んだ、もちろんすぐにOKが出た。

#### 第4アリーナ北側ビット…

「よし、量子変換終了」<sup>（インスペクター）</sup>「かなり上機嫌だ。

「じゃあ、わたくし使ってみますか。」

そして、HUBを起動しアリーナへ飛び出す。

アリーナでは、すでに樋無さんが待っていた。

「遅かつたわね。何してたのかしり?」

「失礼、少々準備に時間がかかってしまって…それにしても  
なんで、こんなにギャラリーが居るんでしょうね?」 そう、今第  
4アリーナの客席は、2／3くらい埋まっていた。

「氣のせいじゃない?それより早く始めましょう。」  
そして、楯無さんはランス そうちゅう うせん 蒼流旋を呼び出す。

「そうですね。」

シアンは新武装である槍 グングニル を呼び出し、大型ウイング  
スラクター4門を全開にして、突撃を掛ける。

ズガ グングニルが楯無さんの水のヴォールをえぐり、本体に直撃、  
絶対防御が発動する。

「グッ(すごい突破力ね...)」シアンは、その勢いのまま楯無さん  
から離れると今度は、グングニルを投擲した。

「!?(武器を投げるなんて...)」楯無さんは余裕で避けるが、  
グイン、グングニルが後ろの方に付いていたブースターが起動し、  
ジャッジメント 断罪者の様に追尾し楯無さんに命中、シアンのもとに戻つて行く。  
さすがの楯無さんも対処しきれない。

「グウツ!?(銃弾だけじゃなくて、槍まで追尾型なの!?)」  
「.....(4門同時の瞬時加速はSE的にきついな。200も使つ  
ちました。)」

イグニッシュンブースト

「ハアハア（まだ、攻撃すら出来てないのにすでに）SEが2／3を切つた。強くなつたわね… それにも…あんなスピード出したら、Gでだめになると思つんだけど…まあ、そのことはまたあとね…」

次に楯無さんは、ラスティーネイル蛇腹剣を呼び出し、シアンへ斬りかかる。

「くつー！」シアンは、グングニルでなんとか受け止める。しかし、手数の多い楯無さんに押され始める。

「つー（グングニルじゃ駄目だ、）こいつだと、押し切られる…一度距離をとつて…」

シアンは、距離を取るために瞬時加速をつかう。  
しかし、その先にはすでに楯無さんがランスを呼び出した状態で待ち構えていた。

「なー？（読まれた！）」

「こりつしゃーーー」ランスに内蔵されたガトリングを全弾撃ちだす。ズガガガガガガ シアンに直撃する。

「グワア（これは、痛いな。SEは…心もとなないな…決めるか…）」シアンは、すぐに立て直し断罪者ジャッジメント呼び出し、ズガガガガガンと6発連射する。

「くつ（これは、厄介ね…）」ギリギリで避け、弾が地面にめり込む。

「（さすがに、地面にめり込んだのは追つてこないわよね？）」楯無さんはたかをくくる。

「フフ、断罪者は、貴女を瞞りつまで消えませごよ。」そして、地面から  
断罪者の弾が楯無さるに全弾命中する。

「グッ（そんな……）」断罪者の全弾命中で楯無さるのUEが〇になる。

ワアアアアアアア

番狂わせに会場が沸く。

「（負けちやつた…生徒会長の座も譲らないことね……）」楯無さんは、少し落ち込む。

「ふう、（やつぱは強いな～、流石は國家代表だな…）」

「シアン君、あとで生徒会室に来てね。」そうこうと、楯無さんはアリーナを去つてこぐ。

「（？まあ、いつか。）」

そして、シアンは着替えて生徒会室へ向かう。

模擬戦後、生徒会室にて…

シアンが入ると樋無さんはもじつそにに居た。

「こんばんわ。」シアンがあいつすると

「やあ、それにしてもすゞいね。生徒会長である私に勝つたといふことは、

この学園で最強といつ事なんだよ、だから次の会長には君ね。」

「えー？ いやですよ。」しらりとシアンが応える。

「えー！ なんで？ 生徒会長権限つてすぐ便利よ。」使い方が、もう私欲だけだ。

「そもそも、さつきの模擬戦、非公式ですよ。」シアンが、一番大事なことを言つ。

「あ、」すっかり忘れてた、樋無さん。

「だから、俺が会長になる義理もありませんね。」

「そうね… 最後に一つ聞いてもいい？」

「はい、なんですか？」

「今日、大型ウイングスラクター4門で瞬時加速イグニッシュ・ショック・ブースト使ってたけどあれって、相当Gが掛かると思うんだけど大丈夫なの？」模擬戦の

時から思つていたことを聞く。

「ああ、そういうえば大丈夫ですね…最初はつらかったんですけどね、最近はなれたのかな?」

「へ、そう(Gって慣れる物なのかしら…?)」

「じゃあ、今田は疲れたんで帰ります。また明日。」

「ええ、じゃあね。シアン君。」

帰つたら、たまたま早く帰つてきていた千冬さんが居た。

「あ、千冬さん。ただいま。」

「む、シアンか、おかえり。今日は、大変だったな。更識と模擬戦したんだろ?」

「あ、はい(そんなに有名になつてゐるのか?)」

「で、どうだつた?(さすがに勝てはしないだら?)」何故か結果は知らない千冬さん。

「勝ちましたよ、ギリギリで。新武装がなかつたら負けてましたね

…」

「なんだとー？更識に勝ったのか？あいつは、国家代表なんだぞ。ガチでびっくりしている。

「そ、そんなにおかしいですか…（シヨン）」すこし、すねるシャン。

「うつ（＝）、心が痛いな…）いや、流石はシャンだな。」

「そうですか、よかったです。」復活が速いシャン。そして、二つとある。

「ふう、（＝）の笑顔を見るためなり、なんでも出来る気がするな…／＼）」

その後、他愛もない話をした後シャンはすぐに寝た。

## 第23話（後書き）

戦闘描写についてアドバイス、批判等まっています。

それよりも、まずはいです。

樋瀬さんにフラグが立ちそうですね。

はやく、へし折らねば…

では、また。

## 第24話（前書き）

最初に謝つとります。すいません。

シアンが樋無さんと模擬戦をした、2日後学年別トーナメント当日。

シアンと樋無さんは、試合を見ていた。

「いやー、流石2年生ですね。」シアンがじじいみたいな事を言つ。

「まあ、1年生より弱かつたら問題あるわね。」「そんな会話をしていると、アナウンスが入る。

『あと、10分ほどで1年生の第1試合が開始されます。』

「んー?見に行く?」樋無さんは聞く。

「暇ですし、行きますか。」

「そうね。」そして、2人は試合を見に行く。

10分後、とても混んでる道を生徒会長命令でじけて比較的スムーズにアリーナに入り、  
ギリギリ、間に合わせる。

「ふう、何とか間に合いましたね。(裏技使つてたけど...)」

「ええ、でも便利でしょ?生徒会長権限つて。」

「ですねー（ジト田）」

「な、なに？そのジト田は？」

「いえ、かなしいなと思つて。」

「……………」

こんなやり取りをしていると、試合が始まる。

「お、始まりましたよー。」シアンは、遠い田をしてこの権無さんを呼びもじす。

「あ、そうね。」

丁度、一夏&シャル＆ラウラ & 篠の試合だった。

「注目のかーーだつたんですね。だから混んでたのか……。」

「なるほどね、まあ、生徒会長には関係ないんだけどね。権限あるし……」

「（やつぱり、生徒会長って便利だな……）人が辞めたら俺がやろう（う。）」

そして、試合が始まつて15分ほど経つたとき、

試合が動き出した、幕がやられ、ラウラと一夏&シャルの1対2の戦いになつた。

「さすがのボーテビッヒも2対1はきついかな？」

「…………（まことにわね、もしかしたら∨Tシステムが……）」  
楯無さんは難しい顔をしている。

「？（なんか難しい顔をしてるな、楯無さん。）」

さらじこ、10分後

ついに、シャルルがラウラを追い詰め、パイルバンカー グレースケール  
殲殲通称、盾殺し（シールドピアーズ）  
を放つ。そしたら、楯無さんが急に立ち上がり管制室に走り出す。

「えー？ 何を？」 シアンは楯無さんを追いかける。

5分後、管制室に着くとラウラの機体が溶けて全身装甲のナーフになつているところだった。

「……（何だ？ あれ？）」 シアンは、驚愕する。

「なんだ？ お前達？」 千冬さんは、急に入ってきた楯無さんとシアンを怪訝そうに見る。

「え、ああ、楯無さんが急に走り出して……」 シアンがそういうと楯無さんが

「∨Tシステムですね？」

「∨Tシステム？」 シアンは聞きなれない単語に疑問を浮かべる。

その疑問に気付いた千冬さんが説明する。

「ヴァルキリー・トレース・システムの略称だ。意味はそのまんまでの意味で、本来禁止されているのだが…更識の方で何か聞いていないか？」千冬さんは、樋無さんに聞く。

「ええ、聞いています。ラウラ＝ボーテビッヒの機体に搭載されているかもしないと。」

「そうか…討伐は、織斑に頼むつもりだが…いいか？」

「かまいません。失敗した場合は、私が行きますね。」

「いいだろう。」

話が終わつたころに丁度一夏が零落白夜を発動させ、ラウラを救出したところだった。

「終わつたな。」千冬さんは、どこか安心した声をしていた。

「そうですね。」

「事後処理が大変ですね、がんばってください。お二人とも。」シアンが現実を突きつける。

「…………（そ、そうだった…）」「

すっかり忘れていた一人。

「（山田先生に押し付けるか…）」千冬さんは、すでに解決策を見つけていた。

「（）」（うこうのせ、虚にまかせましょ）「樋無さんも見つけていた。

その頃、山田先生と瀧さんは、ザワ、

「「…？（やな予感がする…）」「となつていた。

そして、結局今回の一件で一年生は試合は、一回戦のみを消化し中止、二、三年生は、時間短縮のため全試合中止となつた。

保健室…

太陽が、大分低くなつてきたこと、ラウラ＝ボーテビッヒが田を覚ました。

「気がついたか？」千冬さんは、ラウラに話しかける。

「教官ー。」ラウラはすこし、驚く。

「疲労しているからな、今日一日は安静にしておけよ。」

「はい。」

「ラウラ＝ボーテビッヒー」千冬さんが、急にラウラを呼ぶ。

「は、はい。」

「お前は誰だ?」いきなり訳のわからなことを見つめる。

「は? 私は…」

「決まっていないのなら、これからはラウラ=ボーテビッヒだ、時間はたっぷりあるしつかり悩めよ、小娘。」そう言い残すと千冬さんは保健室を出していく。

「はい。」

「話は、終わつたな?」不意に男の声がする。

「ひー? 誰だ? ( 気配が感じれなかつたぞ ) 」

「やう、怒るな。俺は勧誘に来たんだ。ラウラ=ボーテビッヒ現れたのは、20歳前後の青年だった。

「俺は、…まあ、…」とでも名乗つといつか…俺の勧誘を受けてくれたら、本当の名を教えてやるよ。  
じゃあ、本題に入ろ! …俺たちは、今世界を変えよつとしている。そのための、兵が必要だ。そこで君の力が必要なんだ。遺伝子強化試験体。」

「…何故その事を…?」ラウラは警戒を強くする。

「…何故その事を…?」ラウラの秘密を暴露する。

「調べたからさ、それだけの情報収集能力があるってことの裏付けにもなるな。

それで、どうする？」勝ち田側に来るか？

「……（まずいな…私が全く気配に気付けなかつた相手だ。勝ち田はない…）

かと言つてテロリストになるつもりもない。」

「ラウラは、葛藤する。

「（んーもうひと押しかな？）まあ、ちょっと早いけど俺のこと教えるわ、俺は、」

「……？」「ラウラは、ひどく動搖する。

「じゃあ、お前も…」

「やつだよ。俺も遺伝子強化試験体だ。俺が、この組織に属する理由はたしかに世界を変えたいとも思つてゐる、だが一番大きいのは、俺をこんな化物にした。クス研究者への復讐だがな。

お前も思つた事ないか？自分は、なんでこうなつてゐる。と

「…………ないと言えば、うそになる。」

「だう？ だつたら一緒に戦おつぜー兄妹。」ラウラを妹と呼んだ。

「フツ、いいだろ？ 愚兄！」 ラウラは「を兄と呼んだ。ただし、『愚』がつくが…

「おいおい、愚兄はないだろ？ 親しみをこめてジョンスお兄ちゃん…」 んつて呼んでくれ。」

「む、じゃあ、ジョンスお兄ちゃん…」 これでいいか？」

「おおう…こいよ、すいへいこよー」 どうやら… ジョンス＝ボーティッシュは変態の様だ。

そして、ラウラは軍人から犯罪者になつた。

## 第24話（後書き）

すいません。特にラウラ党の人。

そろそろ、敵組織を出さないとオリジナルに入れないので  
ごめんなさい。

それでは、また次回もよろしくおねがいします。

感想、批判等どんどん送ってください。

番外編 2 ハロウィンでレッテルアリイイイ（前書き）

読まんでもいいです。

## 番外編 2 ハロウインでレッソニアリイイ

10月31日…言わずと知れた?ハロウインの日。

IS学園では、イベントが開かれていた。

名付けて『秋だ!ISだ!ハロウインだ!藍川シアン、織斑一夏争奪戦ハロウインパーティー!』

ネーミングは、気にしない方向で…

ルールは簡単

IS学園に存在する、主要部活動はお菓子を作り、シアンと一夏に試食してもらい

一番おいしいと言わせた、部活にシアンと一夏が入部するというルール、

もちろんシアンと一夏は、どれがどのお菓子かは知らない。

当田、多目的ホールにて…

『さあ、はじまりました!藍川シアン、織斑一夏争奪戦ハロウインパーティー!!

準備はいいか?野郎ども〜〜〜〜〜〜〜〜!

「　「　「　「　「　うおおおおおおおおおお……」」」

おやおしい、雄たけびを上げる女子たち。

『元気があつてよろしい。では、せっそく行ってみよつかー。』司会の人があつこいつと、シアンと一緒にクッキーが出される。

「　「　いただきます。」」 サクッ

二人は、少しかじる。

そして、二人に衝撃が走る。

「…！（な、なんだ？これは？鼻に来る。）」

「…！（！）」、これはまさか…）」

「　「わさび塗り込んだな～～～！～～～！」」

『おお～いきなり、衝撃の作品です。この、お菓子を作ったのは…リアクション研究部です。』

「　「　「　「　「　えーー、良いデータが取れました。」」」

どうやら、この部が欲しいのはシアンと一緒にではなく、二人のリアクションだったようだ。

『では、気になる結果をどうぞ…』いよいよ、会場が息をのむ。

「「0点にきまつとるわーーー！」」二人は、かなり怒りを込めて言う。

— 1 —

『では、あんなゲテモノを出した、リアクション研究部に憐れみの拍手をー。』

バチバチバチ、約二名からは若干殺氣立つてゐる。

『それでは、次の作品です。』

次に運ばれてきたのは、チョコレートだった。

「おおー！」二人は、その出来栄えに感嘆する。

『アーニング』

パク、二人はゆっくりと咀嚼する。

「！」

二人に再び衝撃が走る。

「（これは、非の打ちどころがない……完璧だ！）」

「（ハモニ、田舎者か、どうかな）」若くもなに、すべてが一度いい。完璧だー。」

『お?』これは、期待できそつか?では、結果をどうぞ。』

「Perfect!」

何故か、一人から英語が出てくる。

『おお、最高得点をたたき出した。この部は……なんと一ラグビー部です！』

「ええええええええええ！」

「嘘です！本当は、生徒会です。」

なんだよ、ビックリさせんなよ、などと不満の声が聞こえるが、このことは全く気にしない。

『それでは、次行つてみよう。』

こんな感じにどんどん消化されていった。

ときたま、え？ これお菓子？ ビリみてやがれ」といはて。他には、あの

紫の煙が上がってるんですか

市販の物をそのまま出す端溝などがあつた。

結局、Perfectを出したのは、生徒会だけだったのでシアンと一夏を獲得したのは、生徒会でした。

シアンと一夏は、次の日学校を休んだ…理由は簡単だ、紫の煙の上  
げつている物を  
食べたからである。

後日、シアンの日記にこんな記述があった。

今日は、紫のスープを飲んだ。  
紫、  
紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫

紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫  
紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫紫

数日間、シアンは紫恐怖症になり自身の専用機のカラーリングを変

えたそ  
うだ。

番外編2「ハロウインでレッツ・パアリイイイ（後書き）

おおおですね…

作者もビックリです。

## 第25話（前書き）

一人称も三人称もあんまり得意じやないですが、

一人称の方が苦手でした：

「ウラだ！ 今回ま、ビーフやら私視点で送る！」

私が、V-Tシステムを起動させた次の日。

私とお兄ちゃんは組織の日本アジト本部に来ているその中でもV-Tルームの前だ。

さつきお兄ちゃんが、今一度ここにいるボスを呼びに行つたので私は今一人でいる。

ガチャリ、ドアが開くとジエノスが出てくる。

「はいってだつて。」

「わかつた。」

そして、中に入ると

25歳前後の男が居た。

「やあ、ラウラ＝ボーテビッヒ君。我々は、君を歓迎する。」

「ありがとうございます。失礼ながら、貴方のお名前を教えて下さいませんか？」

名前くらい教えてほしいな。

「ああ、すまない。私は、藍川シェンだ。」

藍川！まさか…

考えを読まれたのか、シモンは…

「お察しの通り、私は藍川シアンの兄だ。」

「どうだ？ シアンはしつかりやつていたか？」

そんな… しの事を藍川が聞いたならどうだ？

「ええ、咄と打ち解けでいたよつでした。」

「わうか…（今の世界を楽しんでるのだからか…シアンは…）」

心配なのか？ 兄はそこそこものなのか？ ジャア、ジノースお兄ちゃんも…

「わうだ、君にはすまなじが」のまま、学園に在籍して潜入していくくれないか？」

「全く問題ありません。」

「すまないな。」

「いえ。」

「ん？ 話は終わつた？ リウカワせ、ビリキヌヘ、隠るヘ。」

「ディッシュに行つていふことになつてこぬから… 3日は帰れないと見学をしたらいけないか？」

「全然OKだよ、俺が案内しよう。」

「ありがとう。お兄ちゃん…」

「おおうーこよ、お兄ちゃん何でもしてあげる。ん?若干鼻息が荒いが…何故だ?まあ、いいや。

リウラ視点終了。

その後、リウラとジエノスはアジトを回ってリウラは、アジトに用意された浴室に帰った。

ラウラがアジトに行っていた日…100-1浴室  
千冬さんは、事後処理を終えたが難しい顔をしていた。

「(リウラ…あいつ、ダイシに帰るとおきながら帰つていな  
いな…)

何故分かるかと訊つと、ダイシに聞こ合わせたところ帰つてくれる予定はないと答えたからだ。

「(つまり、私たちに言えないような外出をしてくるとこうした事…何  
があるのかは、全く見当がつかない…  
結局、見守る」としかできないのか…)

千冬さんは、ハアアと海より深いため息をつく。

そしたら、シャンが帰つてくる。

「ただいま。」

「あ、おかえり、シアン。」夫婦みたいな二人。

「今日は、早いですね。」

「ああ、それよつラウラの事だが……」  
やつ言つとシアンの顔が険しくなる。

「（まだ、気に入つていないよつだな…まあいい）今、ラウラはドイツに行つていると本人から報告を受けた。  
だが、ドイツに問い合わせたのだが…帰つてくる予定はないよつだ。」

「…え？ なんで？ そんな嘘をついてまで言えない用事があるんですね？」

「やうなんだらうか…（やんな物があるのか？ あのラウラに…）

「とつあえず、ボーテビッヒに聞いてみたらどうですか？」

「（やうするしかないか。）わかつた。そうしてみよ。」  
そして、ラウラの話を切り上げる。

「やうだ、もうすぐ臨海学校だ。しつかり準備をしておけよ。」

「はーい。」

「では、寝るか。」

シャンは、寝る。

その日、シャンは夢を見た。

親がまだ生きていて、兄もまだ一緒にいたころ、温かい夢を見ていた。

「……（懐かしい夢だな……兄貴……どうしてるんだろう？たまに、家に手紙が届いてるから生きてるんだろうけど……何で、どっかに行つたんだ？でも、なんで今頃こんな夢を……？）  
（こや。）」

波乱の臨海学校まで……あと5日。

## 第25話（後書き）

今回やる意味あるのか？って考えている作者です。

早く、夏休み編書きたいなあ～

感想等待っています。

## 第26話（前書き）

すこません、朝学校行く前にササッと投稿しておいたついでですが…

回線が込んでいてログイン出来なかつたので…

みなさんば、どうでした？

臨海学校までの5日間特に何もなべ過ぎ去つ、臨海学校当口。

『海、見えた!』誰かが、そつと車内が騒ぎ出す。  
しかし、シアンは…

「…………すう……」爆睡だった。また、その寝顔を見てハアハア  
言つてゐる人もいた。

目的地に着くとまずは、お世話をなる旅館へあこがつしに行く。

「いんにひま、畠さん元氣があつていいでですね。」全員であこがつする。

「いんにひま、畠さん元氣があつていいでですね。」全員であこがつする。  
と女将さんが男子2人の方へ来る。

「あなた達が……？」

「あ、はい。藍川シアンです。よろしくお願ひします。」  
シアンが丁寧にあいわつする。

「いりがいりや、清州景子です。」

「あと、千冬さんが、一夏にも捺摺するみづてだす。」

「ほり、お前もあこがつしぃ。」

「お、織斑一夏です。」

「はー。」

そして、清州さんは全生徒の前に行き、  
「海に行かれる方は、荷物を置いた後更衣室へ。」

「　　「　　「　　「　　「　　「　　「

女子の大移動が始まる。

「あ、そつだ！千冬さん俺たちの部屋つてどいですか？」

「ああ、シアンは私と同じ部屋で、織斑はその隣の部屋だ。」

「わかりました。」シアンと一夏も部屋へ移動する。

部屋に着くと…

「よし、じゃあ俺たちも海に行くか！」一夏がそつ言つと、

「じゃあ、日焼け止め塗つて、テーブル持つて、パラソル持つて、  
ベットもいるな…あと、ジーさんとグラサンは必需品だな…。  
シアンが用意を始める。それも、かなり用意周到だ。」

その後、着替えて荷物を持って海に行った。

一人が浜に来ると、すでに来ていた女子が騒ぎ出す。

『あー藍川君と織斑君だ!』

『え、ビービー。私、水着変じやない?』

『一人ともしつかり鍛えてるんだね。…じゅる』

「…ビクッ(今、何か寒気が...)」

「んじゃ、一夏は泳いでくるか?」 シアンは、泳ぐ気がないようだ。

「シアンは、海嫌いだったな。」

「?.忘れてたのか?」

「いや、何か言わないといけない気がして…まあ、そんな一夏は置いといて…」

シアンは、パラソルを立てベットを置き、グラサンを掛けて、テープルを置きそこにジュースをセットする

完璧にバカansス気分だ。さらに、この間の時間わずか30秒。

「ふああ、眠…ぐう」 シアンは、寝てしまう。

しばらくして、一夏がお前、ビービーのギャルgeeだよつて展開になつたり、千冬さんが際どい水着で海に出てきたが、全く起きる様子のなかつたシアンだつた。

ちなみに、千冬さんはシアンの写真を結構隠し撮りしていた。

「……お、こ……起きるー。」夏は、全然起きなシアンを起しよ。

「……うへ……おお、一夏か…。」シアンは、よひやく起きる。

「ほひ、メシ食こに行くわ。」

「あぐ、行けー。」空腹だった、シアンはメシと聞くとあぐで起きる。

「お、おねい。」

ちなみに、何故かシアンは教員と一緒に席だった。

どうやら、千冬さんが裏から手をまわしたようだ。

夕食後、男子が浴場を使える時間に風呂へ入り、部屋に帰った。シアンは、千冬さんが居ない事を良い事に

冷蔵庫から秘密にチューハイを取り出し飲もうとする。

「残念だったな。もう帰ってきた。」

「あひや、い、これはカルピスソーダですよ。」そして、後ろに隠す。

「まあ、今日へりこ見逃すわ。」寛大な心を持つ千冬ちゃん。

「あ、ありがとうございます。」

「次は、ないぞ。」シアンに對してだからあまり怖くない。

「は、はい。」

「フツじやあ、今日は呑むぞ!」

千冬ちゃんも、冷蔵庫からビール（プレミアム・モルツ）を取り出し  
ふたを開けて、一気に飲み干す。

結局、部屋の冷蔵庫のお酒をすべて飲み干したあげく、山田先生の  
部屋に上がり込み

お酒を全部かつさらつて行つたりして、楽しかった。

その後、シアンの2・3倍の量飲んだ千冬さんはついに酔いつぶれ、  
シアンが介抱していた。

「（やれやれ、だからあんなに一氣飲みしない方がいいって行つた  
のに……）」

なんと、千冬さんは最後には、アルコール度数50%の酒を瓶で飲  
んでいたのだ。

「…………」千冬ちゃんは、顔を真っ赤にして横になる。

「（うひ、酒臭い……酒気に充てられる……でも、やっぱしきれいだよ  
な……）」

こんなやり取りをしている中、ラウラは、外、誰もいない場所でジエノスたちと通信していた。

「では、明日、銀の福音シルベリオ・ゴスペルが暴走するんだな？」

『そう、それに便乗して家の無人機を少し送ることになったからね。』

「わかった、では明日。」

『明日ね。』ピッカラワフは小型テイスプレイを切り、旅館へ帰る。

「…（明日か…）」

ちなみにシャンは、千冬さんを介抱したのち、自分も寝てしまった。

その日、また、家族の夢を見た。

## 第26話（後書き）

シアンの家族の設定があったことに気付かなかつたと思いますが

実は、最初の方の設定に書いてあるんですよ。ちょびっただけ。

どんづんひづくなつていいく文章ですが、よろしくお願ひします。

次は、ジョノスとシェンについての設定を載せよう  
と思います。多分今日中に…

## 第27話（前書き）

すいません。ジョノスとシヒンの設定はあとがきにあります。  
載せることにしました。

シアンの画像がみてみんに：<http://4179.mitemin.net/i34098/>

## 第27話

臨海学校2日目…

この日は、専用機持ちは各機のデータ採りを一般生徒は、訓練機での研修となつていて。

砂浜で、シアンはなかなか届かないパッケージにイライラしていた。

「（おいおい、プリンさん。パッケージいつ届くんだ？）」「そりゃあていいと、

「「」あんねー遅くなつて～」なんとプリンさんが現れた。

「あれ？今日来る予定でしたっけ？」

「許可とつたんだよ～態々。ごめんだけど、ちょっと体見せてもらひつていい？」

はたから聞いたら、変態の上なに発言だがプリンさんはハハニコつた趣味はない。

「？は～。」疑問を持ちつつも上着を脱ぐ。すると、周りの女子が顔を赤くしたり、鼻血を出している人もいた。

ちなみに、千冬さんは何とか耐えていた。

「うるさい。やつぱり…」プリンたるせ、シアンの体を見ながらつなづく。

「何がやつぱりなんですか？」

「んー？ああ、最近送られてくるデータで君、Gに対する耐性が出来ているみたいだから、

見に来たんだ」、そしたら、案の定だつたねえ「うん、やつぱりリベリオンに乗つてたからかな？」

リベリオンって実は、普通に8Gぐらいかかるんでよ、スラクター全開にすると、10Gぐらいにかな？」

と、なんでもない事を言ひつ。

「あー、やつぱり、そりなんですね。」

「心当たりがあるみたいだね、それはいいとして、それなら、このパッケージを使っても大丈夫だね、じゃあ、インストール量子変換を始めるから、リベリオン出しちゃ。」

「はい。なるべく早くお願<sup>イ</sup>こします。（早く、テストしたいし……）シアンは、リベリオンを差し出す。

「はいはーい」そして、プリンセスは始める。

5分後、驚異的な早くで<sup>インストール</sup>量子変換が終わった。

「よし、終わり。じゃあ、この超機動型パッケージ『光の羽』<sup>ルーチョウハイビューマ</sup>の説明をするね。』

「はい、おねがいします。」すると、プリンセスは空中投影機で説明パネルを出す。

「うん、光の羽<sup>ルーチョウハイビューマ</sup>は、僕の研究所の開発した

エネルギー・ウイングを搭載しているんだよ。エネルギー・ウイングはね、

背部のこの装置から翼状のエネルギーを放出するものでね既存の全EISの中で最も速い速度が出来るんだ

まあ、今のところシアン君ぐらいしか乗れないかな？

エネルギー消費がとっても激しいから、稼働時間は15分が限界かな。

と長々と説明する。

「稼働時間がネックですね。」

「そうだね、これから改良して、標準装備出来るよう努めつつもまだからね。

じゃあ、データ取るから起動させて飛んでみて。」

「はい。」

そして、シャンはEISを受け取るとすぐに展開し上に飛びぶ。

それを視認出来た者は居なかつた。それぐらい速いのだ。

「「「「「…………」」」」 周りに居た人は固まつてしまつた。

「（おいおい…消えたようにしか見えなかつたぞ…）」

千冬さんすら、何も見えなかつた。

「うんうん、データ通りの結果だよ～じゃあ、僕は帰るね～」

「あれ？ プリンセスは？」

すると、上からシアンが降りてきた。

「あれ？ プリンセスは？」

そして、次は東さんが現れて紅椿をお披露出し、また周りを驚愕させていた。

「なあ、シアン……」一夏が、シアンを呼ぶ。

「何？」やけなく返す。

「いや、紅椿とシアンの機体どっちが速いんだ？」

「…………やつてみるか。」

そんな一夏の一言でシアンと幕のタイムレースが始まった。

結局、シアンが勝ったのだがそれが、東さんは不満だったようだ。

「（私の作った子が、他の奴が作ったのより遅いなんて…作ったやつは許せないな…）

まあ、シー君には悪いけど今日、壊させてもいいよ、あとその機体を作ったやつも殺さなきゃ…）

その後、山田先生が走ってきて、千冬さんに何かを伝えると千冬さんは専用機持ちを招集し一般生徒に部屋へ帰るよう指示し、部屋から出るなど言って旅館に帰る。

作戦本部…

昨日は、生徒が夕飯を食べた部屋には大量の機材が持ち込まれていた。

「では、お前達を呼んだ理由を説明する。」  
千冬さんから説明がなされる。

「先ほど、アメリカとイスラエルが共同開発した銀の福音がシルベリオ・ゴスペル試験飛行中に暴走した。」

「え！でも何で俺たちを…」一夏は、疑問に思う。

「話は最後まで聞け、福音が2時間後にここから2キロ先の海上を通る事が判明した。それを専用機持ちで対処しろとの事だ。」

「でも、普通は教師部隊で対処するべきだと思いますが…」シアン

が尤もな事をいう。

「ああ、そうだ。だが、如何に教師部隊とは言え使つ機体は第2世代機だ。

第3世代の最新機を相手をできるとは思えない……幸いなのか今年の1年は専用機持ちが大勢いる。

それに、最近データを取る機会がなくて困っているのだろ？」

「…………」「…………」「…………」「…………」「…………」

正論を言われ押し黙る。

「そういうことだ。では、作戦についての質問は？」

するとセシリ亞が、スペックデータを要求しそれに基づいて作戦を立てる。

「IJの速さで動いてるなら、やっぱり一撃で落とさないとね……」シヤルルが思つた事を口づ。

「そうね、一撃で倒すなら…零落白夜…つまり、一夏あんたね。」シヤルルがシヤルルの言葉を受け継ぐ。

「問題は、どうやってそこまで運ぶか…攻撃にすべてのエネルギーを使いたいだろう。

（福音の暴走だけでなく、家の無人機も来る…大変だな…）」ラウラは、助言する。

「それなら、シアンさんのリベリオンか、わたくしの強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』のどっちかでしょうか？」セシリ亞が解決策を上げる。

「いや、俺の機体だと一夏がついてこれないから、セシリアのがいいだろ？」「

シアンが俺のは駄目だと告げると、一夏が、今さらな事を言つ。

「ちよ、ちよと待て、俺が行くのか？」

「「「「当然」」」全員の言葉が一致する。

「織斑、これは実戦だ。覚悟がないのならやめて、さっさと部屋に帰れ。」「

千冬さんが一夏を試すように囁く。

「…え、やります。俺がやります。」一夏は、覚悟が出来たようだ。

「よし、ではオルコット、パッケージの量子変換<sup>インストール</sup>は終了しているか？」

「ちよーと待つた。その作戦ちょっと待つなんだなー！」

作戦が決定したと思つていると上から東さんが現れ、紅椿の出番だと言つて作戦を変えることになった。

「では、最終決定した作戦だ、

織斑は、篠ノ之内福音まで運んでもらい、零落白夜で福音を落とせ。藍川は、作戦失敗の場合全力で一人を連れ帰ること。以上作戦開始までに各自準備をしておけ。」「

そして、作戦は決まった。

浜にて、

『作戦開始まであと10分だ』千冬さんがそう言つと、一夏と篠は作戦の最終点検をする

「ふう、結構緊張するな～」一夏がそう言つと、

「何を弱気になつてゐるんだ、私と紅椿が居るんだ。大船に乗つたつもりで居ろ。」

篠が調子に乗つたことを言つた。

「あ、ああ（篠、浮ついてる？）」

一夏でも気付くぐらゐの浮つき具合の篠。

『織斑、篠ノ之はどうも浮かれているな…氣をつけっていてくれ。』  
と千冬さんから通信が入る。

「わかつてゐよ千冬姉。」

『織斑先生だ、頼むぞ。』

そして、次はシアンに通信が入る。

『シアン…藍川、篠ノ之は浮かれているおそれく何かしらのミスをする。』

織斑にも気を付けるように言つたが、限界がある…頼むぞ。』

「はい。そうだ、この戦いが終わったら話があるんですが…」

『？ああ、わかった。じゃあ、ちゃんと帰ってこよ。』

「はいー。」

『ん、そろそろだな。』

時計を確認すると、もうすぐ作戦の時間だった。

『では、作戦開始！』その一言で作戦が始まった。

その頃のラウラが所属する、テロ組織の作戦本部にシェンとその部下が居た。

「まもなく、織斑一夏と篠ノ之箒が銀の福音と交戦距離。」  
部下の一人がそう報告する。

「さうか、では無人機の準備を…（頑張ってくれよシャン）」  
シェンは、指示を出す。

「了解。」

場所は戻つて、一夏と箒…

一人は、福音を攻撃するが避けられるを繰り返していた。

「くそ、当たらねえ！」

一夏は、悪態をつく。

「（…）は、私が！」」 篦は、一気に福音への距離を詰め斬りかかる。

福音が篚の相手で手間取る。

「今だ！一夏！私が抑えている間に…」

「おう！」一夏は福音に斬りかかるとするが、そこに密漁船が通りかかる。

「なー？船？この海域は封鎖したんじや…、密漁船か！チツ！」  
一夏は、チャンスをフイにして船を助けに行く。

「なーおい！一夏！そんな奴を助けるなー！」

「篚、そんな事言つなよ、そんな悲しい」と言つなよ、

力を持つた瞬間、周りのやつが見えなくなるなんて、らしくない。

その言葉を聞いた時、篚は、剣道の全国大会を思い出していた。いや、思い出してしまった。

自分の暴力で、相手を気づ付けてしまった時の事を…

「私は…違う、ただ、一夏と一緒に戦えるのがうれしくて…」

と完全に福音から注意をはずしてしまつ。  
すると、福音は銀の鐘シルバーベルを篚に向かつて放つ。

「 篠イーー（間に合つてくれ！）」

一夏は、篠を庇う為に全速力で篠の前に行く。

そして、ズガガガ一夏は、銀の鐘シルバーベルを受けた。

「ハツ！一夏？い、一夏————！」篠は、我に帰ると叫ぶ。

「……藍川から作戦本部へ、作戦は失敗。織斑一夏は撃墜。オペの用意を頼む。それでは帰還する。」

シアンは、作戦本部に報告する。

『了解。』

千冬さんのその言葉を聞くと、Hネルギーウイングを展開し

二人を連れて福音が追いかけられず、一人が耐えられる速さで作戦本部に帰還する。

旅館に帰ると一夏のオペが始まつた。

## 第27話（後書き）

ジョノスの設定から

ジョノス＝ボーテビッヒ

身長190センチくらいの長身

体重は75キログラム

容姿は、上の上、目の色は黒、目の色も黒日本人のような顔をしているが、ドイツ人。

生い立ち…「ラウラ」とおなじ遺伝子強化試験体「ラウラ」とおなじ遺伝子の配列パターンで、うまれた。  
自分を作った研究者たちを憎んでおり、復讐をするためにテロリストとなつた。

設定はこんな感じで…次回はシエンの設定を、

今回は、一夏撃墜でした。

微妙な所で切つてしませんでした。

次回は、明日です。よろしくおねがいします。

今、ちよつと軌道に乗ってきてどんどん書けます。

ま、面白いかは別ですが…

それでは、この辺で…

次回もまた見てくださいね！

じゃん、けん、ぽん！ グー フハハハハ

ゲホゲホ。

第28話（前書き）

始まりの部分がすこし、変ですかお気になさいす…

場所は変わつてテロ組織の作戦本部..

「織斑一夏撃墜!、どうなれこますか?」 シーンの部下の一人がそう尋ねる。

「じゃあ、無人機を出発させろ。」

「了解、無人機発進!」

すると、ガレージが開き無人機が3機飛び立つ。

その頃、ラウラとジエノスが通信していた。

『ん?…わかった。ラウラ、今そっちに向かつて無人機が出発した。気を付けてね、ちゃんと逃げるんだよ。もし危なかつたら呼ぶんだよ、お兄ちゃんつて。』

ジエノスがシステムを発動させる。

「わかつてゐ、お兄ちゃん。そろそろ、切る。」

『何時でも、呼んでよ。お兄ちゃん心配だから。』

「はいはー。」そして、ラウリが通信を切る。

「（織斑一夏が撃墜か…奴には、バーチシステムの備りがあるな、お兄ちゃんからもひつた

治療用ナノマシンをやるわ。これでキャラになるか？）」

「うわー、一夏に治療用ナノマシンをひそかに打ち込んだ。

IHS学園の作戦本部…

そこでは、レーダーにて口組織の無人機が立っていた。

「？なーこれは！？」山田先生がそれに気付き驚きの声を上げる。

「どうした？山田先生。」千冬さんが聞く。

「れ、レーダーにて反応が3つ…これは、学園のIHSではないです！」

しかも、IHSに向かっています。」

山田先生は、青ざめた顔で囁く。

「なんだと…？（へそ、こんなときに敵襲だと…）

千冬さんの額には、冷や汗が流れれる。

「（専用機持ちの女子は、今一夏の撃墜で落ち込んでる、ラウリ

はそこまででもないが

あいつは今、あやしい。シアンに3機相手させるのは...くつしかた  
ない)シアン!』

千冬さんは、シアンのHSにプライベートチャンネルを入れる。

「何ですか?」シアンはすぐに答える。

『今、この旅館に敵ISが3機迫つてきている。すまないが撃退してくれないか?』

「.....一人ですか?」不安なのか、シアンは聞き直す。

『...不安なら、教師部隊から一人つけるが?』

千冬さんは、限界の譲歩をする。しかし、

「いえ、居ないなさいんです。エネルギー・ウイングに付いてこられるとは思えませんから...」

シアンは、邪魔だから付けるなという意味の事を言つ。

『...それもそうだな...ここから、5キロ先の地点が防衛ラインだ。  
最悪2キロまでなら下げてもいい。しつかり頼むぞ。』

「了解!」

そう答えると、通信を切る。

そして、すぐに外へ出てリベリオンを展開、  
敵ISの方へ飛んで行つた。

シャンが敵IISを倒しに行つた時、筈は一夏の部屋の中で自分の事を責めていた。

「（私のせいで、一夏が…くそ、力を手にしたら使い方を間違える…私は変わらないのか…）」

そんな事を考えていると、鈴がやつてきて筈を諭し、彼女たちは、福音にリベンジマッチを挑みに行つた。

宿から115キロ地点で…

シャンは、エネルギー・ウイングを展開せず、通常の状態で飛んでいた。

「（そろそろか…）」そう考えていると、超高感度ハイパー・センサーが敵IISの機をとらえた。

「見えた！」そして、シャンはエネルギー・ウイングとグングニルを展開し、1機に狙いを定めて突撃する。ヒュン、ドガーンハイパーセンサーでもとらえられないくらいのスピードで突撃された敵IISは、一瞬で御陀仏になつた。

「おいおい、半端ない威力だな…」使つた本人も驚いているようだ。

テロ組織の作戦本部でも驚きの声が上がっていた。

「な！？無人機の反応が一つ消滅し、これは…藍川シアンのIRS反応です！」

シエンの部下の一人が驚愕しながらも報告する。

「ほつ、シアンが出てきたか。」だが、シエンは余裕だ。

「（シアンが来るなら、もっと良い物を送ればよかつたかな？）」

場所は、戻つて15キロ地点…

「（おかしいな、味方が突然やられたというのに、一切動搖がない…それほど、鍛えられた人間なのか？いや、だとしても動搖がないのはおかしい、まさか…無人機か…）だとしたら、絶対防御はいらないな…」

そして、シアンは絶対防御の発動を妨げるジャマーを発する機械を使い、絶対防御をなくす。

「（自分にも効果があるのが欠点だよな…）」そう、この機械にはそういう欠点が存在する。

半径1キロ以内のIRSに働きかけることが出来るが、敵味方関係なしに効果が表れるのだ。

「負ける気がしないからな！」

そして、シアソは、グングニルをしまい。

『断罪者の怒り（ジャッジメント・イスプロジョン）』（断罪者の強化版：具体的には、弾の装填数と  
弾速の向上）を呼び出し、全弾フルオートで打ち出す。  
ズガガガガガ全12発の弾丸が耐久力の高そうな、いかつい無人機  
を抉る。

ジジジ、ドガン無人機が爆発する。

ここまでの時間約5分…驚異的な速さで2機の無人機を倒す。

そのことに両作戦本部は驚く。

テロ組織の方は、

「なー!? 防御型の無人機まで一瞬で…なんて攻撃力だ…!?」  
自慢の無人機がやられて焦りの色がまじまじと見える。

「いいや、どうせそんなに強い物ではない。」シエンは何時でも余裕だ。

「しかし、あれは我らの最高無人機。」

「所詮は、無人機。有人機には勝てないさ…（まあ、シアソが強い  
のもあるけど…）」

学園の方は、

「あ、藍川君すごいですね。もう2機倒しちゃいました…」

山田先生は、すこし安堵する。

「ああ、（さすがは、シアンだな。あの機体を乗りこなしている。）

「

と両陣営では、まったく違つ驚きがあつた。

再び15キロ地点。

「さて、お前が最後だ！」

そして、グングニルを呼び出し、投げつける。

しかし、スマートな形で機動型だと思われる機体は簡単に避ける。

「甘い！」グングニルの後ろのブースターが起動し追尾するがそれも避けられる。

「！？今の読んだのか？」シアンは、避けられるとは思つて居なかつたので驚く。

「だけど！」帰ってきたグングニルを仕舞い。サーマルガン…アイザイアン・ボーン・ガン・デュエ

（最大入力できるジユール熱が上がっているため、前の時より威力が2倍近く上がっている）

を呼び出し、ジユール熱を最大で入力し、撃つ。

バーン、馬鹿げた威力の弾丸がスマートなタイプの無人機に向かっ

て行く。

しかし、無人機は持っていたビームガンで威力を緩和し、シールドも使いかなりダメージを抑えていた。  
さらに、そこからビームガンをシャンに向けて連射する。

「つー」シャンは、飛び回り回避する。

「（まづい…そろそろ15分経つ…エネルギーが…）」「  
そこをつきそうなエネルギーを気にしながら避け続ける。

「（こうなつたら、最高の突破力で…）」

シャンは、どんどん濃くなる弾幕を突破するために、グングニルを呼び出し、エネルギー・ウイングのリミッターを解除  
そして、最後のエネルギーを全部使い最初と同じ、突撃を仕掛ける。

無人機は、ビームの収束率を最大に上げ迎え撃つ。

シャンのグングニルとビームが激突する。

「うおおおおおおお…！」

グサツ

シャンは、ビームを破り無人機の腹を突き刺した。

ドガ　ン

無人機は、盛大に爆発した。

「ふう、終わったか…なかなか強かつたな…」

そして、シアンはEISが完全にエネルギー切れを起こす前に作戦本部に帰った。

「ただいま、帰りました。」

「よくやった！で、早速で悪いのだが…あいつらが命令を無視して福音を倒しに行つたのだ、

悪いが、加勢してきてくれないか？」

「いいですよ。（福音は、一応一夏の仇だし…）」

「では、頼む。（これで、なんとかなりそうだな…それにしても、あの敵EISはどういの組織だ？）」

その後、補給が済んだシアンは福音のもとへ飛んで行つた。  
途中で「福音—どこだー」と情けないことこの上ない一夏を見つけて、  
一緒に飛んで行つた。

## 第28話（後書き）

今回は、シオンの設定

藍川シオン

身長…175センチぐらい

体重…67キロぐらい

容姿…上の上、イメージは、デュラララの岸谷新羅

生い立ち…シアンとは10年くらい早く生まれている。

性格…冷静沈着でつかみどころがない

こんな感じで…

次は、明日です。

駄文ですが、これからもよろしくお願いします

## 第29話（前書き）

今回は、地雷が設置われおります。  
お気をつけ下さい。

二人が、福音の居る所に着くと  
簞が一人で福音の相手をしていたが、銀の鐘シルバーベルの直撃を受けてしまっていふところだつた。

ドガソ、簞は、そのまま飛ばされてビニカの苗場に激突してしまつ。それを遠くから見ていた一夏とシアンは、

「簞イー！」一夏が助けに行きたそうである。

「…行きたいなら行け。」シアンが、送り出す。

「えーでも福音が…」

「俺が引きつけとくから…早く行け、そしてさつさと帰つていい。シアンが、鬱陶しそうに言つ。

「わかつた。行つてくる。」

そして、一夏は簞の方へ向かう。

「（行つたか…）じゃあ、福音君。暫く相手をせてもいいつよー。シアンは、グングニルで相手を始める。

「（…命令無視までして来たのに…倒せなかつた…会いたい…一  
夏に会いたい、会いたい）」

「…篠が一夏に会いたと願つていると、一夏のやさしい声が  
する。

「…一夏？」

「ああ、大丈夫か？こんな時になんだけど、誕生日おめでとわ。いつもの髪型のほうが似合つてゐるぞ」  
そして、一夏は白いリボンを渡す。

「…え？（覚えていてくれたのか…？）」

「今日は、7月7日。篠の誕生日だら。」一夏は、一ヶと笑顔を作  
る。

「ああ、そ、そのありがとわ。」恥ずかしそうに言ひ。

「おひ、じゃあシアンが一人で戦つてゐから…行つてくる。

そう言つと、一夏は福音の居る地点へ戻つて行く。

「（戦いたい、私も一夏と一緒に戦いたい…）」篠がそう思つて  
いると、

紅椿が黄金に煌めきだす、

「…?これは…」すると、SEが回復する。

「工ネルギーが回復…？…絢爛舞踏？…これが、紅椿の唯一仕様の特  
オファビリティ！  
殊才能！」

でも、これで一夏達と一緒に戦える…。」

そして、幕も福音の居る地点に飛んでいく。

福音の居る地点では、

シアンが、グングニールとアンタレス・パウサ（アサルトライフル…  
アンタレスの強化版）

で福音を抑え、その隙に一夏の零落白夜や雪羅のクローモードで攻  
撃を繰り返していた。

「（やばい、工ネルギーが…）」一夏のSEは残り10未満だ。  
しかし、そこに幕がやってきて白式のSEを絢爛舞踏で回復させる。

「な…？ 工ネルギーが回復した？ ピッちゅう！」

「説明は後だ…さつわと倒すぞ…。」

「あ、おひー。」

「おひー、喋つてないで攻撃してくれよ…。」

幕と一夏がしゃべっている間シアンは、一人で福音の相手をしてい  
た。

「わかつてゐるつて！」

そして、一夏が回復したエネルギーで零落白夜を使う。福音は、避けるがその先には簫が一刀を構えている。

「甘い！」

簫は、福音に斬りかかる。福音は、上昇し離脱しようとする。

だが、そこにはシアンがパイルバンカーを準備している。

「いらっしゃーい！！」

ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン、ズガン

六発の炸薬が福音に突き刺さる。

そして、重力に従つて落下していく福音に

「一夏！駄目押しだ！行け！」

「おう！ウオオオオオオオ！……！」そして、一夏は零落白夜で福音に駄目押しする。

その勢いのまま、地面に叩きつけた。

ギギギ、福音は最後の力を振り絞つて一夏の首を絞めようとするが、バタ、SEが0になり活動を停止する。

すると、上から簫とシアンが降りてくる。

「終わったな…」一夏がそう言つと、さらにもうから、セシリ亞、鈴、シャルロットにラウラも来る。

「…………やつと帰れる…」

そして、皆で疲れた体に鞭を打ちながらエウを強制解除された、福音のパイロットを連れて帰った。

帰ると、千冬さんの説教が待っていた。

「任務完了!」と言いたいところだが…お前らは、藍川以外重大な命令違反を起こした…

学園に帰つたら反省文と懲罰用の特別トレーニングが待つているからな…覚悟しておけよ…」

「お、織斑先生? そろそろ…皆さんも疲れているとおもいますし…」

山田先生がそう言つと、千冬さんもそう思つたのか、説教をやめる。「…まあ、よく全員無事に戻つてきたな…その、『ごくろうだつた。』と若干照れながら言つ千冬さんは、シャンにとつて、とても、ものすごく刺激的でシャンの理性はギリギリだった。

その日の夜、

一夏は、ラヴァーズに追いかけられている時、

シアンと千冬さんは、海風の心地よい夜の砂浜に居た。

「夜風が、きもちいいな…」

それで？大事な話とはなんだ？シアン？」

千冬さんがそう聞くと、シアンは頬をほんのり紅潮させて言つ。

「俺は…藍川シアンは、織斑千冬、あなたが好きです！」

to be continued

## 第29話（後書き）

いや、ホントに「みんなさい。

作者には、うまく書けませんでした。

今回から、次回予告します。あと次回からサブタイトルを付けます。

次回予告…

ようやく自分の気持ちを吐露したシアン。

果たして、千冬さんの答えは如何に？

そして学園は、夏休みに突入！  
まずは、デュノアに殴り込み！？

シアンの人生で一番濃い夏休みが今、始まる。

次回、反逆の名を冠するHIS第30話へ回答へ

第30話～回答～（前書き）

今回からサブタイがつきます。

第30話 回答

千冬だ！今日は、私視点で進めていくようだ。

「俺は…藍川シアンは、織斑千冬、あなたが好きです！」

2

しあんがわたしのことが好き? スキ? 好き? Like? いや、 10  
ve?

シアンが、あの鈍感で天然で鈍感のあのシアンが…？

「…そんなにビックリする」と?」涙田のシャン

「アーティストの才能を出せ...」

そんな目で見ないでくれ

「千冬さんは、俺の事…嫌い？」シアンは、目の縁に涙をためながら聞く。

すると、シアンの顔がパバーと晴れ、涙を流す。

「よかつた、嫌いだつたらビーハよつと思つて、ずっとこわかつたんだ。でも、はやく言いたくて…」

そんなに…よし…

そして、千冬さんはシアンの唇に自分の唇を重ねる。

時間にしたら4・5秒なのだが、一人にしたら永遠に感じた。

その後、二人は手を繋いでいつしょに部屋に帰った。

帰ると、一夏はすくしゃつれていた。

千冬さん視点終わり。

次の日、学園に帰る日帰りのバスの出発前。

シアンは一夏が、ラヴァーズの制裁を受けているのを横目で見ながら、チラッと外を見る  
すると千冬さんとラヴァーズの怒りの原因である金髪の女性がしゃべっていた。

「私は、許さない。強制的な第2形態をさせて、あの子から翼を奪つた犯人を！」  
セカンド・シャト

そう言つて、金髪の女性は去つていく。

「許せない……か……」千冬さんは、さりげぶやくとバスに戻つてくる。

「（ここからだと、よく聞こえなかつたな…まあ、いいや。）」

そして、バスはヨウ学園に向かつて走つて行った。

道中、一夏はすうと居心地悪そうにしていた。

その日は、学園に着くと直寝したり二つの間にか朝だつた、シアンでした。

それから2週間後…

今日は、終業式の日で皆浮かれ気分だつた。

相変わらず無駄に長い学園長のありがたーい？お話をユーロ  
uchirで音楽を聞きながら

無視し、終業式が終わる。

最後に教室へ戻り、担任から話を聞いて終わり。

「夏休みだからと書いてて、非行に走つたりはするなよ。では、これでわたしからの話は終わる。」

千冬さんは、適当に話を切り上げる。

「…………」クラス全員がキリッと返事をする。  
これが、山田先生だとさへいと間延びした返事になるのだから不思議だ。

そして、最後に千冬さんから夏休み宣言がなされ、夏休みに突入する。

クラスが騒いでいる間、シアンは冴えない顔をしていた。

「（やべえ、3日後フランスなのに…飛行機手配しない…まさしく…）」  
いろいろありすぎてすっかり忘れていたのだ。

「（どうあるかな……やつだ。千冬さんに頼めば何とかなる感じやね？）」

そんな事を考へていると一夏が湧いてきた。

「どうしたんだ？シアン、まるで3日後フランスのに飛行機取り忘れてたみたいな顔して…」

「…………（ここに、読心術使えたのか…？）」

「…………え？もしかして…図鑑？」

「そんな訳ないだろ…ちゃんととつてあるつて。」もひるん嘘だ。

「やうか、ならよかつた。」

「おー、じゃあちょっと用事あるからじやな。」  
そう言つて、シアンは教室を去る。

「ああ、じゃあな。」

職員室…

千尋さんは、仕事をしていた。

「（むう… とてもめんどくさい… はやくシアンに会いたいな～）」

そんな事を思いながら仕事をしていくと、

「ち… 織斑先生は居ますか？」と入口の方からシアンの声がする。

「（…シアンが来た！でも何故だ？）どうした？… 藍川。」

「あ、いた。ちょっと早急に相談したい」とがあったので…

「何だ？その相談とは？（そんなに急なのか？）」「  
するとシアンは、少し言ごとにくそうな顔をする。

「えつと～」「じや… ちょっと…」

「わかった。」

そして、二人は屋上へ向かつた。

屋上…

「それで？相談とは何だ？」

「ああ、えつと△日後シャルロッテの件でフランスに行くんですけど…」

飛行機取るの忘れちゃったんですね…」

「…………それで、私に向とかしてほしこと…（まあ、シャンの頼みだし…いいがな）」

「やっばり無理ですか？」少し残念そうである。

「いや、そんなことはない。学園の力を使えば向となる。」

「ホントですか？よかったです。じゃあフランス行きのチケット2枚お願いします。」

「ああ、わかった。では、私は仕事があるんでな。（シャン分を補給したから…多少はやる気がでるな）」

そういうとナタさんは、屋上から出でこぐ。

「ありがとうございます。（よし、これで問題はクリアっと）」

そして、シャンも屋上から出でこぐ。

夜：1001号室

シアンが部屋に帰ると飛行機のチケットと共に書き置きが置いてあった。

「（…千冬さん帰ってたんだ。）」

そして、チケットと書き置きを見る。

「（えっとなに？今日は遅くなるから、やめに寝てみ。チケットは、  
11月11日。）」

読み終わると、シアンはペンを取り出し、なにかを書き始める。

「あつがどうぞます。おやすみ。つとれでよしー。  
書き置きの裏に自分の書き置きを書いておいた。

「なんか、眠こしありと寝るか。」

そして、シアンはすぐに寝た。

AM2時頃、千冬さんが1001号室に帰ると

シアンは寝ていた。しかも、暑かったのか少し胸が肌跳正在。

「…（まことに、私の理性が…）」

千冬さんの理性は大分不味い状況だ。

そして、よく見ると若干汗ばんでいる。しかも顔をほんのり紅潮さ

せていく、

それは、いわゆる情事のあとの一様で千冬さんの理性は遙か彼方へ

「…………（もひ、襲つていいよな？）」

千冬さんは吹っ切れた。その手を肌蹴っている胸のどひに掛ける  
すると、千冬さんの携帯が鳴る。

「チッなんだ、ほんな時にー。」

そして、電話に出てる。

山田先生からで、仕事でわからなこといろいろがあったそひだ。

電話が終わると、再びシャンを見るが…

「……興が削がれた。また今度だな…」

そう言ひて、千冬さんも寝た。

### 第30話～回答～（後書き）

今回は、作者が途中から何書きたいのか忘れてしまったのでひどい文章ですね。

次回予告…

フランスに着いた、シアン、一夏、シャルロット

そこで、待っていたのは…

次回、反逆の名を冠するエス第31話～邂逅～

## アンケート（前書き）

アンケートにご協力ください。

## アンケート

今日、私がにじفتンのいろいろな機能を調べておつましたり  
アクセス解析といつもの見つけました。

そしたら、なんとアソガーー万を超えてくるではないですか！  
3万くらいのかな？と思つてこたので… かなづビックリしました。

他の作者様も1ー0万記念等をつけておられるので自分もやつみよう  
と思います。

セレヒです。

なんのお話が良ーんですかね？下のどれかでお願いします。

1、シアンヒタタヒのトート話

2、シアンの過去話

3、反逆の女を祀るヒヒのバシデヒンバ

4、そんな物いりぬ、わいわい本編書け！

5、いろんな話せびりでしみるへ。

のどれかでお願いします。

5の場合は、ある程度のストーリーをお願いします。  
実は、作者は5番が一番うれしい。

それでは、アンケートにご協力ください。

ちなみに、誰もお答え下さらない場合がありますので  
その場合は、4番になります。

## アンケート（後書き）

ほととぎすがお願いします。

期限は、3日後です。

どうでもいいですけど

作者は、年内にこの小説を完結せらるつもりです！

第31話～邂逅～（前書き）

あー今日は、すゞいに駄文です。

### 第31話／邂逅

それから3日間で、シアンは宿題をクラスの金の亡者を2万で獲付けし終わらせたので

最早、シアンは夏休みをすべて遊びに費やす事ができるといつ素晴らしい事を実現したのだ。

宿題を終わらせて、フランスに向かった。

何十時間と飛行機に乗り、ようやくフランスに着いた。

「や、やっと着いた…」飛行機に慣れていない一夏は、結構グロッキーダ。

「久しぶりだな～」シャルロットは、楽しそうだ。

「デュノアにコンタクトを取ったのは明日だから、今日は観光しよう。」「

シアンは、そういうことからか大量のパンフレットを取り出す。

「おお、いいねー！」一夏は、その提案に乗る。

「でも、フランスなら僕が居るから、そのパンフレットって要らないね。」「

ハハハ、と笛で笑う。

すると、突然後ろから話しかけられる。

「やあ、シャン。久しぶりだね。」その人物は、なんと  
シャンの兄でテロ組織の親玉、藍川シェンだった。

「「……」

「？？？」

シャンと事情を知っている一夏は、行方不明だつたシェンを見て驚くが  
突然声をかけてきた、変な人と言つ印象しかないシャルロットは怪  
訝そうにしている。

「?.どうしたんだ? そんなに固まつて。」

シェンは、気付いていないようだ。

「いや、どうしたじやないだろ。どこ行つてたんだよ兄貴」  
シャンは、少し呆れながら聞く。

「うーん、今は秘密だ。」そして、シャルロットの方を見る。

「（なるほど、デュノアの娘の解放に來ていたのか…  
焦つたよ、いきなりシャンが現れるから…）デュノア社に行くのか  
な?」

シェンは、推測を立てる。

「せうだよ、で? 兄貴はなんでフランスに?」  
シャンは、核心のところを聞く。

「それも、秘密だ。そのうち分かるだろ? し…（フランスは、家の  
大きな拠点の一つだからな…）」

「……せつか、わかつた。まあ、たまに家に帰つてゐみたいだし…いいけどね。

(何、隠してるんだ?)」

話が終わるとシモンは、去つていった。

「（兄貴…変わつたな…両親が殺されたからだよな…変わつたの）」  
シアンは、何やら難しい顔をしていた。

それから、フランス観光をしたがシアンは上の空だった。

次の日、デュノア社にて…

門の所に来ると、金髪の女性が来たどつやう出迎えの者のようだ。

「ようじゅ、デュノアへ。私は、社長秘書のカロル＝ボージュです。  
藍川シアン様と織斑一夏様ですね？社長がお待ちです。こちらへどうれ。」

そういうと、部屋の方向に行く。

「「はー。」シアンと一夏は、それついて行く。  
しかし、シャルロットは付いていかない。  
それに気付いた、カロルさんが呼ぶ。

「シャルロットさんも来てください。」

「は、はー。」

少し、嫌そうな顔をしながら着いていく。

エレベーターを上り20階あたりで降りる。

そして、特別応接室と書かれた部屋に通される。

「じゅうじゅ。」カロルさんは、扉を開ける。

「「「失礼します。」」

そう言つて、3人が部屋に入ると何かが飛んできた。

「社長、なになさつてるんですか？」

カロルさんは、飛んできたものを社長を呼んだ。

「「「…………え？」」

シャルロットすら驚く始末。

「いや～じめんじめん。我が娘が帰つてきてくれてうれしくてうれしくて……」

「「「…………」「」」

3人は、絶句する。

そもそものはず、シャルロットを道具として使つた男が…今、目の前でバカみたいな事をしているのだから。

その後、話を聞くとじゅやら、社長でシャルロットの父である、クレール＝デュノアは

今までの、犯罪行為やシャルロットをHS学園に送る気などなかつ

たそりだ。

「では、貴方は僕の事をEHS学園に送る気はなかつたと…？」  
シャルロットは、若干怒氣のこもつた声で言つ。

「そりだ、少なくとも私は反対だつた…」  
クレールは、申し訳なさそりに語る。

「じゃあ、なんで僕は…私は、EHS学園に…いや、そんなことはない！」

私に男子の様に強制させて、その上一人の機体データと生体データを取つてこいと  
命令させたんだ！？

シャルロットは、我慢の限界と言わんばかりに怒鳴る。

「…言つてなかつたね…シャルロット、君は家の会社のシステムを  
知つてゐるかい？」

「…システム…？」

「知らないか…当然だ。」このことは、家でも一部しか知らないこと  
だから…

デュノア社は、先代からこのシステムを採用している。」

クレールは、すまなさそりに言つ。

「すこし、昔の話をしよう。デュノア社がまだ、戦闘機の開発会社  
だったころだ…

その頃の社長…つまり、先々代はあまりにもひどい経営でね、今よ  
りひどい状況だつたんだ。

ついに、その状況に耐えられなくなつた先々代は先代に丸投げした。

そこで、状況の打破のために先代は、システムを立ち上げた。

社長をトップとして、7人の代表者で方針を決めるんだ。

代表者は、一人一票、社長は、一人で六票持つ……こつする」とで、社長だけで決めるることは

事実上不可能になつた。最悪、一人の賛成者が必要という訳だ。

だが、裏を返せば一人の賛成者の居ないと社長の案件は、通らないという事だ。

クレールは、長々とすまなかつたといつ。

「じゃ、じゃあ私がスパイすることを最後まで、反対していく……？」

シャルロットの声は、震えている。

「そうだ、だが許してもらおうとは思わない……私がきつちりそのシステムをなくしていればこんな事には、ならなかつた。すまなかつた。ここから、出て言つてもらつても構わない。」

クレールは、頭を下げる。

「頭を上げてください。本当にあなたは、最後まで反対していいんですか？」

シャルロットは、やせし声で質問する。

「ああ、本当だ。」

「よかつた。じゃあ、私はここを出でいくことはしません。」

「でも、…」クレールは、何か後ろめたそうにしていた。

「じゃあ、条件に私をこのまま、EHS学園に通わせて下さい。それでいいです。」

「…わかつた。何とかしよう。」

そして、その後少しだけ話した後時間になり、デュノア社を後にした。

その時のシャルロットの顔は、とても晴れやかだった。

シアンたちが、デュノア社を去った後  
会社のある一室

社長秘書のカロル＝ボージェは、ある人物と話していた。

『やあ、カロル。デュノアはどうかな？』

「問題ありません。我々の傀儡になります。」

『ほう、わかつた。そこは、計画の重要なファクターなんだ。頑張つてくれ。』

「了解しております。シェン様。」

『ああ、では頼む。』

そして、通信が切れる。

「（ハア、これでテュノアは問題ないレベルだな…）」

その日の夜の便で三人は、日本へ帰った。

### 第31話～邂逅～（後書き）

デュノア社、傀儡化。

すいません…今回、書くのめっちゃ時間かかってしまって…

とりあえず

次回予告…

フランスから帰ってくる。

すると、そこで待っていたのは…？

次回、反逆の名を冠するHIS、第32話～宿題～

アンケート待っています。

第32話～宿題～（前書き）

なんか、すいません。

### 第32話／宿題

夏休みの序盤、ほとんどの学生が宿題などやらなければ、クーラーの利いた部屋で寝ているだらう、まあ、夏のクソ暑いなか外出する元気な人もいるかもしねりないが

藍川シアン…彼は、前者の人間だった。だが、今は…

「行くぞー！シアンー！」HSを纏つた、一夏が雪片を片手にシアンに向かつて飛んでいく。

「…（あ、暑い…なんであいつ元気なんだよ…）」シアンは、だるそうに断罪者の怒り（ジャッジメント・イスプロジェクト）を呼び出し、8発撃つ、

ズガガガガ、

「来ると思つたぜー」一夏は、ニヤツと口元を上げ零落田夜を発動させジヤッジメントに斬りかかるが

「？お前バカか？ジャッジメントつて自由に動くんだぞ。」

そういうと、シアンはジャッジメントの軌道を変え、零落田夜を避け一夏にぶつける。

「グアアッ」そして、白式のエネルギーは〇になる。

「くそ、また負けた…」一夏は、かなり悔しそうである。

「やつと、ペナルティ（・・・）終わった～」

そう、これはペナルティなのだ。

あれは、フランスから帰つて来た時の事。

空港から、バスとモノレールを使って帰ってきた、シアン達。

空腹だったので、食堂へ向かつていたら千冬さんこあった。

「ひさみちま、千冬さん。」シアンは、あこせつある。

「ああ、シアン、後で職員室に来てくれ。」

そう言つと、職員室に帰つて行く。

「はーー。…じゃあ、行くか。」

「お、おつ…（何か、シアンと千冬姉の距離が縮まつた様な…？）

そして、人の少なくなつた食堂で皿を取り、シアンは職員室へ向かう。

職員室の前に来るとノックして、失礼しますと言つと入れといつ声が聞こえて來たので

中に入る。

「よし、逃げずに來たな…移動するぞ。」

何や、剣呑な雰囲気を醸し出しながら千冬さんは、シアンを連れていぐ。

「え？ あれ？ ちょっと…？」

不満を言えないまま、連れてこられたのは取調べ室と書かれた部屋だった。

「では、取り調べを行おう。シャン、お前は夏休みの課題をクラスの金の亡者に2万で押し付けた容疑が掛かっている…弁解することはあるか？」

千冬さんはぼれていった。つまり、それはペナルティが着くと言つ事…

「…ありません。確かに私は、金の亡者に押し付けました… 2万で

…」  
シャンは、罪？を認める。

「何をやつているんだ…！ 何故だ？ 私に頼めばタダで免除してやれる物を…」

千冬さんは、若干間違つた方向に行く。

「え…？ そつち？」

当然シャンは、驚く。

「…まあ、過ぎてしまった事だ… これから気を着けるとしてペナルティとして… 一夏と模擬戦50連戦だ… この皿は一夏にすでに伝えている

あいつけ、やる気だつたから問題ないだろ…  
では、第3アリーナへ行け！」

「イ、イエス・ニア・マジエスティ…！」

と、長々と説明をしたが「ひつひつ院である。

「まあ、ひそな訳だー。」

「？誰と喋つてゐんだ？シアン。」

「こや、何か電波を受信して…」

「うこひと、一夏は怪訝うな顔をしていたが、気にしない。

「じゃあ、俺は千冬ちゃんに報告しないといけないから…また、明日。」

「シアンは、もう一度職員室へ向かへ。」

職員室…

その前にま、シアンが居た。

「（ひうーだる…）失礼します。」

ノックするとい、返事も聞かずに入る。すると、セイドは…

「え？シアンー？」

「うあああーー千冬ちゃん？」

千冬さんが着替えをしていることだった。  
シアンは、しつかりその大きな胸を見ていた。

「レ、レ、シアン！？」

「え、あ、あの、すいません！！」

シアンは職員室を出て行った。

しゃしゃそそれよひ

シアンの袖を一つかむ  
その重作が妙にかわいらしが  
た。

「（…? な、なんだ?）の可愛<sup>くわい</sup>い生き物<sup>いきもの</sup>は…」が、はい?

「そ、その…みたのか？」

え……はい。／＼シアンは、顔を真っ赤にしている。

「そ、そうか……！」同じく顔を真っ赤にして千冬さんが言

「せ、責任取つてくれるのか……？」

と若干暴走気味の千冬さんをなだめるのに時間の掛かったシアンだった。



### 第32話～宿題～（後書き）

あの先は、読者様の「想像にお任せします。」

アンケート、明日までです。よろしくお願ひ致します。

次回予告…

8月上旬、真夏の頃

千冬とシアンは、イタリアへ向かう。

そこで、起じる悲劇のことは知らず…

次回、反逆の炎を冠する「」 第33話～黎明～

## アンケート結果（前書き）

結果です。

## アンケート結果

こんにちは? こんばんわ? 駄文製造機田中太郎です。

3日前に取ったアンケートの結果を発表します。

皆さんが、答えてくださったのにどれか一つだけをとるのせ、  
作者には、ちよつとできませんでした…

なので、答えてくださった皆さんのが全員アイディアを出して下さったので

全3～4話になると思われます。

あと、すいませんが今日は、更新できません。

## 文字数稼ぎ

お仕合しまつた、すこません。

どうでもいいですけど、はがないの夜空って千冬さんと似てません  
か？

## PVアクセス10万突破記念企画～第1弾～ねずみの王国

7月30日…この日は、実はシアンの誕生日である。

この日、千冬さんとシアンはゲートとして、某ねずみの王国に行く予定だ。

IS学園は、あらゆるテーマパークへのアクセスがしやすい所にあります、

ねずみの王国も例外ではなく、すでに多く生徒たちが向かったので最近は、IS学園の生徒はほとんどない様だ。

なので一人が付き合っていたとばれる心配もない。  
つまり、二人は穴場を狙ったわけだ。

30分かけてモノレールに乗り、ねずみの王国に着いた。  
一応変装している二人だが、それでもオーラ的な物は隠せずに周りからは結構注目されていた。

すでに開園時間は過ぎているが、まだそれなりにゲートは込んでいる。

「結構込んでますね～。」

シアンは、いつもの口調でしゃべる。

すると、千冬さんはすこし嫌そうな顔をする。

「シアン、学園の外の時くらい敬語でなくてもいいぞ。」

「ああ、そうだった、ごめん。千冬」

シアンがあやまると千冬さんは、うなずく。

「まあいい。（急に呼び捨てで呼ばれるヒドキッとするな……）」

すると、チケットベースに着きチケットを買いゲートを潜った。

「やつと、入れたな。何乗る？」

シアンが聞くと、千冬さんはパンフを見る。

「（むう、最初は軽めの……お？）のスプラッシュショウなんたらがいいのではないか？いや、ここは……）」

いろいろ考えた結果、選んだのはスプラッシュショウマントーンだった。

「（こきなり、これ？）」

シアンは、疑問に思うしかないのであった。

シアン達の番になり、安全バーを下ろす。

回ってくるのが早いなどのつゝこみはつけつけておりません。

「（おお、この緊張感だよ……）千冬、大丈夫？」

よく見ると、小刻みに震えている千冬が居た。

「！だ、大丈夫だ！（スプラッシュショウなんたらとは、ジェットコースターだったのか

写真を見間違えていた！）の手の物は苦手なのだ……）」

「そ、そつか。（全く大丈夫そつじやないけどな……）」

そして、無情にもジェットコースターは、進みだす。

ガタンガタンガタン

コースターは、どんどん上に登つて行く。

「（ああ、もうすぐ……）」シャンせ、楽しそうな顔をする。

（……………）」千尋は、顔面蒼白だ。

しかし、そんな千冬はお構いなしに急転直下。

乗客のほとんどが悲鳴を上げる中、シャンはたぬきうな顔をしていて、千冬さんは、絶望に満ちた顔をしていた。

ヒューリン

その後も、回転したりしており場に到着。

樂しかつたや怖かつたなどの感想を述べながら降りていく密たち

シアンは、微妙という感想

千冬は、一生のらないそだ。

だが、シアンが一生の「らない」と言つてガクブルなつている  
千冬をみて、かわいいな、何か追い打ち掛けたくなるな…  
とSに目覚め、次はスペースマシンテンに乗らせようとする。

さすがの千冬もジアンの意図に気付き、拒否する。

「いや、ちょっと待て、あれは絶叫系ではないのか?」

「（気付かれたか…）え？違つと悪ひなじ。せひ、降りてきた人た  
ち皆怖かつたなんて言つてないし…」

そう言って、降りてきた客の方を指す。

「（むー…もう言わねば…）じゃあ、乗る。」「  
あなど、一瞬シアンの顔が一やつとなる。

「うん、乗る。」（また、かわいこ千冬が見れるな…）

そして、彼らの番が回つてくる。

安全バーが下げられた時に千冬がシアンに囁く。

「…シアン？なんだ？」の乗り物？だましたのか？

「違つ違つ、これに乗つて景色を見るだけだつて…高速で  
シアンが言い切ると同時に出発する。

「やつぱりかあああ…」

暗闇の中を急に曲がつたり、停止して一気に進んだりしてゴールに  
着いた。

降つると千冬は、すべに出てこべとも不機嫌だった。

「（シアンめ…私をだましてそんなに楽しいのか…）  
千冬は、涙田だ。

「（あひやへやつすぎた？）」シアンは、少し反省する。  
そして、どんどん離れていく千冬を追いかける。

追いつくと肩をつかみ留める。

「ちょっと待つた。」

「……なんだ！」立ち止り涙目でシアンをにらむ。すると、周りの人  
が騒ぎ出したので人目がない場所を変える。

「（…そんなに嫌だったのか…誤つておくか）ごめん。」

いやだ。(しそうへ、反省してもらわないとな)

「『』めん、あの怖がる千冬がかわいくてつこ……」 シアンは、ホントに謝る。

「な!? か、かわいい? で、でも駄目だ。だましたのは、許せん!

（いやあ、仕方ない……）

ジアンは、千尋の顔を自分の方へ更に近づく。

「ん！？」

そして、離す。

「『あん。ホントにすまなこと思つてねんだ。』 シアンは、真剣な顔で言つ。

「……はあ、もういい。私もムキになりすぎた。」千冬は、諦めた表

「よかつた、じゃあ、そろそろ行こうか？」 そういうとシャンは、立ちあがり、手を差し出す。

「ああ！」 千冬は手を取る。

その後もねずみの国で遊び、夜になつた。

「そろそろ、帰る？」  
シャンがそう聞くと、千冬は帰ると答える。  
結構疲れている一人。

そして、二人はモノレールに乗つて帰つた。

部屋に着くと、二人は昼間の続きをした。部屋の前を通つた人の話  
だと  
たまに、変な声が聞こえてきたそうだ。

PVアクセス10万突破記念企画～第1弾～ねずみの王国（後書き）

すいませんでした。

次は、第2弾～ラウラとジエノス～です。

PVアクセス10万突破記念企画～第2弾～ラウラヒジノス（前書き）

最後、微妙な締め方で申し訳ありません。

## RVAクセス10万突破記念企画～第2弾～ラウラとジノス

夏休みになり、ラウラは基本的にアジトで暮らしていた。加入してから間もないが能力的な部分と名声的部品から、なかなかの地位に着いていた。

そして、この日はラウラの兄であるジノスからたまには、どつか行こうと言われたので

別段気にすることなくOKを出し、今は部屋で待てと言われたので待っている状況だ。

「（お兄ちゃん、おそいな…全く何をしているんだ…）」  
そして、電話しようとしたら「ン」とドアがノックされる。

「（やつと、来たか）」「ガチャ、ドアを開けるとジノスが居た。

「遅かつたな、お兄ちゃん。」

「「めんよ、ラウラ。お詫びになんでも（性的な事も）してあげるから。」

ジノスは、そう言つとこやにやする。かーなり、気持ちが悪い。  
おまけに何故か、鼻息も荒い。

「…お兄ちゃん、今日ばかりは行くのだ？」

ラウラは、究極に冷めた目でジノスを見る。

「（スルーー？そして、その冷えた目…そここに痺れる、憧れ…る  
？）

インでも行こうかな、って思つてたけど……あそこなり、こうこうあるし……」  
ジエノスは、変態化してしまった。

「具体的には何があるんだ?」そつと云つたところ  
ほとんど行つた事がないラウラは、興味深そうに手をキラキラさせ  
て聞く。

「(食いついたな、予想通りだ。)まあ、服見たり~映画見たりか  
な?」

そうだ、評価が高い映画があるんだ。見に行こう~。」

「映画か…(軍に居たから、映画館など行つた事ないな…よし)い  
いぞ、行こう!」

「よし来た。じゃあ、すぐに行くか。」

「うふ。」

そして、イタリアの車アルファ・メオミーティに乗り込みインヘ  
向かつた。

インに着くと、ラウラは人の多さに驚きながらも楽しそうにして  
いた。

どんどん先に進んでいくラウラをジエノスは、後ろから見ていた。

「あんまり、先に行くなよ。」

「わかつている。」といこながらもやつぱり歩調は速い。

「（ハジハリ）初めてなんだろな、せしゃぐのも無理ないか…  
が、このまま計画が予定通り進めば（ハジハリ）にも来れなくなるしな、今  
の内にね…」

そつ都えて（ハジハリ）に立ち止つていたよつで、（ハカハ）に呼ばれる。

「お兄ちゃん、早く…」

「ああ、今行くつて。（今は、この時を楽しむつ。）」

場所は、変わつてイ ン内のシネマ

チケットと映画の定番ポップコーンビジンジャホールを購入し、  
劇場に入る。

初めてくる（ハカハ）は、そわそわしている。

「（ハジハリ）ああ、たくさん人が来たな…）やつこねば、お兄ちゃん？」  
（ハカハ）は、今もなおそわそわしながら質問する。

「何？（ハカハ）。

「今から何の映画を見るんだ？」今さらな質問をする、（ハカハ）。

「（ハカハ）は、恋愛映画なんて見た事ないでしょ？」

「まあ、（ハジハリ）タリーな物しか興味がないしな…まさか、今から見る  
のか？」

「（ハジハリ）」

「…まあ、いいか（たまには…な）」

そういうやり取りをしていると、映画が始まる。

ちなみに、そのタイトルは、『僕と妹のラブストーリー』というべタなタイトルだ。

まあ、タイトルから分かる通りシスコンとブラコンの物語だ。

2時間ほどすると、映画も終わり一人は劇場から出ていく

「　「…………」」

二人は、無言のまま去っていく。

特にラウラの方は、頬が若干紅くなっている。

理由は、分かつていてると思うが映画の内容にある。

その内容だが、恋人がこれ、18禁じゃね？っていう事していたらその恋人は、実は兄妹で、え！って感じになり別れる、しかしいろいろな

ことを経て二人は、見事に復縁。

しかし、曲がりなりにも二人は兄妹…

どこへ行つてもそれは、変わらない。

そんな一人の逃避行ラブストーリーだったのだ。

ラウラとジエノス、二人は兄妹なのでこの手の映画はちょっと精神衛生上よろしくない…なので一人は今無言なのだ。

そのまま、一人は無言のままアジトへ帰った。

ちなみに、一人が映画を見ている時

シアンと千冬さんも映画を見に来ていて、二人の見ていた映画は友達の姉に好意を抱いた主人公と弟の友達つまり主人公に好意を抱いた姉の物語で、じつちの一人も先の一人同様に無言のまま学園に帰った。

場所は変わって、ラウラ達のアジト…

インから帰ってきた二人は、そのまま無言で各部屋に帰った。その夜、ジェノスが寝ているとラウラがジェノスのベットに入ってきてそれに気付いた、ジェノスは理性がかなり危なかつたそうだ。

## PVアクセス10万突破記念企画～第2弾～「ラウラヒジノス（後書き）

昨日は、更新出来なくてすみません。

何分忙しかったものですから…

次は、おそらく明日です。

次回で企画は、最後になると思います。

それでは。

PVアクセス10万突破記念企画～第3弾～温かな日～（前書き）

今回で企画は終了します。

ありがとうございました。

タイトルは、思いつかなかつたもので…

## PVアクセス10万突破記念企画～第3弾～温かな目～

ある日、シアンと千冬がデートから帰つてくると学園の温かい目が出迎えた。

廊下を通る、そのたびに向けられる目、目、目、目  
「（？なんだ？）この生温かい視線は？」

結局、その日は何もなかつた。

次の日、千冬さんが職員室に居ると山田先生が千冬さんに  
ある物を見せる。それは、  
IJS学園では皆が知つてゐる様な新聞である。

「…? なんだこれは？」

千冬さんは、その表紙を見て驚愕する。  
理由は非常に簡単。

その一面は

なんと『織斑教諭と藍川シアン、教師と生徒の禁断の関係！？』  
という疑惑だつたがらだ。

千冬さんは、さらにもその記事を読み進める。

すると、情報のソートという所があつたので読んでみると  
ソートは、某〇君と書いてあり、『丁寧に一夏の目の部分が隠れた  
写真まで

貼つてあつた、まあこの学園に男子なんて一人しかいないうえ、〇  
君など

一人しかいないので、犯人は一夏となる。

そのころ、シャンも同じ記事を見ていた。

「……（ばれたのか……それにしても一夏は、どこで情報を仕入れたんだ？）」

そして、その時シャンと千冬さんの考えは見事に一致した。

「「どうあえず、一夏ボコス）」」

それから、シャンと千冬さんが一夏を血眼になつて探していた。

千冬さんは、自分の事を崇拝してくれている人たちをうまく使い、シャンは、代表候補生になつてもらつたたくさんの金を使いまたもや金の亡者をたくさん餌付けし、一夏を探させるとなんと、ほとんどの全校生徒が一夏を探す結果になつた。

すると、ものの5・6分で一夏は見つかつた。

場所は、変わつて学園の特別処罰室。

ドガッ

「グア」一夏は、シャンに蹴り飛ばされる。

ドサ、床に倒れ込む一夏。両手が縛られている所からシャンが本気である事がわかる。

シャンは、一夏を椅子に座らせると椅子に仕掛けられた

電流発生装置からすこし電流を流す。

「ひつ」電流に顔を歪ませる一夏。

「さて、話してもうおつか? 何で、あんな記事が書かれているんだ?  
答えないといと、わつきの電流の倍流すぞ。」

シアンは、鬼畜な事を言つ。

「…分かつたよ、話す。…実は、こないだ千冬姉に用事があつたんだ。

だから、部屋に行つたら…部屋から変な声が聞こえてきたんだよ。

【閲覧規制】や【閲覧規制】が…」

一夏は、若干顔を赤くしながら答える。

「…なるほど…それが聞けただけで俺はいいや。」

そう言つと、シアンは一夏を椅子から解放する。

「え! もういいのか?」一夏は、思ったより早く解放されたことに疑問を抱ぐ。

「なんだ? もつと拷問されたいのか?」  
シアンは、半分笑いながら言つ。

「そ、そんな訳あるか!」

「ハハ、まあわかった。じゃあな。」

「全く…じゃあな。」

そして、特別処罰室を出でる。

さうして10分後、今度は千冬さんに捕まってしまった一夏。事情を説明する。

「で？ なんで、あんな事になつているんだ？」

千冬さんは、いきなり本題を聞く。

「…いや、それはですね…こないだ織斑先生に用事があつたんです。なので、部屋に行つたら…部屋から変な声が聞こえてきたので。

【閲覧規制】や【閲覧規制】が…」

とシアンに答えた事と同じ事を言つ。

「なー？ ジヤあ、お前は見ていの？ 部屋の中を？」  
千冬さんは、一夏に更に疑問を投げかける。

「ええ、まあそりですね。…（ん？ 見ていた？）いや、見てはないぞ？」あれ？」

面倒になつた一夏は、適当に返事をする。その後で自分の失態に気付く。

「ああー違つんです。」一夏は、慌てて訂正するがもう遅い。

「そりか…見ていたのか…そりか…」

千冬さんの後ろから、スンドが見える。

「…（俺、オワタわ）」

それから、一夏と千冬さんの命をかけた

戦いが始まった。一夏の空白ははじつだ！？

「とこひ夢を見たんだナジ... びひ夢ひへ十タバヘ.

「いや、現実味を帯び過ぎてこり怖こわい。」



PVアクセス10万突破記念企画～第3弾～温かな日～（後書き）

ところ、何時ぞや見た事あるよつた終わりからで

この企画どうでしたか（・・？

次回からは、本編になります。

## 第33話～黎明～（前書き）

昨日は、更新できずにならみません。

あと、長くて8話程度

短くて5話くらいで完結であると思こねます。

8月上旬、そろそろ宿題やるつかな?と思つてゐるところ、シャンと千冬さんは

イタリアに向かう飛行機の空港に来ていた。

『間もなく、イタリア便の離陸準備が終了します、搭乗される方はゲートまで来てください』

そんな感じのアナウンスに入る。

「ん? そろそろか。行こつか?」

シャンは、いつもと少し違う雰囲気で言つた。

「ああ、(くわう、昨日は楽しみすぎて全く寝れなかつた...)」

千冬さんは、田の下にクマを作つている。

そして、飛行機に乗つて空の旅をする事数十時間、イタリアに到着する。

すると前にシャン一人で来た時同様、リムジンが迎えに来る。

キキイ、シャン達の田の前に止まると中に入る様に促す。

そして、車に乗り込むとイタリア首相の邸宅に向かう。

着くと無駄に長い廊下を進むと前に来た時と同じ扉をノックし開く。

そこには、首相が居た。

「やあ、久しぶりだね。シアン君。」

皆さん、お忘れだと思うが3話で一度だけ登場したキャラです。

「お久しぶりです。」

「4か月振りかな？」

「そんな物ですね。」

適当に挨拶を交わすと、首相は千冬さんの方を見て驚く。

「いらっしゃるのは？…つてミス織斑！…？」

「ええ、はじめまして。首相。」

「いらっしゃりや、シアン君との関係はあえて聞かない。

末永く、お幸せに。」

首相は、そういうことにせつとする。

「……………／＼／＼」

二人は、顔を赤くする。

この反応がいけなかつた。

首相は、この手の話が大好きなようでどんどん質問された。

シアンと千冬さんは、この首相を適当にあしらいながら思つた。

「（女子高生か…）のおつさんは…」

その後も面会時間ぎりぎりまで質問攻めされ、二人はクタクタだつた。

「おつと、そろそろ時間だね？もつと話したいが…仕方ないな、長々とすまなかつたね

今日は、もうホテルに帰つて休んでくれ。」

「「はい…それでは、失礼します。」」

そして、二人はまた長い廊下を歩きホテルに帰つた。

シアン達がホテルに到着したころ…

イタリアの空港に、シエン、ジエノス、ラウラ、あとテロ組織の幹部が居た。

少し歩いたところで、ラウラが気付いた事を言つ。

「なあ？お兄ちゃん？」

「ん？なに？ラウラ？」

「なんでイタリアに来たんだ？観光な訳じゃなさうだし…」

「あーそれね…それは  
ジエノスが理由を述べよつとするが、シエンによつて遮られる。

「フフ、それはな。」、「…イタリアに私たちの本部があるからだよ。

「

「……」セリフを取られたジェノスは、すこしムツとする。

「あーああそなんですか！」  
ラウラは、取り繕う様に言つ。

それからしばらくして、車に乗り20分ほどしたらアジトに着いた。  
その道中、一人も言葉を発しなかつた。  
しかし、シエンはなんだか楽しそうな顔をしていた。

アジトに着く、大きさはただのビルに見えるが実は、地下に大きな  
アジトが広がっていた。

そのアジトの地下2階フロア…

地下2階に着くと幹部全員は、息を呑んだ。

「…すごい…」ラウラは、目の前の状況を信じられないような顔を  
している。

そこには、百機近くの無人機があつた。

「この設計は私が直々に作つたんだ、臨海学校の時の機体より  
かなり強くしてあるからね、まあ、組み立てをしたのは、デュノア  
だけど…」

シエンは、自慢気に言つ。

「（なるほど、それでデュノアを欲していたのか…）」  
ジェノスは、理解する。

シエンは、一通り幹部全員の驚いた顔を見たのちに言つた。

「これを明日一日で総点検する。それが終わった後、即ち明後日

「

シエンはタメを作り、獰猛な笑みを浮かべた顔をする。

「パーティ戦争の始まりだ！」

## 第33話～黎明～（後書き）

もつすべで終わる…なんかさみしいです。

### 次回予告

シアンと千冬は、イタリア旅行を楽しむ…

次の日に起ころる事は、知る由もない…

次回、反逆の焰を冠するエス～第34話～獵飄

第34話～獣姫～（前書き）

う～むなんか あざついてしまいました。

## 第3・4話「獣鏡」

イタリア旅行2日目、この日はシャンと千冬さんはイタリアの観光をしに行っていた。

まずは、トレヴィの泉で後ろ向きにコイントスをした。

「ひーー。」

ピチャーン、シャンの投げたコインは水に入ってしまった。

「あひや…」

「ま、ただの呪いなんだ、気にすることはないだろ？。」

千冬さんは、呪いに興味はないようだ。

「もうだね～じゃあ、次はサン・ピエトロ大聖堂に行こう。」

「ああ、行こう。観光名所だしな。」

スペイン階段近くのスパニーヤ駅から地下鉄A線に乗り込み、3番目の駅、オッタヴィアーノ駅で下車。

そこから徒歩10分ほどでサン・ピエトロ広場に到着する。

「ここが、サン・ピエトロ広場か…」

千冬さんは、すごい人の数に驚く。

「まあ、入れるところは限られているんだけどね…」

サン・ピエトロ広場、サン・ピエトロ大聖堂、バチカン博物館

：これだけだな。

しかも、服装の規定がかなり厳しいし、

今の服装だつたら、大丈夫だけど。」

そんな彼らの恰好は、面倒だから割愛します。すいません。想像してください。いまじねーしょん

シアンは、息継ぎなしに説明する。

「そ、そうなのか？詳しいんだな。」

千冬さんは、若干引き気味だ。

「え、ああ、まあ調べましたから……（一回来てるし……）  
じゃあ、次はどこに行く？」

「やうだな、（そろそろ、昼時だしな……）少し早いが昼にしないか  
？」

「おー、いいね、じゃあいいとこ知ってるんだ。」

シアンは、前来た時に知ったバールを思い出す。

「やうか、ではどこにしよう。」

そして、そのバールに移動する。

バールに着くと、店員にシアンがイタリア語でピザを注文する。

「えーと、マルゲリータを一つ下さい（イタリア語で喋っています）

」

「かしこまりました、少々お待ち下さい（イタリア語で（ヘヘ）」

しゃべりくして、ペザが運ばれてくる。

シアンが、食べようとする…

ガタン！椅子を勢いよく立つ音が聞こえてきた。

それを聞いて店に居た人達は、びっくりする。

「おおー！」のペザうまいなー。」

シアンを除いて

トロトロトロ

その立ちあがった人は、シアンの方に来る。

「よつー春は、よくもやつてくれたじゃねーか…。（イタリア語）」

「ヨリのペザ、ほんとうまいな！」

啖呵を切る、イタリア系マフィアの下端だがシアンは、気に留める氣もないよつだ。

「…おいおい、無視するとはいいで胸だなああ…。」

マフィア…の下端は、拳を振り上げる。

しかし、その拳がシアンに届く事はなかつた。

何故なら、シアンに届く直前に千冬さんが受け止めていたからだ。

「なー…なんだよ？」

下端は、千冬さんが放つオーラ的なものにひるみながりもせぬ。

「貴様は、今シアンに手を上げようとしていたな…？」

千冬さんのあそひっこ声で下端は、ピクッと血を震わせる。

「お、おひ。だからどうした？」

下端の声は裏返つてくる。

「…フ…フハハハ、」

急に高笑いを始める千冬さん

「ヒツ！」下つ端は、失禁してしまつ。

「さうか、じゃあもしかしたら、シアンが殴られて死んでしまうかも知れなかつたよな？」

だつたらよ…殺されても文句は言えないな？…ここで殺す…！！！」

そう言つて、千冬さんが下つ端を殴りつけると下つ端はきれいな放物線を描きながら、何故かパンツ一丁になつて飛んでいく。

ドサ、下つ端は完全に伸びてしまつた。

「「「「…………」「」「」「」それを見ていた人たちは、言葉を失つてしまつた。

だが、それも一瞬の事で、次の瞬間にはざわめきに変わつていた。

「おいおい、やべーよ、あの下つ端ボンゴレフトミコーのやつじやないか？」

「えー…まじかよ？さつあと逃げようぜー！」

そして、周りの人間が徐々に消えていく。

そこによつやく正氣に戻つた千冬さんが事の重大性に気付く。

「…もしかして…そつとうやばい事をしてしまつたのか？」

流石の千冬さんも額に汗がにじむ。

すると、どうやら結構の方の人が何時の間にか居た。数は、だいたい20人前後。

「おい、家の者に手を出してくれたみたいだな……？」（イタリア語）

「ただじやおかね…ぞつてあああああ！…！」

僕君が雾因駆で話してしたが  
急に驚きの声は変わる

「お、おおお前は……」ついに、顔を蒼白にする。

「あの時の…ピザ事件の時のガキ…」

そう言う行つて彷彿させられるのが、シアンが単身イタリアに行つた時の事だ。

「ああー！ そう言わされてみれば……」

「あの時の涙みを隠せりやせても、ひづけ」

結構上の方のマフィア達は、一斉にシアンへ襲いかかる。しかし、ドーン、マフィアたちは吹っ飛んで行つた。

「「「「「グオオ！？」」」」

「シアンに攻撃する奴は、許さん！！」

そう言って千冬さんがマフィアたちをオーバーキルする。

吹っ飛ばされて行くマフィアたち…

彼らの心は、同じだった。

「あ、悪魔だ！」

その後、イタリアマフィアの間では、藍川シアンは、世界最強ブリティッシュ・エンペラーさえも顎で使う事が出来る。という噂が流れて、シアンは、最強で最凶の男となつた。

その頃のショーン達のアジート…

幹部たちは、また驚愕させられていた。

理由は、昨日より無人機の数が1／3程度増えているからだ。

「一体、どうやって？ コアの数はどうしたんだ？」

最近出番がないジョンスは感嘆といつより疑問を口にする。

「それは、私がコアを作ったからに他ならない。」

と、突然現れたショーンが何故か某ゼロの恰好で登場する。

幹部は、皆言葉を失つ。

「いやね、折角テロリストになつたんだからね、楽しもつと思つて…」

ショーンは皆の冷たい視線もあまり気ににならないようだ。

「まあ、いいです。所で… コアを制作出来るのは、確か篠ノ之束だけだつたと記憶しますが…」

いち早く石化から復活したジエノスが質問する。

「まあ、一般的にはそうだ…しかし、私ほどの優秀な科学者となれば  
そんなに難しい事じやない、それにまだ、コアを作れる科学者はひ  
とり居る。」

尤もそいつは、コアを作る気はないらしいがな…」

説明を終えると、息を吸い、少し大きめの声で告げる。

「明日の進軍目標は、その科学者だ…いくらコアを作らないと言つ  
ていても

人の考えなんて簡単に変わるからな…潰しておきたい、  
その科学者もバカじやないだろ!つかな…防衛システムは厳重だろ  
う…

よつて、明日の科学者攻略戦にこの戦力をすべて投入する。

そう、すべては、明日から始まるのだ!」

そう締めくくるジエンは、マントを翻し去つて行く。  
その後ろ姿は、なんだか哀しかった。

## 第34話～獣魔～（後書き）

しばらくは2日間に1回もしくは、3日間に1回の更新ペースになると思いますので、ご了承ください。

次回予告

シアンと千冬は、専用機の研究所に向かう。

そこで待っていたのは…

次回、反逆の炎を冠する「S最終章第35話～絶望の始まり～

## 第35話～絶望の始まり～（前書き）

批判はちょっと…

これは、お気に入り件数減るだろうな：orz

### 第35話～絶望の始まり～

イタリア旅行3日目、シャンとナタリは  
シャンの専用機開発機関からの呼び出しをシャンが受けたので  
千冬さんは、その付き添いと書つ事で着いて行つた。

今時珍しい、手で開くタイプのドアを開けるとプリン伯爵が出迎えた。

「いらっしゃい、国立IFS研究機関藍川シャン専用機開発部門へ  
ようこそ～」

長い正式名称を一語一句違わずに言えるのは、やはり頭が良いのだ  
ら。

「こんにちは、で?なんですか?用事つて?」

シャンは、早速本題に入る。

「うん、それはね、エネルギー・ウイングを標準装備出来るようにな  
つたから

リベリオンを完全に新しくしようと黙つてね…どう思つ?

もちろん、武装はそのままだよ。」

と、とんでもない事を言つ。

「…どのくらい時間かかりますか? (軽く、1週間はかかるかな?)

シャンは、大体の時間の見積もりをする

「うーん、今日中にできるよ。」

だが、その見積もりはあつたり崩される。

「…………え？」

そのあまつの速さにすこし冷静に聞いていた千冬さんも驚く。

「だから、今田中にできるよって。」

「は、はやこですね……お願こします。」

シアンは、石化から復活しリベリオンを渡す。プリンはそれを受け取ると早速作業を始める。

「いや～実は、むづ機体のフレームは出来てるんだ、あとは、コアを移して、武装をレベルアップさせてっと。」

高速の作業に驚いていたり、研究員が話しかけてきた。

「あの～

「「はー?」」

「ああ、あちらのシリコーネーターでデータ取りを行つてくれませんか?」

お一人で対戦して頂かるとうれしいです。」

研究員は、シリコーネーターの方を指しながらお願ひする。

「いいですよ～」

シアンは、即答し千冬さんを連れていぐ。

「ありがとウイキこます～これでいいデータが取れる…フフ」

最後の方は、とても小さな声だった。

シャンがシミュレーターに乗り込むと、千冬さんはすでに準備が完了していた。

「待たせたね」

「いや、別にいい。それより、シャンヒード戦うのは初めてか？（シミュレーターじゃないとシャンを攻撃出来ないからな…）」

「そういえばそうだな…（俺が、千冬を攻撃出来る訳ない…）」「一人して同じ事を考えている。

「そろそろ始めるか？」

「ああ、では…」千冬さんは、臨戦態勢に入る。すると、すごい威圧感を放つ。

「（ひー）これが、<sup>ブリコンヒルデ</sup>世界最強か…」

シャンは、手に汗をこじませる。

「尋常に、勝負…！」千冬さんは、その一言を合図に瞬時加速イグニッシュジョンブーストを使う。ちなみに使用機体は、打鉄だ。シャンも公平を保つために打鉄を使っている。

「…」<sup>イグニッシュジョンブースト</sup>シャンは、瞬時加速を使って近接ブレードで斬りかかってきた  
千冬さんを同じく、近接ブレードを使い何とか捌く。

「…よく捌いたな（シャンの剣の腕もなかなかあがったといつこと

か…）」

「いや、捌くので精一ぱいだよ…（こつて…ていうか…これホントに

シミコレータ カ？痛覚があるんだが…）次は、じつちからー。」

シアンも瞬時加速イグニッショングーストを使い間合いを詰める。

そして、斬りかかるが簡単に捌かれ、カウンターを喰らう。

「グッ（千冬トロロロロロ…）」

「どうした？シアン？もう終わりか？」

千冬さんは、シアンを挑発するような事を言つ。

「（負けられないな…）今からだ！」

シアンは、剣では勝てない事を悟り、今度は何故か入つていたアサルトライフルを使う。

ズガガガガ

突然の事で千冬さんも対処しきれない。

「…卑怯だぞ、シアン！（そんな子に育ては見えはないぞ…）」

「……（無心、無心、無心）」

卑怯だと言われても尚、アサルトライフルを使う。

「クッ（シアンめ…なかなかに卑怯だな…だが、この程度では私を倒すことは出来ん！）」

千冬さんは、初めの方こそ被弾していたが、だんだんと当たらなくなってきた。

「（や、やべえ…避けられて來てる。）」（うなつたら…  
千冬の見様見真似だが…<sup>ダブル・イグニッショントースト</sup>  
<sup>ダブル・イグニッショントースト</sup>同時瞬時加速）

を使うか…）」

シアンは、アサルトライフを仕舞うと近接ブレードを呼び出す  
<sup>ダブル・イグニッショントースト</sup>  
そして、<sup>ダブル・イグニッショントースト</sup>同時瞬時加速を使う。

これは、千冬さんの特技なので  
千冬さんも、焦るがすぐに冷静さを取り戻し冷静に対処する。  
距離、20メートルほどの所でお互い向き合つ体制になり、

「（一私の特技をまねするとはな…だが、まだ完成度が低いな…）」

「（…思つたより遅いな…いずれにせよ、これで終わるかな…もつ  
SEがない。）」

「シアン、これで終わりにしよう。」

そう言つて、千冬さんは抜刀術の構えをする。

「…そうじよひ。」

シアンも抜刀術の構えをする。

そして、にらみ合つ事一分ほど、今の二人にとつてこの時間は  
とても長い物になつた。

そして、上からひらひらと落ちてきた木の葉が地面に着いた時  
二人は、<sup>ダブル・イグニッショントースト</sup>同時瞬時加速を使い、抜刀術を撃つ。

「はああああ…！」

「「おおおおお…！」

一人の近接ブレードが交わった後、SEが残っていたのは千冬さんだった。

そこで、シミュレーターが終わった。

そんな感じに2戦目はラファール、3戦目は、テンペストで対戦した。

ラファールでは、銃器の扱いに慣れているシアンが勝つたが砲撃が他のテンペストでは、動きが鈍く、シアンはうまく扱えなかつた。

そして、4戦目を始めよつとした時、映像が途切れた。

「――?」一人とも疑問に思い、シミュレーターを降りる。すると、ドゴンと爆発音が聞こえる。

「――?なんだ?...何があった。」シアンは、すぐ近くに居た研究員に事情を尋ねる。

「えーああ、なんか、どこかのテロ組織が攻撃してきたみたいですよ!」

今は、プリンさんの防衛システムのおかげでなんとかなってますけどどうなるかは……」

「――?」二人は、さすがに驚きを禁じ得ない。そこに、プリンさんがやってくる。

「シアンくん、今、相当危ないんだけど、このラファールでだけど、

出撃できる?今、この場にIS動かせる人君しかいないんだ。」

プリンさんは、待機形態のラファールをふりふりさせながら叫ぶ。

「はい、出れまー」

出れますと言いかけた時、千冬さんによつて遮られる。

「いや、私も動かせる。」

「千冬ー」シアンは、突然の事で驚く。

「私が出撃しよう、シアンは、早い速度の機体には慣れているからなラファールは、難しいだろう?」

「…………」的を射てこよつた意見にシアンとプリンともこ押し黙る。

「じゃあ、そうしてもらおうかな~」

プリンさんは、少し考えたのちラファールを渡す。

丁度その時に副キャップと呼ばれている研究員が慌ててくる。

「しょ、所長ー!」

「どうしたの~」

「これをー!」そう言つて差し出したのは、小型ディスプレイでどこかのカメラとつながつているようだ。

そこで3人は、絶句する。

その映像は、なんと50機近いエイジがこつちの方へ向かつてくる映像だった。

「――――――」

「…なんですか？」  
「…」シアンは、混乱気味だ。

「…落ち着け、シアン。

「これは、早く倒した方がよさそうですね…」

やはり、こういう場面ではシアンより千冬さんはるかに落ち  
着いている。

だが、それも結構無理をしている部分がある。

「それは、そうだけど…手段がねえ…  
ミサイルは、さっきから撃つてみたんだけど…あんまり意味をな  
してないし…」

映像は、大量のミサイルをいとも簡単に破壊していくIIS達だった。

「リベリオンは、どのくらいで改修が終わりますか？」

千冬さんは、苦い顔をしながらだが聞く。

「うーん…あと、急げば30分で行けるかな？」

プリンさんが、歯切れが悪い言い方をするほどなので  
かなり無理をしないといけないようだ。

「…では、私が時間を稼ぎます。

その間にシアンのリベリオンの改修をお願いします。

シアン、終わり次第来ててくれよ。」

千冬さんは、覚悟を決めている様子だ。

それを感じ取ったのか、シアンもプリンさんは何も言わなかつた。  
いや、言えなかつた。それと同時にシアンは、なにも頼るしかでき

ない

自分に苛立ちを覚えているよりも見えた。

研究所のハッチ…

そこでは、ラファールリバイブ・イタリア仕様を纏った千冬さんが居た。

『それでは、ハッチを開けます。すぐに閉めますので気を付けてください』

そんな声が、千冬さんのラファールに聞こえてくる。

「了解した。… そうだ、シャンにつないでくれ。」

『…わかりました、ですが2分が限界です。』

「十分だ、頼む。」

『はい』

そして、すぐにシャンに代わる。

「何？ 千冬？」

「ああ、大した事はないんだ。ただ…」

「ただ…？」

シャンは、めずらしく歯切れの悪い千冬さんに疑問を覚える。

「いや、やつぱりなんでもない！」

「へ・まあ、いいや。気を付けて！」

「ああ、では行つてくる。早く頼むぞー！」

そつまつと千冬さんは、開いたハツチから出でこべ。

5分ほどで敵と交戦した。

「結構早かつたな……残り時間は、25分。守りきらないとな……」  
千冬さんは、特別に装備させた荷電粒子砲を放つ。

ジジジ、ドオオーン。

前に居た敵を焼き飛く。

「すまんな……」いつも必死なのでな……？」

千冬さんは、有人機だと思っていたので謝る。しかし、全く血が出ていない事に気付きて  
不信感を抱く。

「まさか、無人機!?（いつたい誰が…）」

そんな事を考へていると、残った無人機が千冬さんに襲い掛かる。

「（荷電粒子砲は、熱で連射はできないな……では、やはり私には刀だな…）」

そして、千冬さんはプリンさんを作った、雪片によく似た刀を呼び出す。

「はああああーーー！」

千冬さんは、襲い掛かってくる無人機たちを相手に善戦はおろか圧倒している。

研究所では、シアンと一緒に研究員が一緒にディスプレイを見ている。

「さすがは、<sup>ブリュンヒルト</sup>世界最強だ！ 行けるぞ！」

研究員たちは、騒ぐ。

シアンの不安も徐々に晴れていく。

「（なんとかなるかな？）」

場所は戻つて無人機との交戦域…

「（やつと、底が見えてきたか…シアンが出てくる間もなかつたな…）」

誰もがそう思つたはずだ。しかし、その考えはすぐに改めさせられる。

さりにやつてきた70機の無人機によつて…」の時の残り時間10分。

「…? なんだと?」

千冬さんもこれには、冷や汗を浮かべる。

数だけではないことは、シアンの専用機開発機関は、かなり腕のいい研究者で固められている。そんな彼らからしてみれば、新しく来た無人機とさつきまでの無人機の強さの差ぐらい見ただけでわかるようだ

絶望感をあらわにしていた。

当然千冬さんも直感で何かが違つ事には気付いている。

その瞬間、ゆっくり飛行していた無人機たちが急にスピードを上げ、高出力ビームを一斉射撃してきた。

「クッ!」千冬さんは、避けるが如何せん数が多くすぎるよけけれども出てきてしまつ。

ドガーン、被弾した個所が爆発する。

「グワアッ!」

千冬さんの体制が崩れてしまつ、その隙を無人機が狙わないわけがなく大量のビームが千冬さんを襲う。

ドガ　ン

煙が晴れると、ほとんどの装甲がなくなり、からりうじで飛んでいる  
状態の千冬さんが居た。

「…………」

体のいたるところからは、出血している。今すぐ手術をしなければ  
命にかかるような傷だ。

ピコン、千冬さんのところに通信に入る。  
プリンちゃんだ。

『……聞こくいんだけど……いつも飄々とした態度はない。

「何で……すか？」千冬さんは、息も絶え絶え聞く。

『HSのコアってHSを動かしての動力つまり、  
すごいエネルギー量を生み出しているんだ……それをすべて爆発に費  
やすと  
どうなるかって、実験した事があるんだ。』

プリンがにがにがしく黙つて、一部の研究員もにがにがしい顔をする。  
ど「うやうや、何があったのかしつてるやつ。

『すじい、爆発だったよ……でも、そこには何も残つていなかつたよ…  
塵一つとして残さなかつたんだ……その爆発力をを使えば、その無人  
機をすべて倒せるけど……』

そこまで言つと、シャーンがプリンさんに詰め寄る。

「おー、プリンさん！それって千冬に……死ねつて言つてるのか……！」

そう言つて、怒りを隠せないシャン。

だが、それは千冬さんによつて留められる。

「やめろ、シャン...ひー。」

「千冬ー。」

「プリンさんの言つた通りだ、私がこの「コアを爆発させればお前達...そこに居る者全員助かる...ゲホ、ゴホ...どつちにしら、私はもう無理だろ?...プリンさん、血爆コードは?...千冬さんがそつ言つと、シャンは、もつ何も言わなくなつた。」

「...」簡単にそれでいてやせしこ声でコードを言つ  
プリンちゃん。

「了解だ、」千冬さんは、すぐに入力する。

すると、「コアが紅く煌めきだす。

それは、本当に爆発寸前という感じで  
とてもきれいだった。

シャンには、とてもきれいには見えなかつたが。

「...シャンー」千冬さんは、最後の力を振り絞つて、シャンの名を  
呼ぶ。

「愛してるわー。」

そつ言つと、「コアはすべての無人機を巻き込み爆発した。

「俺もだよ…千冬。」 シアンは、へなへなと地面に座り込み

「あああああ…！」 大声で泣いた。

しばらくすると、研究所のディスプレイ及び世界の主要都市のディスプレイに  
シエンの顔がでかでかと出てきた。

『…にちは、全世界の皆さん！

私は、藍川シエン。この世界の救世主メシアです。』

そういうと、全世界の人たちは鼻で笑つ。  
しかし、シアンは違つ。

「…（兄貴…？）」 シアンにとっては  
ショッキングな事が一つもほぼ同時に起つり、シアンはかつてない  
ほどのダメージを受けたようだった。

『皆、鼻で笑つたでしょう。それもその筈です。  
でも、これを見たらどうでしょうかね？』

すると、シアンではなく先ほどの無人機対千冬さんの映像に変わつた。

そして、映像は千冬さんが大量のビームを受けた所で切れる。

「…」

世界が静かになつた。

しかし次の瞬間には、歓喜と絶望、好奇心などさまざまな歓声が上がった。

しかし、それは当然だ、世界最強である織斑千冬が敗れたのだから。女尊男卑に染まつた、女子たちはこれからを恐れると同時に絶望を女尊男卑に抗う者からしてみれば、歓喜

女尊男卑の影響を受けていないものからすれば、好奇した。

世界が騒ぎ出した頃、通信が戻る。さつきと違いシェンのバックにラウラ達幹部が

出でていてる。もちろんバイザーで顔を隠しているが…

『今ので分かっていただけただろう、私たちが絶対的強者である事を

刮目せよ！女尊男卑に染まつた、女子たちよ！

そして、喜べ今世界に不満を持つ者たちよ！

私たちは今、ここに世界への反逆を宣言する。

それは、今の女尊男卑の世の中の終わりを意味する。

最後に言つ、よく聞いてくれ！

この我ら世界に反逆する者の名を、

その名はスペラーチャー！』

そして、そこで映像は切れる。再び世界が静まつた。

今度は、歓声ではなく、叫びだった。

喜びの叫びを上げる者、悲しみの叫びを上げる者、まちまちだが

皆心のどこかで確信していた。

これから、世界が変わると…

To  
Be  
Con  
tin  
ued

## 第35話～絶望の始まり～（後書き）

シエン達の組織の名前は、イタリア語で幸福という意味です。

それよりも、すいませんでした：

### 次回予告

愛する人の死、唯一の肉親がテロリスト…  
シアンの心は今までにないくらい傷を負つた。

シアンは、この苦難を乗り越えられるか？

次回、反逆の名を冠するHS最終章第36話～絶望を乗り越えて～

藍川シエン

### 第36話～絶望を乗り越えて～（前書き）

減ったお気に入り登録件数が戻つてたことに  
すこし驚くとともに感激していました。

しかし、今回も減ると思いますね… o\_r\_n

+

第36話／絶望を乗り越えて／

シエン率いるテロ組織『スペラーチヤ』のデビューから3日たつた。しかし、未だに動きはない、それは嵐の前の静けさの様で気味が悪かった。

イタリアのホテルにシアンは、ずっと引きこもつていたが  
イタリアに滞在出来る日数がいっぱいになつたため、イタリア政府の  
人間に連れていかれながら、日本へ帰つた。

飛行機を待つて いる際、プリンさんが 来た。

使つ時が来ると思つから、渡しとくね。じゃうね。

そういうつてリベリオンを渡すと帰つて行く。

シアンは、それを光のない日でみていた。

そして、イタリアから日本行きの飛行機はシアンを載せて飛び立つて行つた。

空港に着いてからは、車に乗ってI.S学園に向かった。

IS学園に着くと、とても静かだつた。

だれもが、スペラーチャの件であまり気乗りしないだろうし

何より、千冬さんの死は学園の生徒への精神的ダメージはそれなりに大きいのだな。

「こ」で、イタリアの人と別れ学園寮の1001号室に入るとそこには、一夏が居た。

「…一夏」シアンは、何口かぶりに口を開ける。

「シアン！帰ってきたか…それよりあれはなんなんだ…！」  
一夏の指すあれとは、間違いなく千冬さんのことだ。

「…………」

シアンは、黙つてうつむく。

「黙つてちゃなんもわからないだろ？」

一夏は、シアンをせかす。するとシアンは、生氣のない声で答えた。

「あの、動画の通りだ。それ以上も以下もない…一人にさせてくれ…」

そう言つと、一夏を追い出す。

「まで…まだ話が…」

バタン、一夏が言い切る前にドアを閉じる。

「…………ハア（重症だな…ありや、また明日来るか…）」

トコトコトコ

シアンは、一夏が去つて行く足音を聞いた後荷物を置き、地面に座り込む。

「…………（分かつてゐんだ、いつしても何にもならないつて…

千尋の遺品整理へりにしなことな……」

シアンは、遺品整理を開始する。  
ほとんど私物を持ち込んで居なかつたので整理するのではなく、  
収納棚べらいだ。

「…………？」

整理をしていたら、何かの紙がでてきた。

「（なんだ？これ？）」

よく見ると、シアン宛の手紙の様だ。

「（俺宛？何でだ？口で言えればいいのに……）」「  
とつあえず、自分宛だつたので見てみる」と云つた。

「（えーとなになに……）」

手紙の内容…

シアンへ

これは、まあ遺書のようなものだ。

お前がこれを読んだ時私が死んでいたら続きをよんぐれ。

む？ 読んでいるのか？ といふことは、私は死んだのだな？  
シアンのことだからどうせ落ち込んで引きこもつているんだうな？  
まあ、落ち込むのは仕方ないとして…

何時までそうしてゐつもりだ？

全く、お前は私が居ないと駄目だな…

よべ読めよ…。

目を開けて前を見る、足に力を入れて立ち上がり、深く息をしる。お前には、まだやるべきことがあるのだろう？  
がんばれ、諦めるな、最後まで走り続ける！

と手紙は、縋めぐらされている。

「…………（何やつてたんだるうな？俺は、あ～ようやく踏ん切りがついたな…  
やるべき事か…兄貴…兄貴を留めないとな…兄貴のやり方だと確實にたくさんの人人が死ぬ）」

シアンは、立ち上がり、涙を拭いて深く息をする。  
そして、せつちつと目を開ける。

「（あの、無人機たちを破壊するにはまずは、リベリオン…サターナだつたな？  
あれに乗らないとな…）」

そう思い直し、リベリオンを指に着け、第3アリーナへ向かう。  
そこでは、必死に白式に乗り、一夏ラヴァーズと戦っている一夏が居た。

「…………（一夏もがんばってるな～俺も入るかな？）」

シアンは、リベリオンを展開し一夏の戦いに介入していく。

「……（シアン…）もうこいのか？」

「ああ、踏ん切りがついた。今日から、新しくなったリベリオンで戦おうと思つ。」

そういうと、リベリオンがよく見える様にクルリと回転する。

「おおーなんか、かつこよくなつたなー！」

一夏にそつ評価させる外見は…

今までの紫と赤のカラーリングをそのままに、エネルギー・ウイングの形状を悪魔の羽の様にしてあつた。

「ああ、（まあ、エネルギーウィングのミニッター外すと大変なことになるんだけどね…）

形状的にも、俺の身体的にも…）じゃあ、とりあえず模擬戦やうつ！」

「おひ、いいぢー！」

そうして、一夏の日は模擬戦ばかりして終わつた。

シアンは、一夏と別れ、1001号室に帰る。

「ただいま～…やつぱつとみしいな…」

そついいながらもその顔に悲しみの表情は浮かんでいない。

そして、テレビを付ける。

ちょうど、ニュースがやつっていたが急に画面が暗転したと思うとシエン達、スペラーチャの面々が居た。

『「Jもげんよつ、世界の皆わん。』

「…兄貴…！」

『私たちは、明日、全世界の主要IS開発機関及びコアを所持している機関に対して、攻撃を行います。それが嫌ならば、1時間後にコアを破壊し私たちに差し出すもしくは、私たちに抵抗する事です。

それでは、明日…私たちは、この世界に天誅を下す。その瞬間をしつかりと見ておけ。』

そこで映像は切れる。

「…明日か…（結構、急だな…だが、こっちも準備は出来ている。） チェックをかけたつもりかもしれないがな、兄貴…掛けられたのはお前の方だよ…！」

これは、兄弟の完全な決別だった。

## 第36話～絶望を乗り越えて～（後書き）

いやあ、すみません。

まあ、もうすぐ完結予定なので最後まで読んでいただけたらうれしいです。

あと前の話の所にシヒンの絵が下手ながらも乗つております。

次回予告

一方的ではあるが決別した兄弟

その頃、ラウラビジョノスは…

次回 反逆の名を冠するHIS最終章第37話～兄妹～

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4068x/>

---

反逆の名を冠するIS

2011年11月21日22時53分発行